

平成十五年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九一八号

川柳塔



白川協加盟

No. 918

特集・第9回 川柳塔まつり

十一月号

年賀広告募集

本誌一月号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口 $\frac{1}{3}$ 頁 二、〇〇〇円

$\frac{1}{6}$ 頁 三、〇〇〇円

★団体 (氏名・住所・電話番号など掲載)
次の四種といたします。

① $\frac{1}{3}$ 頁 六、〇〇〇円 ③ $\frac{2}{3}$ 頁 一二、〇〇〇円

②半頁 九、〇〇〇円 ④一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 11月23日

〒545-0005 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

TEL 06-6629-6914

川柳塔社

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一句」

■今年中に発表された句に限りです。

■締切 11月23日（本社事務所宛）

お知らせ

寒い季節の本社句会の開催時間を、午後一時から五時までとします。締切りは二時半。会場はいずれもアウィーナ大阪です。

平成十五年（二〇〇三年）

十一月六日（木） 四階 金剛東

十二月八日（月） 四階 金剛東

平成十六年（二〇〇四年）

一月十日（土） 四階 金剛東

二月六日（金） 四階 金剛東

三月八日（月） 四階 金剛東

川柳塔の歌

河内 天笑

むかし堺に男ありけり夏祭り 南北

堀に囲まれた旧堺市の南端に位置する「南宗寺」の庭にこの句碑があります。私の生家からは三丁半程のところで、このお寺の庭の一部にある堺市立第三幼稚園に通った幼い思い出があるお寺です。

「あしべ踊り」の作詞者としても知られる食満南北（けまんなんぼく）は明治13年7月31日堺に生まれました。初代中村鴈治郎の座付作者としてながく大阪劇界に活躍しました。奇言奇行は有名ですが中でも大の転居好きで、生涯に75回も宿替えしました。「引越してからの原稿よくはこび」。南北の訃報に接した路郎は「宿替えの今度は番地ないところ」の悼句をよせています。水府とは大正三年ある柳壇に出した句が目にとまり、親交が始まりました。以来、南北の自宅が昭和

19年まで約23年間、番傘の句会場にあてられたそうです。

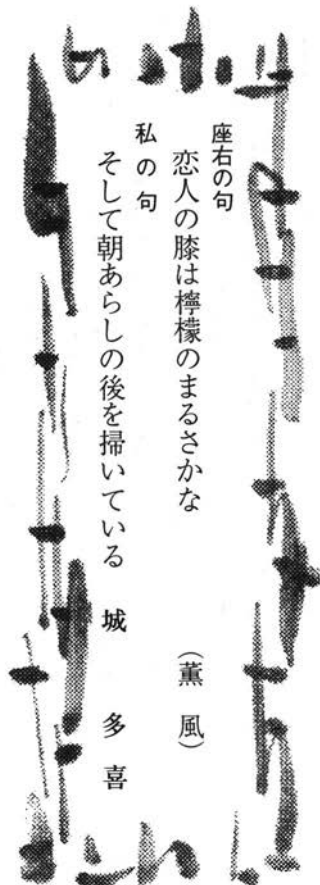
南北が堺在住の頃、すぐ近所の八木摩太郎さんが色紙を五枚頼みに行きましたところ、五枚の色紙を前に並べ、黄なら黄を五枚に、赤なら赤を五枚にという風に筆を入れると、一度に五枚の絵ができたという話を生前の摩太郎さんに聞きました。桁はずれに多才な人物を育んだ大正から昭和にかけての人情豊かな時代背景がうかがわれます。

さて去る十月五日、第九回川柳塔まつりは同人総会と二賞発表句会がそれぞれスムーズに運ばれ、宴会もいつもように楽しいものでした。しかし、ここ何年かまつりの「宴」は何か物足りないのです。ひと昔前、「大変長らくお待たせ致しました」の野村太茂津さんのギャグに始まる「わかやま少女歌劇団」がありました。ばかばかしさがとても面白く、心に残っています。林荒介さんが元気だった頃のきやらぼくは、とても纏まりのあるパフ

オーマンスを見せてくれました。「銭太鼓」は見る者を唸らされ、木村富美子さんと澤田千春さんの新舞踊の寸劇「貫一お宮」は今もまなうらにあります。栗先生の叙勲記念川柳大会のなにわ会館（現アウイナ大阪）では「白浪五人男」を見て頂きました。私の家に二三回集まっていたいたいたメンバーは藤井一二三、宮園射芳、板尾岳人、敬高須賀金太、それに紅一点の春城年代さん。私は伴奏と振付です。これは大いに受けましたが、練習のあとでわいわい飲んだ楽しさは忘れ難いものです。

そこで私の提案ですが、この際川柳塔の歌をつくっては如何でしょうか。南北さんに頼む訳にもいかず、同人・誌友の皆さんから歌詞を募集したいのです。作曲は不肖わたくしが担当致します。

来年は川柳塔八十周年記念第十回川柳塔まつりです。皆さんで川柳塔の歌をうたって踊って絆を深め合い、うんと楽しい川柳塔にして参りたいと念願しています。



座右の句

恋人の膝は檸檬のまるさかな

(薫風)

私の句

そして朝あらしの後を掃いている

城多喜

川柳塔 十一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 川柳塔の歌

怨親平等

川柳塔 (同人吟)

自選集

水煙抄

麻生路郎物語 (23)

第九回 川柳塔まつり

同人総会・各賞表彰・記念句会・懇親宴

第九回川柳塔まつりに参加して

天根夢草・安土理恵・大橋政良・森茂美

愛染帖

波多野五楽庵選

誹風柳多留二四篇研究 60

怨親平等

西村哲夫

「十にいわく、忿^{ガハ}を絶ち瞋^{ガハ}を棄てて、人の違^ヒうを怒らざれ、人みな心あり、心おのおの執ることあり。かれ是とすればすなわちわれは非とす。われ是とすればすなわちかれは非とす。われかならず聖なるにあらず、かれかならず愚かなるにあらず、ともにこれ凡^{ソコ}夫^{ソコ}なるくのみ。是非のことわり、だれかよく定むべき。あいともに賢く愚かなること^{銀輪}（輪のこと）の端なきがごとし。ここをもつてかの人瞋るといえども、還^{カエ}りてわが失^ヒちを恐れよ。われ独り得たりといえども、衆^{タタ}に從^{したが}いて同じくおこなえ。」

これは、聖徳太子「十七条憲法」第十条に示された言葉である。

反米テロに対し、「報復」「撲滅」という言葉が繰り返される度に背筋が寒くなる。

「邪悪は滅び正義が勝つ」いや「聖戦」なのだ、争いはいつでも正義の名の下に繰り返される。

敵討ちを正義とした時代、法然聖人の父、漆間時国が闇討ちにあつて殺害された、永治

茴香の花

「主 婦」

藤田泰子選……(98)

一路集「本 人」

川久保睦子選……(100)

「いろいろ」

上田俊路選……(100)

初歩教室「顔」

海老池洋選……(101)

秀句鑑賞「同人吟」

三宅保州……(102)

水煙抄

河内月子……(104)

■句集鑑賞「曼珠沙華」を読んで

井上桂作……(106)

■句文集紹介「熱い汗」

新家完司……(107)

各地柳壇(佳句地十選／中原みさ子)

田中正坊……(108)

柳界展望

十一月各地句会案内……(110)

十一月各地句会案内

楓葉・義子……(126)

■編集後記

楓葉・義子……(128)

座右の句

力み通した戦中戦後そして今

(千 秀)

私の句

攻めてきた言葉を丸くして返す

吉村 さち子

元年(1141) 美作(岡山県)の押領使

(警察署長)の立場にあった父が、当地の荘園の管理を任されていた明石定明を軽んじて

会おうとしなかったことが、遺恨の想いを生じさせたのだ。瀕死の身となった父の仇を

討つべく当時9歳の勢至丸(法然聖人)に對し、時国は最後の力を振り絞って語りかける。

「敵を討てば次には、敵に討たれる身となろう。お前に願うことは、今生の妄縁を断つて仇討ちの想いを忘れることなのだ。自他平等の利益、お前も敵も共に救われる仏の道を思い続けておくれよ」と。

心をととのえて西方浄土に向かい、念仏を称えながら眠るがごとく息絶えられた。勢至丸が出家の機縁ともなった父の言葉である。

恨みを持たねばならない相手も、親しく睦み合う味方も、共にすくわれねば争いはやまない。仏の心ゆえ凡夫には持ちにくい事ではあるが、少なくとも「聖戦」などとは、あり得ない。今更ながら、あの時代に憲法を定められた政治家、聖徳太子の偉大さを思わずにはおられないのである。

平等とは分け隔てなしの心と聞く。これは凡人には分らない。なぜなら我々は物事を分けてしか理解できないからだ。怨親平等の仏の世界に、唯々うなずいていくしかないのかも知れない。



河内天笑選

鳥取県 新家 完司

気分良く腹減ってゆく日曜日

僕が乗る飛行機だけは墜ちぬよう

攻めて来る胡瓜ピーマン茄子オクラ

ニワトリの卵に深い恩がある

ひとつろしのニュース観ながら晩ご飯

カラス鳴き野良犬が吠え夜が明ける

和歌山市 楠見 章子

汗をかく私をわらうからす達

梅干しを食べるこめかみからたべる

留め袖の笑顔ロビーに溢れでる

ドンファンはスリーサイズをよく当てる

足の立つ深さでブランドにおぼれ

風鈴も擬音も降らぬ窓ばかり

東大阪市 谷口 義

おばあさんはすぐ核心にふれてくる

はったりも少しは添えて元氣です

丸暗記今は非常にむづかしい

ポケットに入れたのはわたしのお金

枝豆は着のみのまま茹でられる

料亭で出る枝豆は品がある

砂川市 大橋 政良

青い夢レタス一枚から貰う

七人の敵にこの顔一つだけ

遺言とも遺書ともなった置手紙

たれ流すように未練を口にする

ハンモック風がめくってゆくページ

インク切れ息切れ僕のボールペン

竹原市 岩本 笑子

ペットショップ時に悲しい目と出合い

赤トンボ ツンツンツンと秋運ぶ

焼酎をロック考え事があり

無にかえれ かえれと波は岸を打つ

見えぬ矢をするりとかわすイヤリング

今宵満月火星に乾杯しています

弘前市 高橋 岳水

産み分けの技術を神はよろこばぬ

おろおろと不作の田圃見て回る

昆虫を生け簀にして夏果てる

負け犬が黙して降りる無人駅

錆止めを塗る人生の折り返し

いのちとは何かと思う蠅叩き

鳥取市 倉益 一瑠

北風に腰ひくくして待つチャンス

笑われた理由を計りかねている

落し穴天狗の鼻が落ちてゐる

丸い輪がすつきり書けたことがない

お地蔵のソフトな顔を頂こう

都市砂漠やさしさだけで生きられぬ

富山市 舟渡 杏花

舌が滑って失うものがまたひとつ

女医さんの裏に十葉干してあり

伝言板 あなた馬鹿ねとそれつきり

うつの日の風船を吹く破れるまで

人知れず泣くこともある鬼あざみ

人を恋う屋台の隅の忘れ傘

海南市 三宅 保州

いつ爆発するかわからぬ身体です

浴びるほど薬を飲んで元気なり

創造の最たるものは命なり

器用貧乏すぎる三色ボールペン

カードお持ちですかとどこでも聞かれ

走らないときには邪魔になるクルマ

三田市 北野 哲男

鼻ピアス席を譲って背を向ける

薬にも毒にもなれる花の性

一桁に昼寝大事なスケジュール

この頃は傘に名前が書いてない

焼肉と和食四対一で負け

涙目の原監督を見たか見たか

富田林市 中井 アキ

糸電話あの日太郎を好きになる

ローヒールさらりと夏の恋量む

トランプの王様だから愛される

軽口の男と軽くティータイム

残り火を集めてみても水中花

突然に炎となつたくすり指

宝塚市 嵯峨根 保子

したしさは火星 鬼灯いろをして

人間に出来たらベンの試しがき

目札の人と踊れた民主主義

削ること埋めることより難かしい

出世魚逃がしたところある港

いつまでもワルツのままの喫茶店

東京都 播本 充子

先頭でないから出来ることがある

8月27日火星人は来なかった

63歳素手にて蟬をつかまえる

たそがれて文字の大きな本が好き

ケータイを持たない妻の軽い靴

東京都 後藤 早智

還暦の女節目のクラス会

各々の歴史抱えて寄せる膝

大文字焼きに見つけた指定席

迎え火に送り火遠い町の盆

古書市でふるさと見つけ買ってくる

東京都 岸野 あやめ

優勝旗涙まみれで汗まみれ

コマーシャル手抜きばかり教えはる

念願の同居へ少し曲がる背

母さんは魔女か何でもお見通し

お昼すぎもう売切れの饅頭屋

東京都 清原 悦子

控え目な笑顔が風を丸くする

第一歩孫は呼ばれる方に行く

叶わない夢でも夢に支えられ

気持ちだけ貰っておくと母は言う

丁寧に唄えば音がずれてくる

横浜市 菊地 政勝

自分史の裏に潜んだ修飾語

熱唱のあとから胸が込み上げる

髪染める気力おんなを失わず

喪服脱ぐせみの抜け殻残すよう

病名をすでに知ってた千羽鶴

横浜市 小野 句多留

秘密なく刺激もなくて日もすがら

四日間雨で避暑地の愚痴を聞く

夏嵐ひまわり軍は総くずれ

間違いを認めぬ妻のまつしぐら

寝返りの無防備になる熱帯夜

横浜市 保田 絹子

物忘れしても言い訳だけうまい

悪態を吐いてストレス更に溜め

鬱憤を霽らす伴侶が居ればこそ

しがらみに散骨の遺志揺らぎ出す

あるがまま生きよういのち昏るるまで

静岡県 藺田 獏 杏

盆帰り母の料理のフルコース

裏声を時々聞かすあぶら蟬

ひたむきに育てる親に子もなつく

ふる里の山に似ている見とれてる

親族に金の絡んだ仲たがい

滋賀県 中 宗 明

炎天に耐える体力戦中派
旅に出て人の親切忘れんぞ
考えが判らず困る無口な子
おだてると止まるを知らぬ調子者
夏休みゲリラの孫に疲れ果て

京都市 高 島 啓 子

経典の出たこなごなのバーミヤン
百均のおざぶ待合室にあり
つまらない人をボスだと思ふ犬
横顔は紀子さまに似た伎芸天（秋篠寺）
私の城に帰って眠ります

京都市 都 倉 求 芽

厄年はみなのにこえた保険証
名刺より老人パスがものを言う
幽霊も会社になるとなお怖い
冷蔵庫残暑長いと唸ってる
翔び方も色もひかえめ秋の蝶

京都市 丹後屋 肇

リストラをバネにベンチャー立ち上げる
矢印に思案している靴の跡
跳び越える溝の深さを聞かぬまま
ソムリエに漬物ねだるフルムーン
老残の身をエスコートするヘルパー

大阪府 米 澤 俣 子

言い勝った時から距離が遠くなる
この白髪神の賜いし褒美かも
真白な肌着夫に着せる自負
横着に即席うどん加勢する
郷愁はほんのり甘いあけびの実

大阪府 初 山 隆 盛

涼風が立って五欲が始動する
長袖の下着に秋の氣をもらう
野仏に色香を添える彼岸花
時代から残されそうで街へ出る
満天に一番星を探し当て

大阪府 澤 田 和 重

インパクト脳に与える本を読む
試されているのか女から誘い
貧乏神だけがしつこく付きまとう
妻の意地無口三日も通してる
ライバルの世辞に油断をしよう

和泉市 中 川 楓

慰めがぶつきらばうで温かい
秋暑し一言多い妻元氣
平凡という幸せの秋刀魚焼く
朝涼し心音トトと狂いなし
秋七草母の着物に咲いている

泉佐野市 山本蛙城

列を出て蟻にもさぼる奴がいる
年金の井戸も涸れる日来る予感
戦後派の改憲論よふざけるな
目障りなサラ金生保コマーシャル
黒一点オットセイではないけれど

茨木市 藤井正雄

栄転で大きく見えてくる息子
古里は磁石のようだ盆と暮れ
催促が手厳しい子に借りた金
ステテコで電話敬語を使う祖父
無理言いに少しお酒を入れて行く

大阪市 西出楓楽

暑い日はあえてカレーと熱いお茶
努力してみても天才でないとい知る
空手 塾 ピアノ五歳も忙しい
汗をかく人のうだつが上がらない
よく食べる今をときめく人だろう

大阪市 前 たもつ

追悼へ名月曇るニューヨーク
貧乏性楽しく生きること知らず
カレンダー今朝も元気に指図する
雨降って息吹きかえす土の道
一病に五臓六腑を監視さす

大阪市 神夏磯典子

みだれ萩今日こそ美容院へ行こ
敬老日亡父母の愛よみがえる
愛情か義務か介護が苦にならぬ
調子いい時はぬかるみ気にしない
もうう理由ないが嬉しい贈り物

大阪市 鈴木トヨ子

難聴を気付かれまいと演技する
愛犬も共に老いたり白髪ふえ
ライバルを越す術いまだ模索中
戦友の顔なつかしむ満月よ
盆供養嫁に接待教えとく

大阪市 板東倫子

異端者が迷彩服で返り咲く
誰のせいと言わぬがこころささくれる
死角から監視カメラに睨まれる
赤い星と月が並んでいる白露
此処は何処あんたは誰と老母が聞く

大阪市 玉置英子

仲の良い夫婦だけれど趣味は別
献血に高脂血症指摘され
夏の日も欠かさず膝に貼るカイロ
元氣願いゴーヤの種も食べている
お月さん止めて下さいかくれんぼ

大阪市 岩崎公誠

哲学のない病院で検査漬け
デジタルの時代に古い時計捲く
舌の上転がつて出た嘘の玉
障子紙貼りがえた日の上機嫌
休日がラッシュアワーの救急車

大阪市 津守柳伸

再生を願う大和屋能舞台
コスモスに抱かれ幼い日がよぎる
すすきの穂揺れて即答せぬままに
古希祝届きシヨックが隠せない
失敗を許す笑顔にたどりつく

大阪市 津守なぎさ

陽の恵み浴びニガウリの成育記
森林浴金剛山にある生氣
期限切れせんべい鳩も寄りつかず
車窓へのエール稲穂は波を打つ
ししおどし舞妓の過去は謎がよい

大阪市 榎本日の出

腰ふれば心と体リフレッシュ
現実を知っているから夢ばかり
楽をしてつかんだお金減る早さ
お宝を自慢する人隠す人
皺を取るコラーゲン入りもう無理よ

大阪市 中澤伽羅

善人が寄って間延びのした話
手抜きした夕餉やつぱり物足りぬ
手間かけた料理ゆつくり食べて欲し
思い出し笑いゆつくりお茶を飲む
お昼寝がしたかったなあ屋形船

大阪市 伊藤博仁

四国路の遍路夢見るスニーカー
食べ過ぎて落ちるなすずめそこ五階
落ちてきてもがいて蟬は終をみせ
トラックに追突された生きていた
五十年掛けたからこそ酒も飲め

大阪市 大川桃花

二百三キャラ不吉な予感するダイヤ
十センチの隙間へ座る肝っ玉
いいところ選って隣へお裾分け
こだわりの一番乗りへ夜具持参
体によい納豆わたしには危険

大阪市 奥村五月

小柄でも度胸のでかい妻がいる
年金でなんとか妻に捨てられず
触らねば妻も地雷も破裂せぬ
煮え返る腹へ妥協の生ビール
駄菓子屋を続け母さん惚け知らず

大阪市 寺井東雲

学校で文化映画を見て育ち

缶ビール開けるぐらいはまだ出来る

夫婦仲いろいろあつて別れたい

神様は姿見せぬがお見通し

僕ならばノーベル賞は妻選ぶ

大阪市 津村志華子

納豆の粘り貰つている余生

飽食にうなぎ昇りの血糖値

限りある命よ蟬もわたくしも

暴走のバイクに耳をさらわれる

無人駅さみしい顔の券売機

大阪市 川原章久

冷やかしの客三 四人古本屋

グローブをバットに吊し孫帰る

戦せぬ国の童の地藏盆

蟬の声ストンと落ちた地藏盆

寺の鐘静めるように夕茜

大阪市 小泉ひさ乃

万歩計帰りは疲れ無料バス

灰汁抜きをしてシンプルに生きている

それなりに諦め上手老いの坂

検査入院行つてそのまま帰らない

狂いそうな残暑熱気のタイガース

大阪市 西川更紗

お互いに勝手しながら長続き

偶然に出会つた友の若作り

一冊の詩集に心こだまする

票稼ぎ狙う総理の始球式

突つ張つて互いに譲る事もなし

大阪狭山市 矢野梓

散骨の話題膨らむ敬老日

讃岐富士見えるとほっとする帰省

鏡見るたび思い知るダイエツト

クラス会までに三キロ落します

強がりを許してくれるのは家族

河内長野市 加島由一

お茶飲んで金を返してさようなら

情熱を引き出すためにちよつと酒

たとえばと妻反論の口火きる

職安に行くのに髭を剃っている

後悔をしながら飲むとよくまわる

河内長野市 山岡富美子

職退いて鬼の仮面を裏返す

美人女将つけ入る隙のない笑顔

善人の仮面を被る高金利

少年の妥協許さぬ青い面

七色の面を抱いてる処世術

河内長野市 石堂潤子

欲はけて命が惜しいなと思う

愚痴だけで済まぬ話になつてきた

まんじゅうで憂さは晴らせぬ戸の鬱

エプロンの似合わぬ夫それでいい

皺一本増え赤い服あきらめる

河内長野市 村上直樹

居酒屋に時事放談の指定席

不可侵のほどよい距離で飲み仲間

斗酒浴びて李白と夢の桃源郷

南無三宝 仏も剥けば鬼とかや

来るも風びゅうびゅう往くも風

岸和田市 原

さよ子

あたたかい心集まる募金箱

お人好し使いこなせぬ二枚舌

もう無駄と知りつつ今朝も塗っている

七草も知らず情緒のない世代

美辞麗句 心の底をはかりかね

岸和田市 岩佐ダン吉

月もひとりきつと言いたい日もあろう

ゴシップで生き延びる人稼ぐ人

手の温みかすかな兆し抱いている

失う物無いなと知ってから強気

ころころと器用な舌を持つてはる

堺市 宮本かりん

口実はいらぬおいしい秋の酒

決心をしてから自信ぐらついた

あいまいに言うたばかりに付けがくる

仏飯を大盛りにして恙なし

傷ついて繁る古木に父を見た

堺市 山本半銭

両の手で温めてやる泣きつ面

同僚のピンチすばやく見逃がさず

ゆっくりとしては居られぬ鬼の留守

知恵の輪に呪文をかけて嵌り込む

ペンもつ手針もつ指に歳の影

堺市 矢倉五月

八つ当りさらりと受けてやる度量

二重橋渡った誇り妻にだけ

重病を見舞う心の準備して

日記帳隅のマルペケ何やった

夕食に食べた物まで書く日記

堺市 志田千代

遅刻した人にも先ずは熱いお茶

かたつむり あれはあれなり旅支度

菊花展金賞だから そうだろう

わが庭は生え放題の菊花展

妻のぐち我関せずの日向ぼこ

堺市和田 つづや

退職をしてから爪がよく伸びる
一を聞き二を悟るなど他人事
傷心で飛び出す旅にすぐ飽きる
酔うほどに可愛い人になつていく
イエスよりユダに真理があるのかも

堺市村上 玄也

奥入瀬も濁流となる雨上がり
使い方知らぬ消火器備えてる
怪我もせず病気もしない怠け者
色恋に未練残してまだ老いず
目をむいて高見盛は気合入れ

堺市神原 文

熱帯夜すすきも月もうろたえる
萩桔梗咲いて千代女といふわたし
満足と思う瞬間から退歩
目がしらを隠す眼鏡が派手すぎる
エネルギー放射し合つてゆくふたり

堺市齋藤 さくら

夏バテの割には目方増えている
押し利かぬ夫へ強くなった妻
ゆつくりと話す割にはあわて者
火星にも何か住んでるロマン持ち
にこやかにお茶が旨いといふ住職

堺市西村 りつえ

議事堂へ雷さまが活を入れ
月 火星しつかり見とくランデブー
いち早く秋を掴んだ腹時計
海老天の怒り油が目に入り
赤トンボに先導されて父母の墓

堺市源田 八千代

満月と火星の対比 大宇宙
面目躍如 強かなタイガース
高見盛の気合で相撲盛り上がり
好き嫌い言つてはおれぬリクルート
子はゲーム母はメールに夢中なり

四条畷市吉岡 修

この広い桂離宮を侘びという
悪いことせんで金はありません
如才なく打ちとけたふりぐらいする
生きてゆく垢を洗うてくれる酒
あの甘いラストダンスに踊いた

吹田市早川 棲世

ローマ爛熟期 日本は神が棲み 旅の思索 その六
アクティブな首相で首都にある活気
地獄絵のなんでもありという内戦
夜は街歩けぬ世界一の国
窮極の秘境は人の心です

吹田市 山 本 希久子

吹田市 野 下 之 男

日帰りで秋をしつかり持ち帰る

コンビニで売ってるおでんも情報も

大和路の秋 み仏に会うしじま

本流も支流もみなもとは一つ

気に病んでキリキリみぞおちが痛む

吹田市 大 谷 篤 子

早朝にお喋り好きな雀達

雨止んで草の香りにいのち知る

涼風に体重のせてよく歩く

強がりを言わぬと涙零れそう

久し振り肩の凝らない友が来る

吹田市 岩 屋 美 明

赤トンボ映えて明日もいい天気

頼んでも尻を上げない達磨さん

美しいナースに出会い病んでる

木の心読む親方の庭鉢

嬉しくて話相手の欲しい酒

吹田市 穴 吹 尚 士

整形の鼻が地顔に馴染まない

ふくよかで糠味噌臭い世話女房

チャンスには強い男の陰の汗

上役の鼻毛の向きが読み切れぬ

人柄が丸いと何も決まらない

国連を袖にはしたが当てにする

遅刻して神に命を拾われる

幼稚園言うこと聴くは今の内

日記には借りたお金を書いてない

チワワには何か分からんコマースヤル

高石市 浅 野 房 子

あの時のわがまま今の侘び住居

許したのではないあきらめたのです

ビタミンと安定剤で生きている

月並でよし人並でよしとする

着る服はないがタンスは満杯だ

高槻市 乙 倉 武 史

らしからぬ風貌ルーキー受けが良い

湯豆腐の湯気にしみじみした話

富士山のゴミヘマナーが嘆かれる

外見で判断嘘が見抜けない

節約が板についたがケチ臭い

高槻市 左右田 泰 雄

手作りの豊かな香り皿に盛る

敬遠のかたちで役を外される

じつくりと旬の値段を噛みしめる

沈滞のムードに風穴を一つ

超いじわるDNAのしわざかも

高槻市 生田 義一

なつかしいお国訛りに打ちとける

ハイカーと挨拶交わす散歩道

眠いなあ床に入れば眠気さめ

気が付けば我町内の最高齢

家事支援コンビニ弁当徐々に増え

高槻市 西谷 治三郎

雑巾も百均で買うヤングママ

またおいで 手を振る母の背の丸さ

値切ったらあつさり値引きまた迷う

薬やおかずやわからん食事する

目的地無いのに歩く喜寿の坂

豊中市 安藤 寿美子

遺言はひとこと みんなありがとう

定量を少しオーバー月見酒

握手してそして別れて右左

九月場所打ち留め次は阪神戦

欠席や入院やというクラス会

豊中市 水野 黒兎

二階まで十三段の家に住む

祭り笛少年になる男たち

祭り寿司寡黙な父は飲むばかり

空室と知らずに回る扇風機

他人事と思うが株価値にかかる

富田林市 藤田 泰子

老いはよしきのうの事をすぐ忘れ

スローライフ青信号を待っている

忘れられないようにときどき顔を出す

奈良まちで一升枧に会いました

血管の掃除おやつのところてん

富田林市 中崎 深雪

こだわりを整理したくて寺参り

戦への布石に不安募りゆく

会いたくない人とはなぜかよく出会う

たくさんさんの人の支えでわたくしが

満月にあなたいなくて一人闇

富田林市 片岡 智恵子

優しいな私に油断してくれる

正直に生きて小さな城築く

ときどきは狂う時計で恙無い

好きで選んだ道だから苦にならない

カクテルにとけた女の嘘ひとつ

富田林市 大橋 鐘造

矢印を曲げて己の道を行く

もう逢わぬ逢わぬと決めている涙

ゆうゆうと見せて中味は火の車

口下手の話す言葉に嘘はない

風雪に耐えて大樹の息づかい

寝屋川市 籠島 恵子

寝屋川市 森

茜

足腰を鍛えておこう冬支度

曼珠沙華あの世この世の真ん中で

晩秋はこんなものかと花の寺

欲ばりにならないように物を捨て

まぼろしを追いかけたのももう遥か

寝屋川市 江口 度

古傷をなめてでんでん虫に逢う

どくだみに会う楽しみのしじみ蝶

何ひとつ動くものなし子の昼寝

寝つかれぬ枕になった軽いうそ

粒選りにされて酷使をされている

寝屋川市 堀江 光子

満を持し勝負の席へゆつくりと

作られた笑顔一緒に笑えない

昼寝覚めこの世に戻る外になし

合掌のとどの詰りは己が事

人の目を怖れ神の目を忘れ

寝屋川市 平松 かすみ

長生きの目標がある夫です

作業服汗をたっぷり吸うている

子にパワー送る好物たんと盛り

珍しく夫がくれた胡蝶蘭

時々悪女にもなる年の功

落陽にあずけて家も子も忘れ

月見草黄色い自負も北の湖

ひまわりが見つめてるからキスしない

どしゃ降りの街で開店するカフェ

母さんは石鯛 なんでもかみ下す

寝屋川市 坂上 高栄

切り札を胸にしるばせ会いに行く

唇に一寸紅さすふた心

水蓮の心の秘密覗かれぬ

迷路から抜け出た空の青さかな

お粥さん嫁ごに炊いてほしかった

羽曳野市 安芸田 泰子

自分にも人にも甘くすぐ許す

山盛りの愛が少うし重くなる

代替り近くて遠い里の家

陰謀のごとくに雑草はびこりぬ

考えのまとまり難い熱帯夜

羽曳野市 徳山 みつこ

少子化を知らぬゴーヤに癒される

蝶に蜂千客万来ニラの花

ひとごとと思えば腹も立ちません

雑念が湧いて頭が冴えてくる

音あかり消して虫しぐれに浸る

羽曳野市 吉川 寿美

それからの雅号がひとり歩きする
思いつ切り跳んだところに水溜まり
虚と実の間でゆっくり水を飲む
B面の顔が案外受けている
三度のめしがこんなに旨い凡な幸

羽曳野市 酒井 一壺

人作り忘れたつけはもどらない
人間の弱さ知ってる酒の毒
叱られんようになったらもうおわり
叱られた人はどうまい叱り方
聞く耳を持たぬ人間恐ろしい

羽曳野市 川口 信子

うなだれてすてられにゆく扇風機
暗算を忘れさせない消費税
人を愛し人を憎んで人なるや
ドームより青空が好きホームラン
生きてきた形に顔が添うていく

羽曳野市 三好 専平

じっくりと三分の理をも聞くゆとり
火星には火星の人がいてほしい
大ばらを吹いて悲しい漫才師
あの世でも一緒になると嘘をつき
紫陽花が枯れて仙人もう眠り

東大阪市 北村 賢子

精一杯今日を生きてる籠の鳥
炎天下ころがる蟬を埋めてやる
天高くゆつたりと浮く赤トンボ
星影のワルツ隣は金太さん
この火星 月に揺れてるイヤリング

東大阪市 指宿 千枝子

春日野に詣でたことも書く日記
置物のように雄鹿は座り居り
台風が過ぎたも知らずよく眠り
真ん中に座りばあちゃんよく喋り
箒より帽子の好きな魔女も古希

東大阪市 安永 春

ばあちゃんに九月がやつと夏休み
踊りの輪赤い鼻緒が華になり
お供えは西瓜がよいと仏様
一步先読んで運命変りだす
ラガーマン背広姿に見違える

枚方市 鈴木 政子

朝顔がすっかり消えた住宅地
人並みに頭痛持ちとなり
ナツメロで乙女時代に還る会
北の美女団 徳川時代想い出す
トラキチの夫の位牌と応援し

枚方市 海老池 洋

桃割っても竹を割ってもない童話

ゆつくりを絵にしたような水車小屋

ご先祖を孫に教えて墓参り

人生を変えた遅刻も二度三度

古日記いっぱい詰めた玉手箱

藤井寺市 高田 美代子

よく食べてよく寝てスタイル言えません

フルムーン少しリッチに予約する

噂など知らぬ素振りの流れ雲

ジャジャ馬よアキレス腱をお大事に

初物に祝儀相場の競りがとぶ

藤井寺市 太田 扶美代

諦めぬてっぺんの葉が落ちるまで

指切りがまだ一つある旅半ば

ログハウス定年の灯が揺れている

レモンティーまだ核心に触れてこぬ

同情の痛さにじっと耐えている

藤井寺市 楠 昭子

落ち込んだボクを救ってくれる犬

豊かさの中で孤独になっていく

一目ぼれそれから僕に骨がない

立候補およしなさいというダルマ

まだ少し役に立ちます古い傘

松原市 小池 しげお

森繁を目指して生きてゆくつもり

幽霊に出るほど化粧して来られ

鬼の涙見てから鬼が好きになる

矢印で来た盛大なお葬式

大好きな人と暮しているらしい

松原市 國見 蘭香

手抜きして時間の袋ふくらます

言葉より背中で語る母の愛

落ちこむとソフトに知恵が回らない

深呼吸ひからびた脳膨らます

年金下げ不安大さくなるばかり

箕面市 出口 セツ子

瞳の中に男を飼っている魔性

不幸みな他人のせいにする女

人間を信じないから金が好き

行き方も愛も直球勝負です

人間が好きで明日が弾み出す

守口市 井上 桂作

なんとなく清楚な女性光ってる

私小説うそを書くのも己がため

風鈴のせわしないのも歳のせい

盆踊り暑さ忘れて夜ふけまで

歳かなと考えることやめにする

八尾市 宮崎 シマ子

祝福をされる秘密をもつふたり

免許証返して肩の荷が降りる

うっかりと頷き張本人にされ

雑学で賢く生きていく雑種

一拍子狂ったままで歌い切る

八尾市 宮西 弥生

年齢のせいにしておく気合い抜け

どんくさい動き見ている日の鏡

外面の仮面を脱いだ仏の日

としよりの日から気合いを入れ変える

下心男口マンの一つかも

八尾市 篠原 いつふみ

噛めるかと脳が入れ歯に聞いている

カラオケの下手を入れ歯の所為にする

ピンポンに慌てて入れる総入れ歯

上にぎり入れ歯にタコが大き過ぎ

総入れ歯ヤスリでこすり叱られる

八尾市 高杉 千歩

こぼれ萩ひとりになって丸四年

震度6シミュレーションにただ脅え

土壇場の知恵はご加護だと思ふ

ストレッチ エアロ無邪気に喜寿なかば

気の毒な話へうっかりと笑う

八尾市 井尻 民

曲り角昔愛した人の住む

汗と泥 母の野良着は道しるべ

色白の七難かくしてそれかいな

かみ合わぬ会話にそっと汗をふく

シンボルの通天閣が点く浪速

八尾市 村上 ミツ子

蟬の声虫の声聞く墓参り

どこでうったか黒ずんだ膝小僧

満月と逢瀬楽しんでる火星

でかい台風生まれたというニュース

お月見へカタカナの花仲間入り

八尾市 生嶋 ますみ

家計簿も残暑きびしくばてている

年金を金の成る木と当てにされ

阪神の独走面白くないね

肩の荷がまだおろされず粥を炊く

マネキンの誘いに乗って派手を着る

八尾市 神原 まさと

好き嫌いと云うたら手抜きされ

稲光り待っているのに遠ざかる

デパートの地下が楽しい医者帰り

一本のヘチマ残暑に耐えている

留守番の責任重い金魚鉢

八尾市 山本 宏 至

尼崎市 春城 年代

無位無冠 私の顔が名刺です
近道の線路を渡る子が絶えず
千羽鶴祈る形で折っている
金かけて汗までかいてやせません
でこぼこ道だから人生おもしろい

相生市 中塚 礎 石

赤とんぼ塔婆にとまり経を聞く
八起き目は妻も手伝い足場組む
毒を持つ花に口づけしたくなり
古里を車で走る廃止線
砂遊び新発見をした瞳

芦屋市 黒田 能子

公園の近くでもいい紅葉狩り
等分に割ったつもりが揉めている
おばあちゃんの子供の頃を聞きたがる
丁寧な育児日記は長女だけ
大阪のと真ん中でも標準語

尼崎市 春城 武庫坊

夏布団世話にならずに夏送る
回り道してでも土の道が好き
橋を渡ると必ず出会うお月さん
秋の花屋でいらだつ心休ませる
ダイヤ婚励ましあつて夢を描く

のろのろと口内炎が居続ける
六十代のゲームについてゆけぬ老い
家の中に有るにはあるに出て来ない
年ごとに診察券がたまりだす
連休の真昼音なしさるすべり

尼崎市 田辺 鹿太

カロリーをいうからめしが旨くない
うろたえる事もあるまい まだ傘寿
失敗が怖くて真ん中を歩く
八起き目にもう転ばない杖を買う
砂漠化のテストに耐えている地球

尼崎市 山田 耕治

ばらばらに食べても傍に母がいる
死ねばすぐ捨てられるものためている
狭くても朝日の入る台所
曲がってもうれし にがうり生りました
あの人のこと書くための日記帳

尼崎市 内田 美也子

枯れそうになつて真の愛を知り
律儀さを人に教えて花の道
欠けてゆく記憶を繋ぐ里の風
遠き日の記憶に亡母の白い足袋
磨き合う話持ち寄る午後のお茶

川西市 西内朋月

善人へ貧乏神が寄ってくる
善戦と書かれ悔しい甲子園
駅前に帰宅遅らす店がある
ゆつくりと飲んでる時にくる電話
見渡せばだあれもない蝸牛

西宮市 西口 いわゑ

時々迷路で悪と手をつなぐ
いろいろをのり越え ばらは赤く咲く
落日というセレモニーに癒やされる
どんな時も本はメッセージをくれる
コスモスを無造作に活け友を待つ

西宮市 山本義子

もの豊かところ満つにはほど遠い
ころ映す鏡あつたら怖からう
手はじめにネクタイの色お褒めして
雨一日部屋片づけも飽いてくる
八十円切手以上の縁がない

兵庫県 大谷 幸次郎

マウンテンバイクとやらを買えと言う

秋風に乗る満天のアキアカネ
風に乗る祭り囃子は猪も聞く
恋幾つ別れもいくつ出合い橋
掬われてからの金魚の一代記

奈良市 米田恭昌

十七年寝ていた虎が目覚ます
サバイバル控えの虎が牙を研ぐ
少子化に子離れ出来ぬパパとママ
鯛のシャワーを浴びて曼殊院
詩仙堂にわか詩人が指を折る

(洛北を歩く)

奈良市 天正千梢

雑草の花ぬくさえもいとおしく
シャネル5番に縁なく大根ぬく
年金の事など思う絵具皿
勇み足いつも衝動買いばかり
右手骨折不自由でした三カ月

生駒市 飛永ふりこ

粉河寺住んだ昔が駆け巡る
青春はエレキとバイク戦後っ子
鈴生りのぶどうから秋持ち帰る
風の子不信すつかり忘れ去り
星空の父母に来し方問うてみる

橿原市 居谷 真理子

提灯の陰で割り勘して別れ
油蟬王者の如き七日間
ああしんど意地を通した百日紅
贅肉に真面目な骨が軋む国
海の子の孫がプールでべそをかく

檀原市 安土理恵

来る時は来るものなのさ幸不幸
悲しみの深い淵にもさす朝日
ゲームセツト癌と戦い抜いた兄
こっそりと不法侵入してた癌
泣きに来る女を包む寺の鐘

香芝市 大内朝子

未練まだ慕情が深む秋の風
老いらくの恋は貴船で舌鼓
夢売りがこの頃とんと来てくれぬ
わたくしも含めて人の得手勝手
今日が華 今日が華よと生きている

大和郡山市 坊農柳弘

郷愁がじわり錦秋道の駅
土に生き土に感謝の収穫祭
遠景に紅葉さらさら竜田川
自惚れが小さい秋にけつまずく
明日嫁ぐ娘の酌の酔い心地

和歌山市 桜井千秀

神じゃない虫けらじゃないただの人
金の奴隷かいつも片手に計算器
むなしさを抱いてチャンスを待っている
発破掛け合い母と娘の二重奏
目の敵にされて始まる武者震い

和歌山市 青枝鉄治

道草の芸が暮らしの糧となり
ポケベルが行方不明にしてくれぬ
先を読むことに不得手な手弁当
納豆を好む外人居て和む
荒れた者同士気が合う屋台の灯

和歌山市 木本朱夏

小山 村山 わが青春の甲子園
プレッシャーに耐えた男にある背骨
タイガースと泣いた笑った ああしんど
優勝のノルマ果したタイガース
喜びの美酒は静かに呷るべし

和歌山市 福井桂香

ときめきを包み眠れぬ夜を明かす
ホイのホイ火星に逢えた秋の虫
くちばしで愛撫をしよう時々は
少年のころに溜まるメタンガス
何一つ不平は言わず鬼あざみ

和歌山市 松原寿子

立ち上がる気合味方の風が吹く
切り札を使い果たして闇に遇う
カーナビへ任せ貴方に逢いに行く
下向きに慕い心を響かせる
日記帳いきなり過去が噴火する

和歌山市 牛尾緑良

月の出を待つひとときの聖母像
中古車の何やら味のあるシート
卓袱台の頃の記憶が母にある
鷹の爪 父の権威はさほど無し
優勝をした阪神が好きになる

和歌山市 田中みね

もう嫌だ言いつつ巨人見る私
言い返す知恵はあるけど負けておく
余計な事いう孫連れてどつきどき
磨いても変わりまへんで言う鏡
ほめられてその気になって試着室

和歌山市 玉置当代

優勝に飛び込むだろう泥の川
骨抜き魚で育つもやしっ子
いつまでも甘えていられない術後
再会の孫と遊んできたサファリ
孫達が来ると膨れる兎小屋

和歌山市 上地登美代

善悪をじつと見ている天がある
あんなにも燃えて残した蟬の殻
この残暑金魚に負けぬ息遣い
秋茄子の律義に頭下がります
なんでやろ芽の出ん種を掘って見る

和歌山市 武本碧

子育てのレシピが欲しい反抗期
湯通しをしても取れない個性持つ
群れている方へ勝手に動く足
条件を満たし枕を高くする
祭り好き祭りの梯子して歩き

和歌山市 古久保和子

かき氷キーンとこめかみに刺さる
ネオンサインの一字が消えた店構え
自転車も残暑の中で油切れ
犬の目ににんげんの足疲れてる
ガーデニング野菜畑に切り替える

和歌山市 吉村さち子

付合いの広さ人柄だと思ふ
世話好きの女でいつも悔いを抱く
営営の汗にバス代ほどの利子
負けただけど笑う余裕は秘めている
安らかな寝息にほっとする介護

和歌山市 西山幸

新しい朝の一番電車来る
にんげんの汚れに馴れてきた恐さ
負け戦ばかりだったな影法師
行きずりのひとから貰う傷薬
正常なうちに遺言書いておく

和歌山市 榎原 公子

鳥取県 土橋 睦子

踏ん張ってみても所詮は心太

こんもりと残暑見舞のきざみ葱

冬野菜蒔き終え朝のクリスタル

雨三日土の匂いの長談議

長命の哀れを語る敬老日

和歌山県 中 後 清 史

冴え渡る月に愁いを癒される

せせらぎに碎かれているお月様

繕ってみても中身は隠せない

Uターンしたい故郷に職が無い

口裏を合わせた友がやって来る

海南省 堂 上 泰 女

若者の夢に刺激を貰う秋

夢七分まだまだ生命愛おしむ

辛口で母を励ます母似の子

退院を祝ってくれる虫の宴

食器棚活躍し出す子の帰省

鳥取県 土 橋 はるお

好きな物食べても頭良くならぬ

図書館をたくさん利用した背伸び

変声期あいさつさえもしたくない

挨拶に笑顔も添えてほしいもの

貧乏をしてみると髭はよく伸びる

草じらみつけてジョギング犬とする
黄昏れて弱気の虫が顔を出す
責める気になれぬ優しい嘘を聞く
爪立てる猫の言い分聞いてやる
マニキュアの指が炊事を拒んでる

鳥取県 谷 口 次 男

インドでは雨が降ったらしい天気

戦争と平和遠くて近い仲

鳥葬にしてくれ空が飛べるから

不景気が財布に接近して困る

飽食とバカ番組と裏ビデオ

鳥取県 前 坂 なお美

煌めいてみても私はガラス玉

うますぎる話は恐い蹴り返す

お隣のごちそうとても気にかかる

嫁姑おんなじ穴の怪物だ

うちの猫気が向かないと帰らない

鳥取県 石 尾 かつ乃

港から届いたハガキ塩からい

本音今吐いたらきつと泣くだろう

防災のサイレン町を縫い村を縫い

一日をフル回転の仕舞い風呂

任せとけ今夜のメニユー僕がする

鳥取県 蔵本悦子

どぶろくを貧乏神と飲んでゐる
石地藏やさしい顔に僕もなる
地藏盆夏も終つて鰯雲

子や孫や地球の事も気にかかる
コスモスがちよつぱり秋を匂わせる

鳥取県 近藤春恵

雑草と根くらべして日が沈む
飛行機が点となるまで子を送り
節くれた指であやとり孫とする
ときどきはカンシヤク玉の鬼が棲む
色つばい事も言えずに夫婦です

鳥取県 西川和子

こだわつて親父の作る夜鳴きそば
不景気をともに受ける小商い
再出発へ熱い思いを聞かされる
古里のことを知らせているメール
母の味が一番口に合うグルメ

鳥取県 田村きみ子

美しく老いたいなどと欲です
おんなには女の背中火も匂う
梨の皮やさしい顔で母はむく
少し乱れて見ようか楽し三次会
卑怯ではないか抑えて笑うとは

鳥取県 平井栄翁

コオロギに引かれビールと座る縁
飲みたくて考えぬいた前夜祭
たんぼの綿毛と散歩するズボン
おでん屋が好きで友にはことかかぬ
昼顔の微笑み溶かす陽の暑さ

鳥取県 山本正光

閑空の遠くにあつた喫煙所
異性から好きと言われたことがない
休日に早起きすると嫌われる
坊さんと約束がありまだ死ぬ
銀行へ少しお金を貸している

鳥取県 下田茂登子

お隣の幸せばかり覗く犬
夫婦仲知らない子供よく眠る
何が邪魔心の穴が埋まらない
怪物が死んで村中静かです
因縁の恐さに今日も眠れない

鳥取県 西原艶子

抱擁を猫も嫌がる熱帯夜
若い娘のファッション町を暑くする
別れゆく言葉に匂う蜜と毒
終章へしあわせの絵はまだ未完
よくしゃべる男だどこまで信じよう

鳥取県 宍 子

つい孫に口出し風の向き変わる
使い捨てロケット宇宙のゴミとなり
判ったような笑顔するしかない耳よ
手習いの師匠で稼ぐ残る日日
先生と呼ばれて見ればそんな気も

鳥取県 吉 田 孔美子

探し物ほとんど毎日の仕事
おしゃれしてステッキが要る学習日
教壇のあしたも学ぶことばかり
奥の奥まで晒したくなる齢
くどい目をしているルージュ地味にする

鳥取県 岩 崎 みさ江

臥したとて逃がられない厨ごと
あの日から心配かける側になる
弾き合う同じ磁力を持つ人と
鶏匠にも操れぬ鶏の二羽三羽
蜘蛛の糸伝って母よ降りて来よ

鳥取県 奥 田 保 子

熱心な口説き何時しか負けていた
物事に熱中してる顔も好き
一つでも役に立つことしておこう
歳かしら赤い洋服着たくなり
すっぴんで外へ出られぬ顔になる

鳥取県 小 谷 孝 美

風紋に煌めく砂の歌がある
忍者にも魔女にもなれる性をもつ
いいことがあつて無口でいられない
傘一つ二人の距離を押し戻す
思い出はたった一つでいいのです

鳥取県 林 露 杖

白い帆のヨット散りばめ湖静か
ふる里の山は今ごろ茸どき
携帯を耳にタバコをすう少女
蹠跟と眼科内科をハシゴする
ああにつぼん世情政状乱れ秋

鳥取県 上 田 俊 路

これもテロ曰くケンコクギユウゲン
二十世紀梨みずみずし道の駅
合併は住居表示が都市なみに
吸い込まれそうな瞳でうろたえる
初めての海にたまげた孫の顔

鳥取県 小 谷 はるみ

私が無口な時は金がない
核ボタンそれで地球が破滅する
切り札のカードを妻に抜かれてた
宇宙から見れば地球は危険物
灯台はあなただったと気付いた日

鳥取県 平尾 菜美

さわやかな笑顔で風を切っている
裏口でボロリ本音が出てしまう
マイペース一か八かの風に乗る
アパートで心機一転ゼロにする
百本のバラより美しい心

鳥取県 澤 裕子

人生の切符色あせ擦り切れる
マネーゲーム墓穴掘るまで止まらない
満水のダムすっぱりと空を呑む
背伸びした暮らしに土台揺るぎだす
ベランダに家族のドラマ干してある

鳥取市 春 木 圭一郎

さあチャンス自信を持って飛び出すぞ
谷だから素直になれたこともある
真剣に向かえば運もついてくる
思い切り泣いて心体楽にする
弱点多い自分を好きになる

鳥取市 武 田 帆 雀

自打球でなければあわや大喧嘩
払ってもまた張る蜘蛛のいい獵場
蛇が出て来そうな草を刈っている
何事もなく日が暮れた芋茎汁
縦に降る雨なら菊もうれしそう

鳥取市 植 田 一 京

折り込みのビラが誘惑して困る
芸術にふれて時々眼を洗う
よく歩きよく働いてよく眠り
よく怒る人だ心が弱いんだ
欠点の一つが君の味です

鳥取市 岸 本 宏 章

阪神よ熱い涙をありがとう
作況のニュース古米の目を覚まし
驚いた素振りもうまい聞き上手
この町が日本一とどこも言い
白旗もレッドカードも持っている

鳥取市 岸 本 孝 子

夜までにメールで直る痴話げんか
虫の音を聞くと熱燭欲しくなる
跡取りの屋台骨には金かける
千羽鶴人の情けが折ってある
スマートな写真いつしかセピア色

鳥取市 有 沢 せつ子

寝付かれぬ子を童謡で慰める
根気ある水族館の魚たち
水槽のアザラシを呼ぶタマチャーン
二期期へ張り切って出るランドセル
雑草と精力ごっこして負ける

鳥取市 美田旋風

鳥取市 録沢風花

思い出も愚痴も夫婦のティータイム
小児科以外妻のはしごがまだ続く

喜寿過ぎた友も老人らしくなる

体調がいいと強がりばかり言う

初恋に破れ大人になって行く

鳥取市 永原昌鼓

炎天が欲しい農家とビアホール

賑やかな医院で風邪の菌もらう

無口でも恋する瞳燃えている

凡人で銭の魔力に逆らえず

決断を無口な父は背で見せる

鳥取市 西村黙光

虹の橋架けて煌く自尊心

元部長風化はしない自尊心

リストラへ微熱が絶えぬ自尊心

本棚に磨きをかける自尊心

秋風に侘しく揺れる自尊心

鳥取市 夏目一粹

強がりを言ってもお金欲しくなる

ありんこを踏みつぶす子のストレスよ

シャッターが過去の一こま保存する

武器なんか捨てて楽器に変えなさい

話し下手だから聞き上手に徹す

蝉しぐれ読経の声と競いあう
仏さま送り静かな風の盆
遠花火夢まぼろしに浮かぶ里
駆け足の冷夏が生んだ明と暗
盆の月火星も月も雲隠れ

鳥取市 加藤茶人

江戸っ子にはなれず小銭を貯めている

退職のそれから離婚 機が熟し

抱き癖がつくほど抱いてみたい孫

安堵した涙も混じる通夜の列

夏休み終りを告げる赤トンボ

米子市 澤田千春

胸底に一匹鬼を飼っている

雲の峰越えれば君に逢えるかも

母の海きしむ心を和ませる

裏返す枕の下に虹を見た

リトマス紙迷い心がとびついた

米子市 中井ゆき

黒揚羽二匹もつれて礼に來た

妥協したあとで胃薬のんでおく

馬籠宿しみじみ想う夜明け前

ビルの街訛を消した人の群れ

ベッドから毎日違う空を見る

米子市 政岡 日枝子

私も卑怯につこり握手する
迂回路をつけて人心惑わせる
巫女になる家系でおとなしく育つ
浜の闇ふつと背後が怖くなる
何処にでもある花だけど浜に合う

米子市 白根 ふみ

棚経へ数十秒の扇風機
草いきれ萩はさらさら散らばりぬ
草いきれ百日紅は盛んなり
殺虫のその後またして蟻の列
留守電に伝言なにか憚りぬ

米子市 青戸 田鶴

新刊書の香りにしばし癒される
団体でボケの話を聞きに行く
この老いはどうにもならぬ顔洗う
夜明け前思い出しつつ木曾路行く
日曜美術館に私は満たされる

米子市 野坂 なみ

ブッシュの誤算これから舵をどう捌く
水甕に彩うつして今朝の空
うれしいことに自分の事が未だできる
遺されて癒す手立ても身につけた
どこまでも歩きつづけて風野原

米子市 林 瑞枝

わたくしを憩わせる千年樹の影
ボチは詩人で月を仰いで薬の中
活力が欲しくて庭の太極拳
涙もろい父の手紙のある文箱
画廊出て野火の走った眼を洗う

倉吉市 米田 幸子

両親に捧げ尽せぬ恩がある
達者だが明日の保証は何も無い
握りめし母の慈愛が詰めてある
きな臭い匂いに負けてなるものか
シルバーへ無理な負担を掛けたがる

倉吉市 野口 節子

炎天の農婦の鍬に頭が下がる
幸せが欲しくて花の種を買う
他人様から見たら意外な赤い糸
鍛え過ぎた足が只今反抗期
側近が塵も埃も皆被る

倉吉市 山中 康子

太陽にはずみをもらう洗濯機
おもいきりテレビが脳をかきまわす
さるすべり風と頬ずり見てしまふ
娘と孫の結婚観にかなりの差
こおろぎに母の吐息をだぶらせる

倉吉市 淡路 ゆり子

倉吉市 森川 あらた

快眠は今日一日のバロメーター
段取りを整えてからする戦

百年の古木に千の梨実る

達者だと思ひ込んでるボケの日日

子育てのカラスに帽子蹴飛ばされ

倉吉市 牧野 芳光

弱みなど見せぬ鴉が好きになる

壊れないプラスチックの嘆き聞く

立ち枯れていても曲らぬ茅である

許そうと決めたら背なが曲がりだす

セールスに頑張れとだけ言っておく

倉吉市 最上 和枝

愛想よい屋台の主も苦勞人

駆け出しは屋台 スーパー開く夢

屋台骨だった亡夫の跡を継ぐ

情報は留守番してる祖母に聞く

もう少し生きられそうだ爪伸びる

倉吉市 松本 よしえ

歩幅また小さくなって母卒寿

アメダスに情報もらう旅支度

スーパーの元は栄えた映画館

映画史に輝く林長二郎

映画村黄門さんとすれ違ふ

真つすぐな人には神がついている

嘘をつくたびに血液にぎりだす

甘い物食べぬと死んでしまひそう

わたくしの汗は砂糖の味がする

トマトにも砂糖をかけて食べている

島根県 多々納 テル子

野菜くず捨てたまわりに花が咲き

エレベーターたった一人のお客さん

炎天を逃れて昼のバイキング

昼下り網戸筒抜け蟬しぐれ

帰り道夕餉の皿のする音

島根県 森 茂美

胸の中にしまつて置けぬ質である

むかしむかしの景色が浮かぶ心太

男やめめ妻のはなしは避けている

樹上まで辿る尺取り虫の旅

戦争の疵は消えない慰霊の碑

島根県 榊原 秀子

浮雲に乗ってみたいと馬鹿なこと

秋茄子の色にみとれている包丁

火星見た記録をちゃんと残しとく

ゆく夏を惜しむ風鈴おとなしい

もう一度読みかえしては焼く手紙

松江市 銭山昌枝

一つ屋根互いを守るテリトリ
終点が見え隠れして畳替え
退屈になると誰かに電話する
阪神の俄ファンになっていた
弁当と記念品来る敬老日

松江市 津川紫晃

ふる里の絵が自転車に乗ってくる
どこでどう生きているやら遠火
駅裏で私の影が消えている
名月の真下に恋の花が咲き
秋風の音して煮える秋の鍋

松江市 三島淞丘

泣き上戸笑い上戸と酌み交わす
猿芝居だんだん上手くなる恐さ
天邪鬼ひとり居るから盛り上がる
囁きを聞くにはひとつ足りぬ耳
下町に笑いと涙溢れてる

出雲市 園山多賀子

カンナの朱多情を赦す風は秋
風鈴が風を零して夏惜しむ
曼珠沙華いいえ私は彼岸花
ニアミスをして移り香を裁かれる
空耳の花いちもんめ酔芙蓉

出雲市 吉岡きみえ

右肩を下げてすたすたあるく癖
惜敗の涙流れるままがいい
法話きくころの垢を洗い去る
情報が砦の中から洩れてゆく
屋台酒汗の匂いの銭並べ

出雲市 岸桂子

間違いの電話どこかで聞いた声
身に過ぎた幸せ思う今を生き
戻り道まだ納得はしていない
お願いと合わせる紅葉手に負ける
咳までが亡母に似てくる夏の風邪

出雲市 小玉満江

大ジョッキ女同士の歌合戦
炎天へ日傘追いかけて忘れ物
迷い子が大声で泣く海の家
神宿る大社の浜のシンフォニー
真夏日が続く白露のしぼうちわ

出雲市 小白金房子

壺替えてわたしの好きな秋を盛る
ずつしりと稲穂に宿る今朝の露
むなしさを耐える窓辺に星が降る
迷惑をかけないように世を渡る
人間も牛も手古摺るこの残暑

出雲市 竹 治 ちかし

論理よりメンツを立てて会が終え
みんな良い人だと言つて円く住む
生ゴミの日に生ゴミは出しておく
編集の座に居ていつもハングリー
喜寿米寿それぞれ生きた自負を持つ

出雲市 板 垣 夢 醉

酔いどれに叩かれそうで猫も逃げ
あざやかなもみじ小庭も盛りあがる
秋夜長恋しい人と見たい月
青い空黄色く田圃熟れた秋
軍配を妻にあげたは夫の知恵

出雲市 佐 藤 治 代

茄子胡瓜カボチャを食べて夏がゆく
低温の夏ゴキブリも顔見せず
エンピツもごろり夏バテしたらしい
満足な脳では無いが生きている
三日ほど家族になっていた金魚

出雲市 城 多 喜

わたくしを咲かす小さな種を播く
平凡に生きて平和にボケてくる
いざという時にはやはり慌てそう
国会に安楽椅子があるらしい
胃に溜まる話ばかり聞かされる

出雲市 伊 藤 玲 子

うっかりと零した言葉拭いている
母のよう西陽を庇う古い御簾
今わたし抜けると積木くずれそう
お芝居と見抜いて芝居しています
糖衣錠溶けて本音がのぞきだす

出雲市 岡 あきら

憎らしいほど旺盛な草たちだ
野菜たち氣象予報を知っていた
亡母の忌 命をかけて鳴いた蟬
菩提樹の実の心経の形して
先を行く影は日増しに細りだす

出雲市 石 倉 芙 佐 子

幻影もきらきらとして火星人
東南にレンズを合わす星月夜
芝居果てや々と私の貌になる
サンドイッチの真ん中だから気がねする
しゃちこばって見ても傘寿と喜寿二人

岡山県 国 米 きくゑ

白露の日汗だくというこの残暑
鈴虫の秋を少うしだけ貰う
古手鍋まだ幸せがふきこぼれ
急ぐまい息切れのする下り坂
飲んだ量聞いてどうする二日酔

岡山県 山本玉恵

日溜まりへ世相の風がしのび寄る
寝て起きてたつた一人の音と影
うしろ手でドアを閉め切るこの未練
行間の伏字は愛かまた哀か
想い出を山ほど積んでうろこ雲

岡山県 小林妻子

味噌汁と茄子漬がある暑い夏
オーイお茶いっぱい提げて山の父
大辞林の上に拡大鏡がある
畑から水だみずだと呼んでいる
悲鳴などあげぬ雑草伸びつづけ

岡山県 富坂志重

九人兄弟それぞれ老いて遠くなり
昭和史がズシリ心に来る傘寿
あいさつをされハツと口あいたまま
傘寿来て時代おくれのまま生きる
夏やせの婆にようしゃのないヤブ蚊

岡山市 井上柳五郎

他人から見ればできよいお嫁さん
眠れぬ夜老軀を責める不整脈
ふと目覚め動悸苦しむ熱帯夜
髪染めて妻は老化の先のぼし
のんびりと流れに老いはさからわず

倉敷市 井上富子

成人病に躓きそうなコップ酒
熱帯夜を歌い続ける扇風機
仏壇の花も野菜もすくすくと
冷静な眼鏡を持つている紳士
向い風吹けば勇気が湧く背広

倉敷市 小野克枝

宿命という名の毬がよく転ぶ
わくら葉が揃い昔を語り合う
花屋から夢が届いて生き直し
勉強に出した都会に娘を取られ
いたずらな風が晴着を狂わせる

広島県 藤解静風

三人の家族で西瓜切りにくい
おつとめをやめて得るもの無くすもの
足元がしっくりしない妻の留守
ライバルはさすが盲点突いてくる
価値観の違い眼鏡の度がちがう

広島市 森田文

大根の太さに土がほめられる
米不足備蓄米なら国にある
風船の軽さで暮れるまで踊る
七掛けの若さを保つ知恵を借る
他人だと思えば褒めること多し

竹原市 小島 蘭 幸

広辞苑開くと秋になっている
それぞれの秋ひとつづつ灯をともし
ケイタイが一度に三つ鳴って秋
秋はむらさき蟋蟀が鳴いている
木の扉開くと海が見える秋

竹原市 石原 淑 子

茄子の紺地球の愛をひとりじめ
手作りの月見団子に弾む月
立話 相槌打って流れ弾

ツーカーのつもり私の思いこみ
ネクタイを外してからの夫が好き

竹原市 森 井 菁 居

コツコツと働き貯めたこれぼっち
六十五歳の変身願望たかが知れ
髪形を変えたら少し運が向く
甘え生むだけの過保護を戒める
脚力の衰えを知る万歩計

竹原市 正 畑 半 寛

花火ボンボン祭が来たという合図
神輿車が太鼓たたいて町めぐり
祭の子おや浴衣着て下駄はいて
不景気に負けず賽銭はずもうか
神頼みよりもお礼を言っておこ

竹原市 時 広 一 路

一週間分も余ってきた薬
音のせぬ賽銭神様分かるかな
お土産とこちらの地酒比べ合う
割り切れぬのに平等に分けと言う
一步一步の大事さを知る登山靴

宇部市 平 田 実 男

たまさかの松茸はまず鼻で食べ
ワンカップ飲んでぐっすり明日へ寝る
鼻声で妻は上手にネジを巻く
太くなり過ぎた絆を持って余し
あの人とならば火傷もいとわない

唐津市 久 保 正 剣

十二歳少年法をふりかざす
天気予報当って弾むリール竿
総裁選帯と襷がせめぎ合い
笑うこと大盛りにして老い二人
清貧の二字が嫌いな金バッジ

唐津市 樋 口 輝 夫

不器用な小指で嘘がようつけん
アンテナが大きな顔で立っている
女房に袖を引かれて義理を欠き
わけなどは聞かず許した里の母
亜麻色の大きな染みに老いを知り

唐津市 井上勝視

つまされて叩く気がせぬ冬の蠅

おカネより仰山友のいてる幸

呆けを避けしがみついてる五七五

唱えやすい俺の戒名練っている

単細胞だから続いた共白髪

唐津市 山口高明

猫舌のおとこ出世に遠く居る

出張のカバン ヘソクリ忍ばせる

握手する時だけ笑顔各首脳

毎日が戦争ですよ子が五人

キッチンのお飯まで空果食ってゆき

唐津市 宗水笑

人恋しついオレオレにのる老後

せき上げた涙一転遺産分け

満月が音痴の喉を聞いてくれ

惜しまれるほどでない身を自愛する

つまずきの石で自分史組み立てる

唐津市 市丸晴翠

おしやれした小犬の糞はそのままだ

矢印を信じて悔いたこともある

時刻表持たずに杖と老いの旅

ゴキブリに遭えばスリッパも武器に

飼犬を看取って老いを教えられ

熊本県 高野宵草

世の異常嘆けば僕が旧かった

口喧嘩しながら余生いくばくぞ

棄権より落ちそうな人投票にゆく

さりげなく生活しを握る発電所

いわし雲しみじみ空の広さ知る

松山市 古手川 光

歯が抜けて人間らしい顔になり

今夜咲く月下美人を待つカメラ

ピンラデイン フセイン忍者かも知れぬ

米不作はくそ笑んでる人がいる

足腰がスローライフで行けと言う

松山市 宮尾みのり

十年目の孫神様の贈り物

人生の午後認め合い許し合い

自我少し削り居場所を確保する

うっかりがあつてはならぬ義理の仲

辛抱の母がいとしく疎ましく

松山市 高橋宏臣

ニッコリとされて本音を言いそびれ

伏せ事は柩の中で解き放つ

虚栄心くすぐっている偽ダイヤ

軍鶏二匹互いに見えず飼われおる

稲妻に一瞬憎悪消え去りぬ

東かがわ市 池内 かおり

茶碗蒸し夫の頬がゆるんでる
中老という集会に招かれる
トラ勝って夫に天下取らせたい
お中元決った数が行き来する
暑い日だった姑の忌がめぐる

東かがわ市 川崎 ひかり

さよならが上手に言えて夏終る
悔しさは後でジワジワわいてくる
ひたすらに何を祈るや丸い背な
犯人と同じするどい目の刑事
針千本吞んでも懲りぬ軽い口

東かがわ市 神保 坊太郎

呆けてない証拠に鬱の字が書ける
ロボットに命令される日も近い
ひとときを童にかえる地蔵盆
そこまで生きて死にたいなどと欲
吹けば飛ぶ肩書のない吾が名刺

東かがわ市 瀧井 勝

相槌の笑顔要所は外さない
手料理の速さ胡瓜の蒂混じる
天職と信じて老いの田圃好き
芋挿して嬉し夜中の雨の音
初成りを盛り延命の晩ご飯

東かがわ市 清川 玲子

横丁の地蔵さまへも盆だんご
灰になった鶴に御霊も嘆き出す
易易とその手にのらぬ拉致家族
早送りしたい私のスランブ期
いい嫁に当たり家中温い風

東かがわ市 原 賢

生真面目が騙されながら生きてます
気が付けば妥協慣れして敵と組む
金婚を迎えようやく合う歩調
勝って呑み負けてまた呑む虎ファン
こだわりを捨てると急に眠くなる

愛媛県 中居 善信

一生をこんな田舎の屋根の下
飛ぶことをまだ捨ててない竹とんぼ
転び癖ついたダルマのおおらかさ
あっけらかんと今日の夕日が落ちている
王手飛車くだらぬ夢は見ぬ事だ

高知市 小川 てるみ

真っ白い皿に盛りたい夢がある
さらさらと薄情すぎる砂時計
水面下じつと燃やしている闘志
真ん中に居たくて笑顔持ち歩く
ハッピーないち日時計止めておく

青森県 西谷大吾

荒れた手があいやあいやと津軽三味

眼を閉じて婆が聞き入る撥さばき

三味の音が震える夜は山背吹く

太棹が哭いて津軽に雪が降る

津軽三味北のいのちを呼び覚ます

青森県 小寺花峯

四捨五入されても笑顔忘れない

陽が暮れる頃にチクチク胃が痛む

一合が敵になっているカルテ

呑み過ぎた頭チラチラ星が舞う

雁は西雲は東へ流れ行く

弘前市 高瀬霜石

星くずで洗濯をする山の宿

きょうだいが多くと飯がうまそうだ

街角でひよっこり拾う知恵の種

忘れないことに限って根が深い

懐と相談をする名誉職

弘前市 須郷井蛙

女房のバントに今の僕がいる

再生紙少し高いが国のため

吊皮の美人みんなの目をとらえ

陰口はたたくが会議では静か

どの壁もわが家は孫の美術展

弘前市 今愁女

秋空にとどまる雲と消ゆる雲

水底に毬藻を秘めて阿寒澄む

秋深く阿寒の湖も紅葉冷え

惜しみなく紅葉の嵩を踏み歩く

銀杏散る木の葉雨とはこのことよ

弘前市 一戸ツネ

八十年越えた駅舎の絵巻もの

風騒ぐ八十路の身柄いと哀れ

ひとり酒今夜の肴甲子園

ニヤニヤと俺は嫌味な古河童

八十路坂なんにもならぬ愚痴の酒

弘前市 宮崎ヒサ子

向日葵が大人になれぬまま秋に

台風が来るかも知れぬ居待ち月

ちぐはぐな一日でした今日の咎

冷夏でもサルビア赤く燃えて咲く

この歳で言い訳などはもうしない

黒石市 相馬一花

大臣の椅子に群がるコガネムシ

ジーパンをはいて痴漢をたぶらかす

女房がいるかと覗くパチンコ店

大学を諦めさせる預金帳

順調に老化が進むラリルレロ

佐倉市 岡井 やすお

同盟に頼るしかない第九条

風船の数だけ打って打ちまくれ

勝ち過ぎてテレビ放送してくれず

何はともあれ聞きましょう友の声

静岡市 安本 晃 授

大卒の娘が明日嫁にゆく

高卒の孫空高く帆をあげる

中卒の孫も風あげ技を学ぶ

音もなく花火職人美を飾る

愛知県 早川 盛 夫

知らぬ事ばかり教わることはかり

目立たない位置でマグマを溜めている

老いたとは思わぬ歩幅確かなり

利口にはなれず馬鹿にもなり切れず

亀岡市 井上 森 生

湯につかるサンショウウオに大変身(湯原温泉 2句)

紅差した老母も太鼓に綻びる(老健夏祭り 2句)

シルバー沸く太鼓お神興かき氷

百歳の母に感謝の手を合わす

京都府 稲葉 冬 葉

お便りのないのが無事と思いたい

ワンポイント飾って妻の外出着

八月に蟋蟀が鳴く宵の月

ふん切りが付いたら肩の凝りが消え

大阪市 町田 達 子

九月の風が少し涼しさ乗せてくる

人間の勝手で夏は冬を恋い

涼風を墓参の後の嵐山

石仏と対話わたしも歳を取り

大阪市 本間 満津子

握手したまな言葉もない出会い

白杖に替えて持ちたい魔女の杖

どっちでも良いから調子合わせとく

一人だけ絶対対当たる宝籤

大阪市 安達 はじめ

平凡な女でいたいピンク着る

爺ちゃんのアドレス服へ縫いつける

あの世から一人足らんと友の声

迷わずに祖父の土産は奈良の墨

大阪市 小糸 昭 子

五百羅漢あそこにここに知った顔

上弦の月が優しい秋夜長

癒される石庭ひたすら座ってる

良い話聞いて心に灯がともる

大阪市 中田 あい子

貧乏をしていた頃が花でした

独り居も仏と共にすこす益

六万年ぶりの火星にあえる秋

おしゃれして姑の出かけるケアハウス

大阪市 松尾柳右子

活気ある町に自転車あふれてる
子の家を転々老後落ち着かず
たつぷりと刻ある猫の身だしなみ
出し入れに難儀している貴重品

大阪市 星野きらり

海開き子等にお寒い夏は過ぎ
それぞれの想い出秘めて大火花
見るだけへカード手を出す足も出す
不用意な言葉を吐いて寝つかれず

大阪市 熊代菜月

ひまわりが項垂れている曇り空
言い過ぎを後悔しつつ髪洗う
主婦の座を嫁にゆずって遍路旅
気まじめな父にもあつた隠し芸

大阪市 中村叡子

無花果がなつかしい味しくなり
いくつまで生きるか孤独学ばねば
整体も快よい日と疲れる日
旅の宿マッサージ師がよくしゃべり

大阪市 鶴田遠野

廃線のレールの先にある実家
何もかも見通しだらう白い杖
先だつものが無くて見送るいい話
延命策 倫理問われている医学

大阪市 川端一步

励ましの言葉に背中ピンと張る
貧乏の星に生まれて親慕う
本棚は見えて欲しくない僕の恥部
薄紅の芙蓉も見たか赤い星

大阪市 榎本舞夢

じいちゃんと孫携帯で弾んでる
客足の多いお店を選んでる
張り切りのどこかでチョンボする私
プレゼントされた財布と旅に出る

大阪市 清水絹子

敷き馴れた布団へ大に旅帰り
輕輕と返事したけど寄付集め
快復期軽口もでてひと安心
会うたびにひと言やさし二人の子

大阪市 杉澤汀

さわやかな朝だ台風遠くゆく
こぼれ落ちまいといっぱい肘を張る
酔芙蓉顔そめてからでる色気
勝馬に乗ろうと俄か虎ファン

大阪市 浦田綏子

いつかまた逢わん伊賀路の慈悲心鳥(青山高原)
いい女といわれたころの金木犀
誕生日 終るあてなき遠いテロ
糸瓜忌やひといろいろのターミナル(終末期)

大阪市 渡部 さと美

昨日のこと忘れ一年ひとつ飛び
親切のすぎるは思い込みも過ぎ
坪菜園借りて大地の偉大さよ
妻の古希味は夫へ引つ張られ

池田市 栗田 久子

古い静か誘われるまま菊花展
それぞれの秋を楽しんでる味覚
仏門で食べる事さえ修業の身
転がった松ぼっくりに見えた秋

交野市 山川 日出子

まほろしか天国見える茜雲
ジェスチャーで仲よくしたい火星人
眠れぬ夜ふえた亡き友思い出す
ポッポッポ歳をとらない鳩時計

交野市 森本 弘風

自家用の農家の野菜無農薬
へい毎度売り声消えたレジスター
母さんとお墓の周り草むしる(妻と墓参りして)
姉ちゃんは今後厄やなあ教順(教順は娘の法名)

河内長野市 水谷 正子

化粧して子の仏壇に手を合わす
砂を噛む思いでためてこの利息
褒め言葉砂も交じってやや痛い
こむら返り真夜中の夢つき破る

河内長野市 植村 喜代

次々と湧いたニュースに今日も暮れ
ひと時を楽しくさせる孫が来る
カルピスを貰って母を思い出す
買い物へ帰りの坂を忘れてる

河内長野市 井上 喜醉

飼い主の歩幅へ犬が気を遣う
虫の音が先祖の供養してる墓地
指先がフル回転の焼鳥屋
男らしいだけで首相に付く味方

岸和田市 木村 正剛

延々と狐と狸知恵くらべ
耳よりな話補聴器邪魔になる
妻の留守真昼の闇の中のほく
暑さにも雨にも負けぬ青テント

岸和田市 井伊 東吉

旦那より山に憑かれている女房
ゆとり指導宿題減った夏休み
夏秋の展示に迷う百貨店
一對五思いバラバラ六ヶ国

和泉市 西岡 洛醉

女房の顔が或る日の鬼の面
漢方の苦さ救うてこの命
平和論戦後は遠くなりにつけり
軟骨がぎしぎし老いの身を攻める

吹田市 瀬戸 まさよ

酒飲めぬ辛さも知つて欲しい宴

艶やかな肌は自家製化粧水

人だかりまぐろ解体見せて売る

暴言を吐く知事怖し日本国

吹田市 太田 昭

枯渴した言葉で友を慰める

仰向けの蟬に小指を貸してやる

飲み放題で汁粉を食べている幹事

悔い少し残して主義を押し通す

高槻市 井上 照子

痛む足なだめて友をまた見舞う

欲しいもの問えば今度はただ若さ

問いつめる親も涙で目が光る

若輩の正論勇氣褒めている

高槻市 江原 秀夫

取り巻きの舵にゆられてどこにゆく

とほけてる言葉まわりを丸くする

作られた影が勝手に走り出す

未来への割符は妻の胸の中

高槻市 傍島 克治

野仏の帽子編む手を急かす秋

ブランドの追っかけしない いい娘です

お互いが見合に仮面つけていた

今更と鏡が笑う若作り

豊中市 吉田 あずき

金星とやさしい会話してる月

介護する話に涙もろくなる

鮮やかな切口返す言葉なし

びっくり箱次々老いの身に届く

豊中市 檜谷 郁子

この暑さ命限りの蟬の声

寝苦しさ続く残暑の熱帯夜

大阪の活気を背負うタイガース

古日記やっぱり亡夫も虎キチだ

豊中市 山門 タミ

経上げるバラバラの声笑う孫

医者通い身の不注意を詫びている

雲の峰亡夫がいるよで呼んで見た

亡き夫の思い出よぎるネコジャラシ

豊中市 岸田 知香子

此の暑さ冷夏と言えどピンと来ず

サヨナラ打六甲おろし去り難く

風鈴も鳴かず飛ばずの熱帯夜

大口を開けて昼寝の小商い

大東市 南原 正和

パチンコの玉一つ蹴り店を出る

検査終え青信号でまず一杯

湯浴みする音に女の色香聞く

Uターンお国訛りがまだ消えぬ

大東市 児玉 蛙

好きだった頃思い出す同窓会

いいそびれワラ一本に縋りつき

こだわりを捨てると周り見えて来る

逆境に強い女の浮き沈み

守口市 結城 君子

エジプトの影の長さに驚いて (エジプト展を観て)

湯気のゆくえ見つけている思索

BSの怖い武蔵の眼と出合う

お口バクバク景色も見ずにミソサザエ

枚方市 安達 忠央

拉致と核 真ん中に据えさぐりあい

僕だって日記の中じゃ主人公

こだわりを日記に書いてよい眠り

ほどの良い軽さで続く日記帳

枚方市 宮川 珠笑

ひまだから舞うているのでないとんび

生きてやる姑いじめをバネにして

古時計やつとゴールのように鳴る

無駄足にさせるものかと訝える月

枚方市 二宮 山久

お買い得だまされそうなチラシ見る

美人だなあテレビくいいるメロドラマ

内装もばっちり息子に嫁が来る

愛してる退職してから数が増え

枚方市 森本 節子

招かれた貴船の床は雨もよい

知らぬまにチャネルあわす阪神戦

野球選手帽子かぶったままがよい

センナの香また部屋に満ち煎じ過ぎ

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

安住する穴の深さを計ってる

裏切りの握手であつた軽かった

風となら遠出の話すぐ決まる

浴槽に今夜も捨てる疲労感

藤井寺市 中島 志洋

柿豊作 娘車で里帰り

二人きりムードをこわす咳払い

仲人の嘘で結ばれ共白髪

秋深しとぎれとぎれの虫の声

寝屋川市 山本 三郎

終わりになきイラク戦争自爆テロ

堅いひと飲むとセクハラする癖も

地下街の雑踏妻と手を繋ぐ

からくりで魔女に対抗する忍者

寝屋川市 富山 ルイ子

お節介離婚騒ぎに巻き込まれ

独り部屋花一輪をたやさない

地球が発熱九月も三十度

ありがたい三度三度が食べられる

寝屋川市 太田とし子

閻魔にも投資しておくお賽銭
逝く先は同じで足並揃わない
テロ事件月が笑って見てござる
碑の詩に心癒しているトンボ

寝屋川市 酒井 勇太郎

マンギョンボウいけしやあしやあとやつてくる
浮雲に先祖の霊をダブらせる
肌の色選べず生まれ差別され
子に融資無利子無担保無催促

箕面市 岩 津 ようじ

甲子園に戻ったトラのすさまじさ
君が代は知らず六甲嵐なり
道頓堀へ飛び込むなどは不粋やな
三乙に感謝 赤紙来なかった

八尾市 内 海 幸 生

何をして今日終えたかと陽が叱る
言い訳はせぬ頼りないけど男
裏方の下戸の乾杯コップの茶
いくらめし鮭の未来を数千尾

八尾市 吉 村 一 風

ぜんまいを巻く妻がいるまだ動く
幸せのリズム朝餉の葱踊る
目が覚めて今日も生きてるなと思ひ
回り道寄り道人の情け知る

八尾市 長谷川 春 蘭

ひまわりや男の匂いふとよぎる
サングラスとれば天女のほほえみよ
眼閉すれば蓮に御仏御座されて
歳のこと忘れ挿木に余念なき

神戸市 山 口 美 穂

口だけが元気で今日も長電話
こんなにも汚なかったと独り言
他人の世話やいて元氣という駄賃
糠床をまぜた匂いを持って出る

神戸市 山 口 光 久

飾っても心の美人にはなれず
失敗を重ねた円いまる意味
年輪を重ねた皺は美しい
幸せが逃げないように塀つくる

神戸市 池 田 善 守

この頃は大きな声で笑ってない
何年振り体操 火星 タイガース
この今が幸せならばそれでよし
大雨にうたれたような汗をかき

伊丹市 小 熊 江 美

好きな人認められたくプレゼント
ナツメロよその頃思いほろりする
今日の愚痴一と晩寝たら気も変り
価値観はそれぞれ違う自由主義

伊丹市 山崎 君子

八十歳悲しい過去は忘れよう
生きるのもつらいですなと熱帯夜
昼の夢雨乞いしてる花の中
のほり月火星迎える夜のドラマ

尼崎市 軸丸 勝巳

指標ほど実感ついてこぬ景気
不況風さぬきうどんに長い列
この残暑冷夏のツケが米にくる
番兵のように門前の立葵

尼崎市 林 昭三

始球式総理続投する構え
入社時はサラブレッドと言われたが
ひそひそと祖母に穴うめ頼む孫
世渡りも気長になれと麻痺の道

尼崎市 松下 比ろ志

子等巢立ち元の二人の向かい膳
友が来て亭主八杯客二杯
友の輪もだんだん小さくなってきた
この腕やこの肩にある自負の跡

尼崎市 長浜 美籠

逞しく変身自信ついたらしい
助手席で風の誘いを待っている
ゲンマンをしてから続く偏頭痛
結局はみんな自分が蒔いた種

川西市 米原 雪子

水やりの後の雷雨が恨めしい
台風を避けて戻った子に安堵
イベントに秋の味覚が盛り込まれ
物忘れ開き直って許される

三田市 久保田 千代

届かない残暑見舞の友想う
異文化に触れて人生倍になる
満ち足りてゆつくり余白埋める母
一日が盛り沢山の敬老日

西宮市 亀岡 哲子

妹も早やシニアの映画館
七十のパレオが弾むアロハオエ
お誘いのベント断り万歩計
夫には粗食を子には牛肉を

西宮市 井上 松煙

古日記見もしないのに捨てられず
盆に会う幼な馴染も傘寿なり
真夏でも花を絶やさぬ庭に住み
さっそうと歩きたいのに背が曲る

西宮市 長谷川 淳

宗教が血で血を洗う恐しさ
パソコンが使え手紙に凝り始め
女たちテレビ番組よく覚え
タイマーにイヤホン切られ起こされる

西宮市 緒方 美津子

割り合いの狂わぬ母の目分量
このところ嫌煙権がまん中に
割勘でなければならぬ同級生
いつからか婦唱夫随のビアカップ

西宮市 門谷 たず子

いつまでを風に乘れるか秋の蝶
針の穴つくわたしの悩みごと
温度差を埋める夫婦の箸枕
その先は思うまいとて眼鏡拭く

西宮市 秋元 てる

じよっぱりがずらりと並び日向ぼこ
自分から作った壁で寒い夜
今はもう一兎も追えぬ足と知る
幸せを掴みたい指奏えさせぬ

西宮市 刈田 泰司

笑ひ袋の涙を誰も見破れぬ
癖一つ見つけ古文書遅々と読む
七癖も見ぬいてからの和が続き
善人の毬おもしろいほど弾み

西宮市 坪井 孝一

人間のエゴかも知れず夕陽の朱
悔しいが今はロボット主役取る
あの人は変つてゐると変な僕
花時計ちっとも時間合つてない

姫路市 古川 奮水

ブライドは高いが機転回らない
鯛焼を三ビキ買うて昼にする
目と目合い能登の朝市逃さない
三枚のブリに待たされる観光バス

柏原市 永浜 加津子

観覧車ふたりっきりのプチ旅行
一泊の家出に解けるわだかまり
ああ残暑気候不順に惑わされ
フルコース御辞退せよと胃が申す

奈良県 渡辺 富子

喋り疲れ瀬音聞いている四人部屋
時空超え魂揺する伎芸天
バーチャルの海で溺れている未来
平仮名で喋る女に身構える

和歌山市 福本 英子

孵化三日赤メダカにもやんちゃくれ
天地無用隣の荷物お預かり
台風余波見えない月に萩すき
夏と秋肩寄せ合つて庭の花

和歌山市 細川 稚代

火星人下りて来るかと孫が問う
ばあちゃんのレシビ生きてる里の膳
遠のいた秋を待つてる糸トンボ
冷房に弱い手足をなでている

和歌山市 松尾和香

先生を囲む生徒も老いの坂
鍛えられ心豊かな部下育ち
鰯雲ふるさと偲ぶ春夫の詩
怪我に泣き友が復帰の四番打者

和歌山市 宮本三喜夫

もう歳若い人にと任せとき
もたつくね国のこと等そっちのけ
地盤とはあなたのもので無いはずよ
国民は馬鹿ではないは見抜いてる

和歌山市 木村初子

庭に立つ一人ぼっちへ蟬が鳴く
しばらくは受話器に残る娘の余韻
花も嵐も越えて童謡歌ってる
愛の手は人種を越えて支え合い

海南市 谷口義男

ムカ付くもキレるも総て親の罪
使わねばどんどん萎えて行く頭脳
うっかりと煽てに乗った重いツケ
休息をする時間無い妻の日々

鳥取市 山宮愛恵

ボランティアの後はひとりの晩ご飯
膝病んで老化の加速自認する
何も手に付かないままの仏事後
メリハリも三日坊主になる残暑

鳥取市 前田一枝

こげ飯の唄を知らない炊飯器
お医者さんにも耳鳴りは聞えまい
ローンローン築いた城が泣いている
とどかない所でカニが泡をふく

鳥取市 福田登美

旬の物毎日食べて生きる知恵
朝夕の合掌運を願いつつ
利息にも株にも縁のない暮らし
病む夫の歩幅めつきり定まらず

鳥取市 中村金祥

お経読むリズムに合わせ炎揺れ
新しい朝を信じて床につく
足腰を鍛え定年待っている
新しい眼鏡昨日の敵が消え

鳥取市 富山檳榔樹

仲の良さ男結びの中にある
山一つ夫婦で越えて汗拭う
祭り日の囃子弾んで嫁決まる
本当の事を知ってるおいお前

鳥取市 宮脇道子

会う度に母の老い増す盆休み
盆が来て老いを曝けて我子送る
葦の花簾の如く咲く命
洗濯物纏れ纏れて秋晴れる

鳥取市 徳田ひろこ

釣ってくる魚に見合う舌の先
潮風のなか塩の香を焼くグルメ
期待などされぬに伸びる豆の蔓
誘惑の手先ケイタイお断り

鳥取市 杉本孝男

補聴器が聞いてはならぬ内緒ごと
おしゃべりがまた始まった熟女たち
即興で語れませんか夫婦愛
古里の深い歴史に逢いにゆく

鳥取市 山本益子

今日よりは若い日来ぬと笑顔撮る
老婆心嫁との火花終りなし
噂話隣町まで飛び火する
捨て難いちびた齒ブラシ馬が合う

米子市 門脇晶子

境界線妥協で決めた杭を打つ
なつかしい訛り私を誘い込む
大山を見て秋の呼吸を見とどける
折鶴がとぶ日を待つて箱の中

米子市 光井玲子

空高くトンビは神のお使いか
新しい着物タンスでうつになる
ふる里の訛りにひかれ花を買う
どこまでも亡父の礫が追いかける

米子市 木村春枝

アパートの窓に若さを翻し
ブランコを揺らし夢追うペアルック
涼風にやつと自分を取り戻す
驚きに咄嗟飛び出す米子弁

倉吉市 猪川由美子

還暦をメガネ記念日と定める
保釈され顔と声音を使い分け
応援のつもりがミイラ取りになり
女帝論そろそろ決めておくがよい

倉吉市 山本玲子

水分をビールで満たす汗っかき
骨太の指がきらめく畑仕事
生き甲斐のように梅干漬けていく
電話ならまだ年齢は誤麻化せる

鳥取県 鳥羽直市

不況でもアパートいつも賑やかだ
いつかゆくお寺だ寄付は断われぬ
ありがたい家庭の味を食べている
熱弁で語る言葉にだまされる

鳥取県 鳥羽玲子

身が軽くなって世間もよく見える
とぶチャンス待ってる内に老いてきた
続き柄近くわがまま許し合う
夫婦げんか原因忘れ幕おりの

鳥取県 原

みさを

子等のいる北の天気図ばかり見る
狼藉の尻ぬぐいする奉加帳
アリババに南部訛りのひらけゴマ
小国にまた皺が寄る世界地図

鳥取県 石谷 美恵子

北東の鬼門ころにかけている
気を吸って眠りにおちる北枕
厄介なことは見ぬ振り聞かぬ振り
人間味溢れてウダツあがらない

鳥取県 太田 幸枝

神様のミスか善人先に逝く
作物を荒らす獣と知恵くらべ
地震前光はなつた地平線
地球上寒暖計が狂い出す

鳥取県 村上 信子

病には勝てず節酒をしています
水溜まり月が映って跨げない
念仏の終る頃には眠気さめ
一泊の旅に疲れを持ち帰り

鳥取県 国森 武子

七十がすぎれば変る身の回り
天候のように心が変る日々
老人は戦争中を忘れない
ついそこにある故郷が遠くなり

鳥取県 山下 節子

嫁が来て息子が少し他人めく
場ちがいの発言でした命とり
母の背のカーブだんだん深くなる
風紋のカーブで風を読んでいる

鳥取県 奥谷 彩子

無口だが重石は効いている夫
いい汗かいていい一日の仕舞い風呂
寺の説法素直に聞ける老いの今
声高に訛行き交う郷の盆

鳥取県 乾 喜与志

言葉より笑顔を交わし酌みかわし
耳古びやつと聞こえた数え歌
近くまで来てた火星とした話
古い耳きこえぬままに笑顔する

鳥取県 佐伯 やえ

充ちる日々大山を^{やま}拝んで畑に立つ
間違うて刃物もつよな子に育ち
惜しいなあ引き際人のせいにして
総裁選国のゆらぎが垣間見え

松江市 小川 注湖

賑わいが空に舞つてる鎮守森
お下がりの浴衣今夏も良く跳ねる
残照に宍道湖の波燃えて揺れ
賑わいに下駄を踏んだが夫婦縁

松江市 安食友子

朝からの仮面やつとこ剥ぎました

さあさあ足のリズムも始発です

千鳥足後の祟りは知らないぞ

口だけを見せびらかしている達者

松江市 川本 畔

息巻いて去って何かがこぼれ落ち

あるがまま刻む夫婦のリズム感

出しきった力の跡へうずくまる

蜘蛛の糸少し弛んで初秋かな

松江市 松本 知恵子

虫の音のペランダ月も寄ってくる

こだわりは鎮守の森へ消えていく

鈴つけた猫には負けぬノラの自負

ささやかな幸虫の音に包まれて

松江市 佐野木 みえ

夜のとぼり しばし火星と対話する

娘に梨を今年の味で送ります

人恋し秋に娘と旅の宿

足るを知る暮しゆっくり坂上る

出雲市 久谷 まこと

目配りも気配りもして老いの日び

広辞苑いつも手許に難解語

アンテナの向きを変えても×は×

とまどいの異常気象や居待ち月

出雲市 富田 蘭水

癌などと笑った昔悔まれる

仏壇にお願いしてはよく眠る

驚きは金に心売っている

穂ばらみも私も油断ゆるされぬ

出雲市 青山 久子

八月の海から君の声がする

久しぶりますます光る友の皺

許されて生きているのをまた忘れ

寝ころべば天井のしみおりてくる

島根県 伊藤 寿美

夫の余命知りつつ夫と生きた日よ

隠れんぼしたまま夫がでてこない

あの日と同じ浜を独りで歩いてる

そして朝独りのパンを焼いている

岡山県 福原 悦子

離婚劇神も小首をかしげてる

胸にある力を開くペンがある

荒海に小さな悩み諭される

愛一途病夫に嘘をつき通す

岡山県 大石 あすなろ

どんと背を押されて妥協してしまふ

帳尻を合わす手口を会得する

改革の夜明けひたすら待っている

着メロが恋する音で鳴っている

美祿市 安平次 弘道

高知県 赤川 菊野

目線少し下げれば本音見えてくる
コントならいつも持つてるチンドン屋
削除してもしても記憶の底にあり
原点に戻り結び目締め直し

広島県 福島 万年

大接近戦の神の赤い星
人類が滅べば地球甦る
至福なるグルメのつけのスリーエル
美しい人に貰った風邪である

松山市 丹下 美津子

一瞬の迷いセールス突いて来る
電話鳴るたびにどきつとして困る
疲れたら陽気な友に電話する
信じよう末広がりという手相

東かがわ市 成重 放任

断りもなく鮮血を吸ってゆき
千人がタバコを吸えば凄かろう
雑草も人も焼けつくこの猛暑
天高く苦労続きのダイエツト

東かがわ市 伊勢 八重子

穏やかな顔で苦労の過去を言う
子を産んだ土地に女は根を下し
他人事で悩みじつくり聞くゆとり
生きてます人間不信に遭いながら

子よ孫よ永久に戦のない国に
何事もプラス思考で生きてゆく
も一人の私にはっぱかけられる
ケータイで話す女の土佐なまり

高知市 北川 竹萌

ポット蒔きキャベツ白菜苗作り
穏やかに誠実一路今日も無事
老境の秋の菜園地下足袋で
わくわくと明日を楽しみ床につく

高知県 小澤 幸泉

国家には要らぬ寿命がまたのびる
原色に塗り込められた原爆画
晴れの日も曇りの日にも空を見る
胃カメラに透けた私の過去未来

熊本県 岩切 康子

親の過去聞いて見直す法事の座
義理一つ済むと胸には空が出来
会食が恒例になり弁弾む
厳残暑日に四回も衣更

熊本市 永田 俊子

性善説信じています自動ドア
も一人の私が胸を張れと言う
こだわりを捨ててポイント切り替える
決断へ一呼吸おく傷を持ち

予 告

全日本川柳埼玉大会 平成16年6月13日(日)
国民文化祭ふくおか 平成16年11月13日(土)

生かされて昇る朝陽に掌を合す 慶弔の義理が重たい熨斗袋 ゼンマイを巻けば元氣の出る時計 食通の一つ覚えにサシスセソ	弘前市	福	士	慕	情
あみだくじ当たるも八卦外れあり 横綱にときめきがっん初当たり 人当たり良くてタクシーする安堵 おずおずとりんごに当たる陽の自信	弘前市	岡	本	花	匠
秋桜の噂たずねて来た高原 誠実なはなし納得山動く 助っ人の軍手を拝み陽が沈み 紙風船わらべに返るデイケア	弘前市	岡	本	花	匠
嫁ぐ娘へ煮物のイロハ教えてる 浅漬のキユウリで弾むコップ酒 もう少し大事にしたい日本語 まわりなど気にせず夢を追いかける	十和田市	阿	部	進	

第45回豊中市民川柳大会

と き 11月23日(祝) 正午開場
ところ 豊中市立中央公民館1F
(阪急宝塚線曾根駅東100米)
会 費 1500円(軽食・記念品・発表誌呈)
落 語 一席
宿 題 「器」 桑田砂輝守選
「火傷」 上野多恵子選
「未知」 久保田元紀選
「澄む」 西出 楓楽選
「拭く」 前田 咲二選
「弱い」 田頭 良子選
「ふくらむ」 住田英比古選
各題2句・締切午後1時
賞 豊中市長賞ほか各題に賞呈
主 催 豊中川柳会・豊中市立中央公民館
連絡先 〒560-0015 豊中市赤阪1-6-9
石川 勝 TEL・FAX 06-6854-1990
または 06-6303-7297 (本田智彦)

第10回 井笠川柳会笠岡誌上大会

薬 ひこばえ
課題 「的」 「本」
塩見 草映) 橘高 薫風)
定本 広文) 共選 土井 哲秋)
村上 氷筆) 梶原サナエ)
応募料 1000円(定額小為替) 発表誌送付
応募要領 指定の用紙又は便箋に各題2句(計4句)を列記
郵便番号・住所・氏名・電話番号・所属柳社名を明記
締 切 平成15年11月20日(木)
投句先 〒714-0081 岡山県笠岡市笠岡507-68
井笠川柳会宛
TEL0865-63-5858 FAX0865-63-6131
お問い合わせは 戸田さだお迄
賞 品 課題1位には石碑贈呈(2名)
(本人希望句・1年以内建立)
3才に粗品呈(句碑建立者を除く)
会員募集 新会員を募集しています
年会費2000円(年4回あすなろ発行)

自選集

四万十川にて

橘 高 薫 風

遠 山 可 住

沈下橋吉四六さんとあとや先

これやこの酒に譬と礼智信

この頃は雲にも見詰められている

本堂でヤンキー座り許されよ

もう自殺するほか昂奮などはない

玉 置 重 人

土 橋 螢

サロンバスが匂う女性専用車

ポリユームを上げてその気になっている

頑固さはまだまだ消えぬ数え唄

マニユアルをきっちり守る袖カパー

迎え火に浮かんで消えた戦友の顔

恒 松 町 紅

幸せな歩幅で渡る青信号

ど忘れはさほど気にせぬ八十路の手

仲のいい鳩を見ている老い二人

一病息災仏のあかり絶やせない

横顔はやがて大人の跡を継ぐ

パソコンに呆ける歳かと笑われる

分校にもう来年がないさくら

賽銭は五円玉よと妻の指示

お味噌汁わたしひとりの味見して

良心を金の成る木と替えて来る

雷が落ちたところに木を植える

松茸の匂いがしたと山へ行く

野の花を見て来た道を思い出す

そして秋 夕顔の種白くなる

平成も昭和も仲がよい家族

西 田 柳 宏 子

年甲斐もなく燃えました傘寿の血 (18年振り阪神優勝)

五万三千揺れに揺れてる甲子園

寝てなんか居れるか阪神タイガースや

いらいらも吹つとばしたる星野サン

道頓堀飛び込むナニワの阿呆五〇〇〇

西村早苗

これだけの風にコスモスふつと揺れ

ひと夏の終り区切りの盆太鼓

曇天に冷夏噂も米不作

同じ種まいても生えぬひと所

なんとなくお喋りしたいいい天気

仁部四郎

スイッチを点検夢は個人主義

あの夢をまたと自分史振り返る

中流で中立家系の夢である

定年の日に夢に出た安楽死

民族の夢号令で紡げない

野村太茂津

笑いこらげた後の仮面が重くなる

ニツクネームで呼ばねば返辞せぬ男

殺したいと思ったことも愛だろう

嫉妬する傘寿の妻が居て嬉し

米寿過ぎ土瓶の蓋の役でよい

波多野五楽庵

どの人に見せよう爪の鳳仙花

テトラポット今日の未練を追いかける

問いつめてみたが傷つくのは私

会者定離 宵待草も散りました

緞帳が降りてにわかに津軽弁

藤井明朗

新米不作 倉庫の旧米出番

車社会に歩け歩け運動よう言わん

句作まだ貧乏閑なしが続く九十四

夢は不思議みれば過去物語

爽秋を生かされて紅葉に包まれる

藤村メ女

水かえて澄んだ金魚の目と出合う

追伸に母の気遣い盛ってある

さようなら語尾が濁っている未練

手を合わせ箸とる曾孫の躰見る

年輪を重ねて許すことばかり

芳地裡村

千年の長寿を祈る銅の鶴（北京）

日時計に帝の誇り生きている

九匹の龍が宝珠にたわむれる

王府井にヤング人気の百貨店

大和殿魔除けが並ぶ屋根かざり

宮口笛生

幸せの老後朝からうまい酒

酒うまい幸せ喜寿を生かされる

酒という魔力に元氣もろうてる

顔の艶違うと酒をほめられる

絶頂の笑顔グッと生ビール

森 下 愛 論

小夜食の箸が止まった虫の声
魂魄の無念を忍ぶわだつみの
発泡酒下げて地獄へお伺い
絢爛と愛と虚栄に生きている
矍鑠とまだ老いの身で夢を追う

八 木 千 代

境界で手を振るほとけ戻りやんせ
少し粗目の垣根は風の出入り口
折り合って一直線の杭を打つ
罪びとのように塀から出ぬ残暑
境界の先なら鬼も通りやんせ

八十田 洞 庵

匠の汗にそびえる塔の夢がある
駅弁買い銀河鉄道乗った夢
夢にまで見たとまっ赤な嘘を言う
父が居て母が居た部屋そのままに
有頂天の帽子はすぐに飛ばされる

両 川 洋 々

古傷を洗う小川に来て洗う
死に様の一つ安楽死に挑む
シャネルの香にうっかり油断する鬼だ
輝いたままで逝きたいなと思う
風に乗って翔ばう少年風になり

阿 萬 萬 的

あつさりと相槌軽くあしらわれ
相手次第時にはほけたふりもする
素人の癖に小理屈こね回し
乗せられてまた責任を負わされる
背伸びする僕たしなめる影法師

石 川 侃 流 洞

幸せな水音父子のバスルーム
雷へ追打ち豪雨のトタン屋根
金貸してまた悔んでるお人好し
奥の手はこれです大砲ホームラン
我が家系に母百六歳の新記録(母昇天)

板 尾 岳 人

恋をしたらしい皿の柿の蒂
美しい人を見つけた欠け茶碗
羽交じめされても恋をしています
好きですと言いくそうなゆで卵
紅葉の下でたっぷり恋をして

奥 田 み つ 子

物思い階段ひとつ踏みはずす
満ち足りた暮らしに覗く小悪魔
のほほんと隣の芝生見えています
虫の音に命の行方問うている
人いろいろ人面白し人怖し

河井庸佑

会者定離寂しき募る同期の計
平凡に過ごせる日々がありがたさ
自己暗示掛けて自分を落ち着かす
問い詰める言葉を選ぶ母の愛
曖昧な態度取ったに深い読み

川島 諷云児

落とし穴人を疑うのは止そう
句読点見直してみる折り返し
ああ人生八十五年の浮き沈み
老残に咲かせる花の種を選ぶ
敵でもなく味方でもないすかん人

木村 あきら

無位無冠今日一日も無事に昏れ
小波を蹴立て白寿へ夢を追う(89翁)
セールスが開けると喋りだすカバン
やすらぎの心をくれる辻地蔵
号笛も高らか瀬戸のミカン船

工藤 吟笑

眠りから覚めた埴輪にある笑顔
此の壁の向こうは波が荒れている
組板の鯉はいっぱい跳ねてみる
海苔を干す島に淋しい母の唄
充電の最中皆さん御免です

黒川紫香

一句また一句が強味持つリズム
水客も潮花も居ない寒い夏
それぞれに残し出て行くパンの耳
先生に内緒話をするえくぼ
ネクタイの要らぬ暮しの町で住む

小西雄々

温もりへ急に心の傘開く
肩ぽんと叩く上手な嘘を聞く
残り火を燃やしてくれたい出会い
何時か翔ぶ日を信じつつ鶴を折る
楽しさに手毬の弾みとまらない

小林 由多香

墓参りお花も高くなりました
無駄だとは思いが頭下げてみる
屋台の灯寄って行きなと揺れている
雑草の伸びる早さに負けられぬ
見る角度山がやさしい顔になる

斉藤 晶

朝顔の蕾を抱いている暮色
金木まで太宰の津軽読みに来る
デカルトを反芻してる昼下がりに
白糸の滝のリズムで生きようか
また今日もひたすら農書読む冷夏

ひと月もすると優雅な山笠囃子
お彼岸ですよとお寺の花に教えられ
僕ん家の寺の祭りは中日で
長月は雨と風から引ずられ
神無月神を出雲へ送る月

田 口 虹 汀

竹 内 紫 錆

新聞歌壇 老兵が目を通す夏
プラスチックの薄さボトルと出る万歩
溶岩流の情性で長い日本地図
損得をすぐ読む脳にみな育ち
呆けぬうち出かけて浸る高画質

田 中 正 坊

何事も等身大と決めている
二列目に私の指定席がある
予定表やりたい事が多すぎる
この歳になつても仕事頼まれる
本を読む私を磨くために読む

河 内 天 笑

妻の留守いちにち宙に浮いている
宮入りの山車参道に勢ぞろい
酒くさいだんじりがある交叉点
月が出ただんごの上に月が出た
情報交換に出雲へ集う神

全日本川柳誌上大会のご案内 (柳多留第九集)

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」(柳多留第九集)を開催します。日川協年第次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大大年行事ですので、こそつてご参加ください。

課題と選者 (各題2句・連記)

「屋 根」

進藤すぎの 橋爪まさのり 共選

「中 身」

板尾 岳人 深町 金鳥 共選

「ギ ャ ラ」

福島 直球 廣島 英一 共選

「他 人」

和田 宏 荻原美和子 共選

「留 守」

新畑ひろし 奈倉 楽甫 共選

第二次選者

磯野いさむ 橋高 薫風 大野 風柳

斎藤 大雄 松岡 葉路

参加費

2000円(投句料)・平成柳多留(第9集代)

賞

平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・

(社)日本青少年育成協会会長賞・(社)全日本川柳協会会長賞

全日本川柳誌上大会賞・秀作賞(予定)

締 切

平成16年1月20日(火)へ当日消印有効

発表・表彰

第28回全日本川柳埼玉大会(平成16年6月)

参加方法

参加用紙(雑誌1句)と出句用紙(2通1組)

に記入し、参加費2000円(振替又は小為替)

とともに左記へご送付ください。

〒530-0041

大阪市北区天神橋二丁目北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

電話

(06) 6352-2210

FAX

(06) 6352-2433



板尾岳人選

吹田市 須磨活恵

今治市 渡邊伊津志

影法師古い思想をぶらさげる

まだ希望捨てずに待とういわし雲

本心を告げないままに時流れ

主役にはなれぬ運命のかすみ草

秋空の郷愁広げるあかね雲

岸和田市 雪本珠子

写メールに小さい秋が訪れる

自分史を書いて頭脳を活性化

ささやかな幸せ花のある暮らし

微笑みは心を開く合鍵だ

迷い道身を寄せ合っている落葉

高知県 貞岡佐紀子

ユーモアで愛の表現勉強中

最後まで人間らしく笑えるか

ユーモアで危機をチャンスにすり変える

ユーモアの感覚ゼロで自己風刺

ヘソクリを惚けないうちに全部出す

生きてゆく知恵が深まる好奇心

甘辛の御世辞にふつと蹴躓き

明日の灯があるから生きる知恵が湧く

アドバイス目線を低くした会話

貸し借りがいから主義も変わらない

大阪市 尾崎黄紅

兵として駿馬も駄馬も乗ってきた

国民のためと大きな嘘を言う

軍手はめれば十歳は若くなり

あとさきの介護を妻と酌みながら

騙されたくはない開けぬ玉手箱

和歌山県 辻内次根

辞書を繰る意欲があれば良しとする

鏡から逃げないように目を合わせる

マニユアルの厚さ私が秋になる

火星まで望遠鏡が届かない

偶然が明日の頁にきつとある

停年後妻に説教されている

唐津市 坂本 兵八郎

シルバーの席に老後が近寄らず
恰好をつけて冷や水飲んでます

あの世へはあとから来いと妻に指示
ぼろぼろとこぼして老いの一里塚

武蔵野市 亀井 円女

散り急ぐことはないぞとやさし亡夫

残されし命の意味を神に問う

八十路まだ驚くほどの好奇心

見事な花よ雑草などと言わせない

お前さん修業足らんと今日も亡母

岐阜市 平野 あずま

五欲満ち延長戦に入る余命

好きなこととしてれば機嫌よい十指

電話口亡父が生きてる兄の声

海のない飛驒の山にも鰯雲

ゴキブリも仲間と思う独居の夜

東京都 やまぐち 珠美

友逝きし夜の鈴虫ひくく聴く(友の急逝)

拗ねもせず戦いもせず列に溶け

牙のない男を抱いて満ちる月

墓穴をえくぼに変えて明日を掘る

もうひとつ顔をつくろう耳の裏

奈良市 乾 春雄

疑いが晴れても残る胸の傷

手応えは勝つたと決めて酔っている

濡れ衣は晴れても噂乾かない

脇役にとんと馴染めぬ自尊心

ポットの湯勝手に飲めと宿の菓子

田辺市 大峠 可動

快楽の脳は絶頂で死にたがり

安楽死したくて主語をあたためる

仏教伝来西も東も京の街

枯葉散る天の余罪と落ちてゆく

追伸や雨の点々水に溶き

秋田県 秋野 宏

ストレスに耐えれば風も凪いでくる

生き残るために鬼とも握手する

幸せのライン低めに引いておく

一輪のバラから明日の夢もらう

感情の起伏に合った犬を飼う

日立市 加藤 権悟

彼岸花天女の祭りかも知れぬ

まだ燃えるものあり古稀の彼岸花

トンネルを抜けると温い国訛

故郷の夕陽に映えた熟柿

フルムーン旅を労るワンカップ

大阪市 升 成 好

流れ矢に不意をつかれた日の誤算
先の先読むとゆらいでくる強氣
言い訳が嫌でときどき貝になる
開閉に嫉のできた自動ドア
どうにでも染まる明日に今日を生き

大阪市 三 浦 千津子

一ランク落とし開ける道に出る
勘のいい人覗き窓持つている
ブランコが横に揺れ出す四面楚歌
反省の深いところに亡母がいる
正直に言うから話縫れ出し

大阪狭山市 羽田野 洋 介

目と耳を内緒話へ研ぎ澄ます
朝の鏡やる気の有無を問いかける
店仕舞いこの手にいつも騙される
うぬほれが最強敵となる油断
舌だけはまだ覚えてる母の味

和泉市 横 山 捷 也

老人会仲間はずれの唄上手
真ん中のイスが私の指定席
休田の隅にカンナが群れて咲く
隙のない女がポロリ国なまり
も少しの辛抱私の泣きボクロ

泉佐野市 稲 葉 洋

球児等の悲喜のアルバム閉じて秋
あやかりの虎も一緒に吠えている
人の常世の常欲という甘露
ひとり言これも孤老の対処法
変なところこけちつて変な無駄遣い

堺市 奥 時 雄

妻の留守思ったよりも味気ない
床に臥す妻に味付け聞いてくる
包帯のない関取が見当らぬ
ホラ吹くがそんなに悪い人でない
銀行も箆筒も安心できません

富田林市 稲 川 恵 勇

正義感抜けず出世に遠く居る
気が付けば矢面に居たお人好し
聞き流す事を覚えて老い楽し
バスポート三日で茶漬け恋しがる
腹の虫大吟醸になだめられ

寝屋川市 中 川 恵 香

茫漠と空も草木も人も夏
風鈴の音もむなしい蟬時雨
客引けて忙中閑あり鳥の声
停年後妻の背中が広く見え
転機とは自ら權とり舟をこぐ

羽曳野市 吉村 久仁雄

どの道を行くも自由と家業継ぐ
ありがたい言葉聖書を写経する
信心は足りてお布施が足りぬ罰
行商のオンナの指輪過去がある
ばあちゃんの知恵ノウハウを嫁が継ぐ

藤井寺市 若松 雅枝

虫が鳴く月と火星の宇宙ショー
我が有妻のヘソクリあてにする
一坪の庭にも咲いた赤いバラ
優勝セール早速買った赤い靴
晩鐘が秋の稔りを包み込む

八尾市 脇 俊子

ひっそりと暮らす中にも塵が舞う
古時計時の刻みに時差がある
人生を思い通りに読み切れず
大笑い笑うとなにか落ちるよう
能面をかぶった人生彩を足す

八尾市 寺川 はじむ

言い訳を煙で繋ぎ考える
安心と書かれた裏の落し穴
七光効かない親である自由
親切を売ったつもりが手を噛まれ
好調な時は何でもよく似合い

八尾市 平川 幸枝

梅雨明けの心に洗うものがあり
心配の種があるだけ親は生き
青春を白髪になって追いかける
長生きを一口に言う敬老日
盆僧のアイスコーヒー一気飲み

伊丹市 延寿庵 野 露

このごろは笑っておれぬ十二歳
三食をしつかり食べる夏帽子
レトログッズ百貨で買う老いの趣味
ピンチとは思わず角度変えてみる
すかたんを聞いた耳たぶ微熱持ち

神戸市 両川 無限

脳天にサタンが眠る宿がある
引き際を知って男の顔になる
点線のような絆を子に託す
振り上げたこぶし納める泣き笑い
ちよつと待て影よここから内緒だぞ

神戸市 伊勢田 毅

生真面な妻が煙たい時もある
訂正は目立たぬように最下段
時刻表夜行列車を消してゆく
内弁慶酒にこと寄せ絡む癖
Eメールであつけらかと自殺する

三田市 七反田 順子

短髪も一月経てば重くなる

あちこちにチャ目つ氣だしてメールする

婿殿はデパ地下の味と誉めてくれ

退職後めつきり減った不快指数

ひっこめぬ迂闊に出した妻の舌

鳥取県 吉田 弘子

情報に埋もれ五感が病んでいる

半熟のまんまで親になつてゐる

冷蔵庫空気のようにいる卵

青春の足跡残る無人駅

魚グルメ七つの海をひと飲み

鳥取県 福西 茶子

白髪そめシャネルも連れて同窓会

泥流にわたしの城が流される

打ち上げた花火に溶かす片想い

通勤の道に案山子の呆けた顔

肩パッドはずして見えた人の情

鳥取県 橋谷 静江

わが里は花回廊という宝

褒められてまだ女です少し照れ

人並な暮しがしたく種を蒔く

マイペース一日二十四時間だ

チラシ見て財布の中を確かめる

鳥取県 山岡 久枝

体調を野菜サラダで整える

蹟くな三里の灸を据えている

ほら話聞いて晩酌かたむける

辛抱が戦時中から身についた

おとなりの音も気になる元氣そう

倉吉市 酒井 芙美子

天までは遠いゆつくり旅仕度

ホカ弁が我が家の食をおびやかす

誤字脱字母の便りが暖かい

五十年やつぱり好きに变りない

好きだけどやつぱり胸に秘めたまま

鳥取市 山口 千代子

捨てきれず昔の派手な服を着る

背伸びなどしないで自分なくさめる

いい月だ母の笑顔が見えそうだ

八十路すぎ人に頼らず出来る幸

淋しさと悲しみ深む秋の風

米子市 足立 由美子

陽の当たる場所が恋しくなつて秋

よく当たる店だと聞いて買いに行く

愛犬と話せば今日が癒される

感動と癒しをくれたコンサート

私もリフレッシュする雨の午後

島根県 毛利 幸

人生の流れ淀みが邪魔をする
つまずいた人生妙な味がする
小手先の策に溺れて流される
夕焼けを両手広げて胸に抱く
果物は季節知らせるカレンダー

島根県 武島 ちよえ

親の目を盗んで孫を甘やかし
夢はもう追わなくなったシャボン玉
聞くだけは聞いて噂に釘をさす
今の事耳から耳へ通り抜け
精いっぱい舞って枯葉は地に還る

出雲市 川島 和歌子

だんまりの雲行あやし夫婦著
父に似る入道雲の怖い顔
自笑する馬鹿がついてる物忘れ
軽い口叩けば埃出て来そう
晩学に残り火燃やし闊歩する

愛媛県 黒田 茂代

恋という文字に溺れたことがない
投稿欄寒いところに灯をともし
一の蚊のかたきを二の蚊取りに来る
気を抜くとべったり続く怠け癖
便利さの後ろに潜む落し穴

今治市 塩路 よしみ

ぽっかりとところに穴があきました(夫逝く)
ふと浮かぶ哀しい影が立ちつくす
意地張って空しさ残る風は秋
ことりとも音せぬひとりティータム
さよならも言えずにひとり逝く別れ

高知県 百田 幸

私にもお皿割りたい時もある
流される笹一枚に似た余生
飲みこんだ不満が顔をゆがませる
風除けに時には杖になり夫婦
蓄えて他所行き着れず捨てられず

高知県 桑名 孝雄

寸鉄を帯びて四面を楚歌にする
赤コーナー蟬螂に似た僕が居る
御令室様の顔ではないな披露宴
わたし達やがて模範の比翼塚
日本の首が北向けしたまんま

高知県 近森 功

地下足袋を買い替え祖父の万歩計
ネクタイも名刺もいらぬ無位無冠
無位無冠足跡だけは子に残し
農捨てた息子に送るこしひかり
五年日記入退院の記録かも

アルゼンチン 松井 美稚子

春陰や会えぬ距離でのラブレター

門口で井戸端会議百日草

追伸の四角い文字に貼りつかれ

温情も不用とばかり寒の月

秋田県 湊 修水

飄々と九十二年と六ヶ月

生き抜いた昔話を繰りかえす

仙さんよ政界進出どないです

晩酌は熱燗おでんの寒い夏

横浜市 金森 徳三

前線の動きに四季がまどわされ

あの世への土産に火星見ておこう

忘れてたSARS気になる秋の風

休肝日明日の晩が待ち遠しい

横浜市 長島 亜希子

不況下にブランド店は長い列

夫より夫の都合が先にされ

五階まで誰が教えたアリの列

じいちゃんのおでこどこまでかと訊かれ

横浜市 石原 三郎

身にすぎた鮑あきらめ今の妻

コマーシャル見てやるものか目をつむる

疵つけぬ言葉を選ぶ歳となる

家中の時計ピッタリ合っている

横浜市 芦田 鈴美

たらればで生き抜く駒を見失う

愛犬の尻尾好みを振り分ける

ひまわりの隣に咲いたひがん花

マニキュアの爪が伸びてく無洗米

静岡県 中西 雅

庭で鳴く目ざまし時計夫婦鳩

気がねなく笑う心の広い人

まかぬ種みごと花咲き邪魔をする

秀才を育てた母の子守歌

富山市 松見 たえ

焦点の軋む路線を振り返る

不器用に生きて流行など追わぬ

ジंकスが脳裏かすめて出遅れる

間違いを素直に認め楽になる

京都市 清水 英旺

雲水の野太い経はカルテット

まつかさを踏めば乾いた秋の音

色気から食い気に転向するお歳

お呼ばれに好みのネクタイ締めていく

大阪府 桑田 ゆきの

旅の宿安眠枕に夢詰める

一粒の真珠に太る虚栄心

枕蚊張かこの小鳥になった夢

海ゆかば忘れておらぬ母傘寿

大阪府 神野 千恵子

心配を持たず残さず逝った母
幸せを感じるような紋りたて
よつこらしよ 一つの間にやら癖になり
大ジョッキ暑さまると呑み干して

泉佐野市 備後 三代子

夏草にかくれんぼした花鉢
昨日今日同じくらしのありがたさ
八十路ともなればどんぐさ どんぐさい
配当はゼロの封書が束で来る

大阪市 伏見 雅明

ピアスした男が担ぐ村祭り
セーターを編みおえぬ間に恋終わる
古里の秋の味覚が語りかけ
我が耳は陰口だけをよく拾う

大阪市 井丸 昌紀

長い髪追いつく度に振り返る
ブランドの袋の中にねぎ大根
定年の祝いエプロンあてがわれ
一つだけ孝行をして夜遊びに

大阪市 近藤 正

自衛隊月の砂漠にしゃしゃり出る
見つけたぞ葉がわりの五千元
大接近月と火星のランデブー
阪神も月下美人もたまに咲く

大阪市 寺井 弘子

ハイと言う日本語の持つ美しさ
笑わそう赤ちゃんあやし泣き出され
夫との約束先へ先へ延び
耳たぶにシャネルをつけるある期待

柏原市 伴 洋子

無能を悟る痺れきらした石の上
黙認をした時からの共犯者
出迎えの母が手を振る跨線橋
台風が橋を立派にしてくれる

交野市 田岡 九好

願い事生々しくも持っている
爆走に国の壊れる音を聞く
借金がきらきら光る市のドーム
昂然として憑かれおり北の民

河内長野市 坂上 淳司

古稀近くまだ血が騒ぐ時がある
禁断の絵を見過ぎたか眼の疾
今在るは神の目こぼしあったから
そろりそろねむくなるよな風の盆

堺市 荻野 象山

うす味も貴方のためと食わされる
旗色が変わりタバコが震え出す
吸い殻をたんと溜めてた負けゲーム
ゆつくりがいつも損する頭割り

堺市 柿花和夫

豊中市 源田啓生

石仏に似た顔となり旅終える
台風はやはり女の名が似合う
追いかけてきたのは月と影法師
三猿と仲良くなつて母老いる

堺市 大久保伸子

物忘れした友達にホツとする
生き生きと妻出歩いて平和なり
消しゴムで消したい人がひとり居り
群れてると気楽になれる仲間たち

吹田市 二宮栄子

DNAかとてもおもしろい児が育ち
いいばあちゃん演じしんどい時もある
娘の注意無視したつけのサロンバス
座る場所あつてくつろぐ里帰り

吹田市 木下敏子

打たれても真つ直ぐな釘まるく生き
いつまでも心の歳は若過ぎて
賞味期限切れた夫婦の深い味
踏み出した一歩に夢をふくらませ

豊中市 藤井則彦

エアコンもエレベーターもあるお城
大阪弁あまり聞かない大阪城
殿様も居ないお城にガードマン
一城の主は今日もお留守番

ごはんだよ夕焼空に浮かぶ母
母という仏忘れた時の闇
巡り合う六万年の赤い星
私の殻を脱いだら楽だろう

富田林市 古田千華

木枯しの一号吹いて君想う
ボージョレヌーボー君の想い出また一つ
神無月 神といつしよに出雲まで
北朝鮮に残せし子等の眼にも月

羽曳野市 濱口フジ

雲間から顔をのぞかす十三夜
ダンゴ食べ月見と称し酒を飲む
ロマンかな世界が見える同じ月
失恋の痛手吸い込む月明かり

羽曳野市 森下一知

作業着のボタン千切れたまま解雇
あいまいな返事に続くぬかる道
左手が庇う右手の後遺症
居酒屋でちよくちよく出会うハイヒール

羽曳野市 永田章司

年金で安心だったはず老後
癖のなさ皆に好かれて利用され
ミスのない男同時に頼りない
暑中見舞 癖字が故郷しのぼせる

羽曳野市 福田悦子

おお寒いのはんはキミを待つている
どこまでも私離さぬ影法師

どこからか第九聞える寒い夜
年賀状に書けぬ淋しい亡母の名を

東大阪市 田中美弥子

哀しみの極みを抱いて生きていく
お願いだから私を置いて逝かないで

嬉しくて寝るのが惜しい十三夜
たこ焼きが好きでまあるく生きている

枚方市 二宮紫鳳

朝顔が咲いて我が家は平和なり

秋一番ウオークシューズに虫の声

コスモスが揺れて小さな自己主張

コスモスへバトンつないで秋に入る

枚方市 小川良吉

甘い読み暴落のつけまだ疼く

目が合って心読まれて買わされる

トラ燃えて俺も俺もと傘の中

三吉もトラ応援の通天閣

藤井寺市 伊藤アヤ子

酷暑が焼けた素肌をなお焦がす

俄雨相合傘が縁結び

私には自慢が出来る里がある

鶴と亀若い二人の道しるべ

藤井寺市 西村栄一

どん底で知る信用のありがたさ
罪一つ許して仰ぐ青い空

青空に恥ずかしくない日を送る
災難も神の試練と受けとめる

藤井寺市 喜島芳江

人生は出会いと別れくり返し

抱いた子に軽く抱かれる病んだ母

気を張らず自然のままで生きている

試着室腹ひっこめてMにした

藤井寺市 鈴木いさお

うす味がこのごろ口に合ってきた

まだ少しシルバーシートに気兼ねあり

八十になつて九十へ欲が出る

いい夢の続きは明日へ残しとく

八尾市 西川義明

切売りの西瓜で足りる老夫婦

親に似て世渡り下手の冷奴

嫁がせて腑抜けの部屋で妻とお茶

風鈴の南部の音にやす耳

八尾市 鷺見章

夏ばてを知らぬ私の車椅子

傘を捨て猫をかこんでランドセル

湯上りの肌にやさしい秋の風

朝のパン美味しく食べて有難き

八尾市 赤木 妙子

押し売りの手には乗らぬと深呼吸吸

地球でも騒いでるよと火星人

地の底で胡座かいてる大鯰

便箋の空白に本音隠しとく

八尾市 松葉 君江

嫁姑絆深める玉子酒

温い土ぞっこん惚れて根をおろす

脇役に徹しあしたの米を研ぐ

見ぬようでしかと見ている親の汗

八尾市 田中 トシエ

一行の余白があつて救われる

終電車百の未練を積み残す

抱きとめた妻の不満に火傷する

泣くなんて馬鹿だと言つて泣いている

尼崎市 河津 正治

素晴らしい夕陽に幸を噛みしめる

音痴でも姑に合わせる周波数

何気ない仕草で愛を確かめる

胡弓の音哀愁に哭く風の盆

池田市 多田 契子

浮き浮きと一人のジャズでダンスする

今も好きスクラム組んだ労働歌

居眠りに悪い予感も通り過ぎ

恐い顔の月が希望を持てという

川西市 井本 清山

秋の宵平凡なれどサンマ焼く

時は秋折り合いつかぬダイエツト

晩秋に小さい土鍋ひとつ買う

顔すめば爪まで化粧する座席

神戸市 田中 章子

ながながとしゃべる相手のある安堵

心配のし過ぎが明日を曇らせる

子どもらに説教されてうれしがり

つい口を出たひとことが歩き出す

神戸市 山田 婦美子

飽食の世に生き冥加さえ忘れ

残暑が続き木の葉も裏がえす

生甲斐は冷えたビールと笑い声

冷夏過ぎノルマを果たす蟬の声

篠山市 谷田 多美子

八月にかなでる歌は海ゆかば

脇役で今日も括めくくる冷や奴

今日も雨朝から肩の凝る話

百までも生きるつもりの家修理

三田市 石原 歳子

一言が胸につかえて不味い酒

認められ長いトンネルやつと抜け

豊かなる国も住まいは兎小屋

嘘ついて親を安心させている

奈良県 江波 正純

小粒だがでつかい夢を持つている
よく笑うこんな亭主に飽きもせず
焼肉の匂いに勝てず駅降りる
父さんを詩人に変える縄のれん

奈良市 矢野 良一

最後まで気を抜かないでタイガース

霧雨に煙る吉野は山水画

ネジ巻けば今もチクタク古時計

道頓堀はなにわ文化のおもちや箱

奈良市 成橋 邦柳

姿なしこの世を謳歌虫の声

猫虎が猛虎になった十八年

関西を見たか聞いたか虎嵐

直球を投げて生きるはまた打たれ

橿原市 藤永 実千代

定刻は五分遅れと決めている

甲子園土もはるばるやって来る

速記文字ごとき便りに骨が折れ

これでこそ夏だと妙に納得す

和歌山県 村中 悦男

その時に考えますと妻は言う

手を合わす三度三度の妻の味

聞き上手秘話もぽつりとこぼれ出る

消しきれぬ過去の画帳は開かない

和歌山県 根田 よしこ

病院の窓からひとり月見する
見回りのナース気になり寝付かれず
お父さん月夜にだんご盗み食い
仲よしは皆あかんたれ気楽です

鳥取県 毎田 信翁

煩惱と遊んで歩く夜の街

愛してると言わず仕舞の亡妻に詫び

無念無想 雑念が出て邪魔をする

魂は心の奥に鎮座する

鳥取県 西垣 美知子

感激のある言葉には嘘がない

座禅組み傾く心取りもどす

凜とした熱い眼差しくれた母

土足では入れぬ母の膝の中

鳥取県 岩崎 和子

どしゃ降りに洗車されつつ家路つく

なめこ汁九月の残暑シャンとさせ

風変えて気楽に生きるすべを知る

近く夏を惜しむかのような花火散る

鳥取県 平木 公子

議事堂へ雷喝を入れに落ち

そろそろだ本を揃えて夜長待つ

何かある妻が無口になっている

余裕ない暮らしも生きている証

鳥取県 細田裕花

余裕ある日本になってせびられる
単身赴任ゲリラ気取って妻が来る
妖怪も棲みにくいだろ街明かり
大接近 火星の素顔覗いたろ

鳥取県 西原真一

いいこともあればよくないこともある
私にはプラス思考は荷が重い
生きているそれだけで価値あるという
考えていたより命重いもの

倉吉市 青砥菊枝

一週間の命を燃やす蟬の歌
老いの身は心裏腹笑つとく
生真面目で一人の嫁が決まらない
お盆明け真夏来たやら残暑やら

鳥取市 大坪天涯

さあ今日で息子は二十歳酒を買う
稜線がくつきり里は美しい
大切なひとだから今逢いに行く
色褪せた写真 物語が深い

米子市 猪森スミエ

妥協した後の空気を深く吸う
妥協していざこざ流す川がある
故郷の訛りは保存箱に入れ
板わかめ出雲訛りが浸みている

鳥根県 持田多輝子

満ち足りた今日一日の湯があふれ
やがて秋楽しいプラン友と組む
ふる里に母の姿がある絆
会者定離送り送られ渡る娑婆

鳥根県 菅田かつ子

夕やけへ燃えるカンナの激しすぎ
ゆつくりと亡母の背洗う墓洗う
おおらかな地蔵へそつと手を合わせ
脇役はあちらこちらへ気を配り

安来市 原 煩惱児

萎えた身に鋭気を貰う夏の雲
憲法の解釈美名の下に揺れ
イラク支援総理あなたは行きますか
帰省子へ赤い夕焼け出迎える

出雲市 多久和敬子

姿見の前で言い訳考える
ポケットで白いハンカチ自己主張
もつれ糸結び直した月の夜
ふる里のバスは何時でも温かい

出雲市 荒木英子

日々草幸せもらい亡母の影
ざらざらと農家に欲しい暑い夏
気がねなく娘世帯に入りこむ
余生まで夢を燃やして旅をする

松江市 松浦 登志子
生活苦メロン買わなきや乗りきれる

下駄箱が足の歪みを知っている
故郷に迎えてくれる大樹あり
存在がくちなしの花ですあなた

岡山県 矢谷 富士野

名月が純金ならばすごかろう
鰻焼く加減知ってる渋うちわ
故郷に秘めた恋あり曼珠沙華
若者がこんなにも居た秋祭り

倉敷市 撰 喜子

大ぶりのさんまを猫と分けて食べ
初孫に主役とられてすねる猫
期待した子は出世して遠く住む
善人を演じてどっと疲れ出る

府中市 馬場 利子

貯金して利息とられる日が来そう
楽しみを明日へつなぐシャボン玉
過去の思い出キャンバスへ秋を描く
花の息聞いてゆっくり窓開める

府中市 岩本 雅代

白い肌夢みて作るヘチマ水
亡母の忌に恋しく綴る日記帳
のびきった夏の体の重たさよ
見栄を張る仮面下から刺が見え

北九州市 岡田 幸生

故郷の余韻に揺れる夜行バス
悔しさをバネに努力の実が結ぶ
種のないぶどうに怠けだした舌
呆け少し混じりでできた人間味

愛媛県 花岡 順子

腹八分とつくにすぎた気の緩み
好きなことたつぷり生きてます私
寝た振りの耳へ容赦の無い小言
優しさに頼りすぎてから怖い

今治市 野村 清美

いい方へ考え心落ちつかせ
和解して雲も優しく浮いている
不器用な愛が結んだ縦結び
何事もプラス志向の楽天家

松山市 山之内 八重美

原石も磨けば光る夢を持つ
ときめいた三日坊主の健康器
絵合わせで老化防止になるバズル
彼岸花咲くと切ない里心

札幌市 三浦 強一

肝臓を休ませる日に友が来る
縄のれんぐるとほくの解放区
天国へ行けるのですか自爆テロ
合併へばくの田舎の名が消える

草津市 久保和友

沖繩の慰霊終りて梅雨明ける
朧ぶるいして金星をねらう顔
モンゴルの山河が見たい旅十日

東京都 井上 つよし

追い越して母を振り向く三輪車
人相観当たり出すのも年の功
塩味を効かして包む父の愛

横浜市 布山 嘉信

年齢を知る下山に膝が笑い出す
縦走の疲れにそっと薄化粧
顔色を見るよな駄案じられ

新潟県 高野 不二

百均でやっぱり安いものも買い
ネクタイのいる用事ならお断り
解説を聞いても政争わからない

京都市 三宅 満子

人知れず咲く花みんな美しい
何もかも許されそうな青い空
もうゴミに出そか思案のハイヒール

大阪市 平井 露芳

登るのは止めとき富士さん汚すから
よそ者の舞妓どすけどよろしゅうね
ペットシヨップ死ぬまで飼えと言うれど

大阪市 中村 忠敬

コンビニでおふくろの味売られてる
打ち水と浴衣でビール夕涼み
水槽でくらげが上下涼しげに

大阪市 池上 清治

この冷気残暑見舞を出しそびれ
古希なんかまだ人生のど真ん中
家計簿と日記途切れず五十年

大阪市 吉内 タカ子

炎天下早赤トンボ飛び告げる
砂嵐避けて通れば蚊帳の外
久方の許せる友の長電話

大阪府 高木 道子

今世紀不思議の国にいるような
秋の風銀の雨つれ通り過ぎ
販売機面倒臭げに釣り落す

大阪府 前田 ゆい

少子化にのら猫の子がまた生まれ
念入りに塗ってごまかす歳も過ぎ
デートには監視カメラのない道を

大阪府 畑中 節子

秋彼岸コスモス風と戯れる
天道虫茄子が好きよと浮気せず
夏の夜の火星接近豪華版

老人は二人三脚友達と

大阪府 藤井郁代

いたむ胸星空仰ぎ時忘れ

熱帯夜 朝寝昼寝で埋め合わせ

河内長野市 木太久 正一

秋風が吹けば稲穂が呼ぶようで

気休めに駅で立ち呑みドリンク剤

長生きは孫の成長楽しみに

大阪府 野田栄呼

この笑顔相手を包んであげるもの

カーナビで方向音痴どこへでも

三年も我が家帰れぬ三宅島

一服のお茶に平和のねがいこめ

冷夏長くようやく鳴けた蟬の声

生駒市 小西稔

駅弁で昔なつかし味の旅

人よりもぜいたくしてるベツト族

宿題が出来て安心親も子も

旅に出て落して来たい目のウロコ

エネルギー光あつまる村の杜

路線バス乗る人僅かお気の毒

和泉市 小坂凡英

万景峰号なにか焦点ずれている

売りつくしやたらに買う気煽りたて

靖国の棘を抜くのは日本人

愚痴綴る日記にもある自己嫌悪

世間知らず定年も過ぎやつと知る

太らぬの約束が欲し味の秋

和泉市 竹中歌

過疎の村静かだけでは生きられぬ

母一人暮らす庭には男下駄

真つ白いエプロン似合う母が好き

のら犬を避けて来たのにまた出会う

皮下脂肪似合った服をあきらめる

削るところとこないかと見る家計

門真市 矢阪英雄

何故だろう胸襟とめるボタン落ち

レギュラーがチャンスに三振ばかりする

今秋の米でつくった酒とどく

こつこつと努力が今日の金メダル

胸襟をとおけない暑さかな

何故急ぐ自殺三万福祉国

岸和田市 坂口英雄

岸和田市 土橋房枝

岸和田市 亀井皎月

岸和田市 中島寿海

河内長野市 内海綾乃

岸和田市 堤 椿代

ダイエツト軽い食事がストレスに
大声で呼ばれ他人になりすます
他人様可哀相にとだけですみ

高槻市 安田 忠子

開発という名で国土破壊され
ニセモノの名画一〇〇〇点息をのむ(大塚国際美術館)
渦潮の大蛇のような白い波

高槻市 執行 稲子

キヤラクターがひよいと来そうな地下の街
小鳥飛ぶ武蔵の鋭い筆の先
厄の坂いくどか越えてありがとう

高槻市 田中 初恵

フィルターを通して過去を浄化する
アンビシャスうかうか失せて夏果てる
バーゲンを待つてだけの虎ファン

高槻市 大崎 侑子

腹立ちは日記に書いて抑えこむ
一張羅子の絵日記が暴露する
盆供養される立場も遠からず

東大阪市 今岡 貞人

寿命延び筆筒預金も減りつづけ
過ぎ去れば猛暑も恋と秋の風
この歳だ同窓会に胸が鳴る

枚方市 大昇 隆広

里帰り畳やさしく先ず午睡
善人の苦勞判らぬ未熟な世
我が意地をさつと崩した児の寝顔

枚方市 莊司 弘之

手が触れて心ときめく時がある
白黒を決めずに生きてきた人生
コスモスに揺れるトンボと見る夕日

藤井寺市 吉田 喜代子

ばら生かす産衣のようなカスミ草
飽食に警告鳴らす不況風
痛風に贅沢病と負け惜しみ

藤井寺市 俣野 登志子

何となく誘いそびれて一人旅
何となく今日も暮れゆく虫が鳴く
月下美人咲いてにぎやかになる居間

箕面市 寺井 柳童

これしきの雨にひまわり生き返り
身を削り昆布と張り合う鰯節
平和への糸口見えぬ砂嵐

八尾市 笹倉 ひろし

リストラが勾う課長の屋台酒
玉の汗流れ野菜の糧となる
秋月と可愛い火星のランデブー

兵庫県 岩 本 美緒子

生きた証付き合う傷が一つ増え
蜩の耳へ涼しく日の残暑
鬼も出る祭りばやしの亡父の里

兵庫県 黒 崎 美紗子

ひっそりと迎えてくれる露地の花
つれづれの思い出偲ぶ通夜の席
帰り道ついて来るくる星一つ

兵庫県 安 達 厚

有難いもつたいないと旅の宿
朝昼番眠たい時に寝る余生
シェード菊自然のままに咲きたかろ

兵庫県 永 井 かほる

一日が三十時間あったなら
安いもの探して歩くボケ防止
朝二時間ストレスはきに畠です

尼崎市 古 川 正 子

さるすべり残暑に負けず咲いている
黄昏に半月見えて家恋し
月を見に外に出て聞く虫しぐれ

尼崎市 桑 原 東 園

印一つ押すか迷いの手を戻す
台風が過ぎてネクタイ締めなおす
土砂降りがしっかり叩く鬼瓦

三田市 堀 正 和

遊んではおれぬ年金まだくれぬ
百までも遊ぶつもり策を練る
極楽にどんな遊びがあるのかな

三田市 辻 開 子

六十路です手さぐり菜園卓に幸
青春は傍若無人で時が過ぎ
愛不足今年の菊がそつぽ向く

西宮市 片 山 忠

嵌められた話にわざと乗ってみる
橄飛ばすわたしに後ろ楯がない
生きていく苦肉の策は笑顔かな

奈良県 南 海 美知夫

こっそりと悪魔が飲ます盗み酒
休日が毎日となる空しさよ
もう少しおおらかなれば好々爺

和歌山市 橋 爪 佐 一

ストレスはみんなこの世で捨てるもの
へそくりを持てば持病が疼き出し
枯れすすきなりたくない深い欲

和歌山市 土 屋 起世子

大舟に乗ったが風も止んでいる
お天気はどうあれ種を蒔いておく
呆けぬうち身辺整理したいけど

和歌山市 今 一 歩

熱帯夜昼と夜とを変えてみる
吐いている嘘を叩かず聴いている
世界遺産ビデオ眺めて旅つもり

和歌山市 喜 田 准 一

一呼吸置いて話を丸くする
悪いとは思っていない面構え
ブランクを埋めてリズムを取り戻す

和歌山県 森 下 順 子

バランスがとても大事な趣味の会
書き終えた我が分身へ切手貼る
メルヘンの風連れてくるみずの詩

鳥取市 岡 田 信 恵

傾いたこども支える母の知恵
言い訳の上手な孫にのせられる
薄味でなれた家族は健康だ

鳥取市 近 藤 秋 星

鳥取の顔大山は凜とあり
春夏秋冬秋には秋の花が咲く
見通しが立たないままにいつか秋

鳥取市 河 田 のり代

旅すれば花の色ほど友が出来
名月が悩み集めて欠けて行く
青春の虹の炎がまだ消えず

鳥取市 横 田 春 名

失敗を老化のせいと寂しがる
秋晴れにためいき預け歩が軽い
もたつくと秒針やけに早くなり

鳥取市 谷 岡 清 子

いやなれど老いは皆来る平等に
悲しけど行く道杖となるやがて
思いやる絆にすぎる老夫婦

鳥取県 藤 山 弘 子

自転車で新発見へ街めぐり
秋祭り出店楽しむ味がある
各々の祭りにカメラ回す秋

鳥取県 鈴 木 一 弘

皆止まれごめん私が先に行く
暇だから仏壇掃除しておこう
旧道をたどり自分史書き上げる

鳥取県 竹 森 富久江

時たまに主婦ラッキーな刻ひとり
カラオケの喉の痛みが糧となり
耳いつも遠くに父母の声を抱く

鳥取県 岡 村 孝 明

かいた汗妻の晩酌疲れ飛ぶ
火星人地球の喧嘩笑つてる
しみじみと日本よい国だと思ふ

鳥取県 西尾 敬之介

あれが効くこれがよく効く健康食
やっと咲く夕顔一輪頼ずりし
帳尻の合わせぬそのわけ外れくじ

鳥取県 竹信 照彦

日が昇る頃に仕事が進む農家
日が昇る頃に目覚める僕の性
火星にも会えぬ夜半の雨しきり

倉吉市 前田 喜美子

芽ぶく頃人の心も狂いだす
夫婦別姓いわゆる強いのは女
何時からか手元に置いた虫めがね

米子市 池尾 保子

アパートの保証印押して不義の仲
登山道あと押しされる歳となる
お見舞に明るい話おいてくる

米子市 小塩 智加恵

十年の保険満期やまだ生きる
一本の入れ歯に夫右往左往
ガラス戸に映す時には腰伸ばす

鳥根県 福岡 博利

本や筆ちらかしているから安堵
生芋を盗んで食べたシベリヤよ
ビス一本弛んできたか日が暮れる

出雲市 加藤 スズコ

冗談に乗って笑って丸く生き
泣き笑い馬鹿を鎧に生きた道
会える日を信じ夢追うちぎれ雲

出雲市 梶 ミツエ

秋の風散歩の道をついてくる
影法師私と一緒に散歩する
夜の風歌がきこえる赤とんぼ

宇部市 高山 清子

正論を言って一日孤独感
かと言ってゴメンとすぐに口に出ず
食べながら痩せる話で盛り上り

唐津市 岩崎 實

念仏と尺八師僧観自在
水撒きに虫の音高く呼応する
まだ杖はいらぬと言ってよろける

東かがわ市 向山 治延

落葉焚く鳴戸金時匂い出す
地球では緑ほしいと木を植える
台風で案山子は何処へ行ったやら

愛媛県 安野 かか志

一缶で足りる冷夏の生ビール
うま過ぎる話に揺れるやじろべえ
中傷をされて弱気になったペン

予 告

川柳塔80周年記念第10回川柳塔まつり
平成16年10月10日(日) 於・アウィーナ大阪

追いつけぬつるべ落しの陽のはやさ
昔から得意な葉らん活け自慢
観月の女グラスの泡で酔う
高知県 西 森 善 蔵
ご指名にわたし音痴とマイク置き
宇宙学気の遠くなる数並べ
ちゃんづけで今も竹馬の友を呼び
南国市 小 原 圭 二
トラックもバスも運転手は孤独
雷が未練ありげに遠ざかる
草を引く妻の背中が義母に似る
日高市 根 岸 方 子
兄嫁の色に染まった里の秋
ワンテンポ遅れが紡ぐ赤い糸
頑張れど日ごとに増える皮下脂肪
青森県 福 士 ト キ
幸せの神を引張る力なし
不況波 座礁すれすれ我が家丸
母がいる唯それだけの起爆剤

出雲総合芸術文化祭 川 柳 大 会 ご 案 内

日 時 11月22日(土) 11時～
会 場 出雲市市民会館 301号室
兼 題 (各題2句)
「跳ぶ」 内田 久枝 選
「きのこ」 辺 安子 選
「分ける」 松本 文子 選
「柿」 富田 蘭水 選
「癖(くせ)」 金築 雨学 選
「マスキ」 但見石花菜 選

席 題 1 題 出句締切 13時
会 費 1500円(昼食費を含む)
賞 市長賞、教育長賞ほか
欠席投句の方は、参加費1000円、または
80円切手12枚を添えて、11月10日までに
〒693-0052 出雲市松寄下町284

吉岡きみえ宛
主 催 出雲市・出雲市教育委員会
出雲総合芸術文化祭実行委員会
出雲市川柳連盟

第26回 神戸川柳大会

日 時 11月23日(勤労感謝の日)
午前10時開場
場 所 兵庫県民会館9F大ホール
神戸市中央区下山手通4-16-3
TEL 078-321-2131
課 題 「目」小笠原双城(時の川柳社)選
「口」山中 忠(ふあうすと川柳社)選
「爪」西口いわゑ(川柳塔)選
「手」筒井 祥文(川柳倶楽部%)選
「頭」泉 比呂史(ふあうすと川柳社)選
「腹」小松原爽介(時の川柳社)選
「脈」大森 一甲(時の川柳社)選
アトラクション グループ「ザ・マインド」
“心に歌を”

◎各題2句・欠席投句拝辞・席題なし
◎会費1000円 各題秀句呈賞
◎出句締切 11時30分 開会 13時
主 催 神戸川柳協会
後 援 神戸市・神戸市教育委員会
神戸市議会 ほか

麻生路郎物語

(23)

『川柳雑誌』戦時奉還

東野大八

五十台に入った路郎の耳にやがて戦争の軍靴の響きは次第に高まりをみせはじめる。

昭和十五年、路郎五十三歳、時に建国二千六百年記念の年に当る。川柳雑誌もその記念号とし、前線將兵の活字飢饉に慰問品として大量に寄付。またこの年の九月号は川柳創刊二百号記念にも当たっている。建国二千六百年奉祝・創刊二〇〇号記念を九月十五日三越八階大ホールで開催。盛況を極めたところ。また十一月十二日堺市の婦人団体に「戦時婦人生活確立講演会」で熱弁をふるい笑いのうちに趣旨を貫徹好評を博す。以上を中心に路郎の川柳活動を真黒になる程、詳記した山雨楼メモにはつぎのように記されている。

「ことしはよく働いた。働いて、働きぬいた。スリ減つてしまふんじゃあないかと森東魚氏や蛭子省二氏が案じてくれるほど働いた」

「私の無帽時代はかなりながく続いたが、

十五年の暮、娘が帽子を買ってくれたので、無帽時代に別れを告げ、戦斗帽を愛用することになった」

戦斗帽に国民服、いわゆる川柳報国をスロ―ガンに、雑誌編集も講演日程も塗りつぶされる銃後の緊迫した毎日。昭和十六年に入り川柳の全国支部も、統廃合が続いていく。

「五月七日大阪府警察部特高検閲課から指示があり、柳誌統合問題は『川柳雑誌』と、『番傘』を残すことを容認され、『昭和川柳』『川柳春秋』『東煉瓦』『天守閣』『つるはし』は統合または廃刊することが決った」この年のことかと筆者は記憶しているが、森鷗牛主宰の「三味線草」が井上信子主宰「巻雲」中の鶴形の

「手と足をいまだ丸太にして返えし 彬

一 万歳と必死に叫ぶ自己欺満

などの一連の作品を反戦川柳と指摘している。この消息を筆者に伝えてくれたのは和田

默然人で、そのときの言葉を今も明確に記憶している。(往時、筆者は在北京)

「川柳人同志が非国民呼ばわりで争いを起すなどとはもつてのほか、それまでは俳句彈圧一辺倒だった特高の眼が川柳にも光り出すことになる。川柳受難の幕があいたわけだ」

この話のあと北京川柳会の席で某から

「王将は一番色の白い駒 (詠者失念)」

がその筋にひっかかったことを耳にした。

「川柳雑誌・四〇〇号記念特集」の座談会につきもの個所がある。

路郎 川柳塔の句が検閲にひっかかったり特高へ呼ばれたりしたが、最後まで始末書を書けといわれても書かず頑張り通した。

古方 私の句もひっかかりました。

一寸だけ喋るに役人供をつれ

たったこれだけの句ですのになあ。あの時は先生にえらい迷惑をかけたものです。

路郎 検閲にひっかかった川柳塔の「ペー」ジを破いて発送したりして苦心をした。戦地へ送ったものまで返送させよというのだから手のつけようがなかった。短詩型の雑誌で有保証は「川柳雑誌」だけなのだから自由にかけるのだが、進駐軍が来るまではやはり言論の自由はなかったわけです。

大東亜戦争はすではじまっていた。戦局の様相は、一段と深刻の度を加えていった。

さきの座談会の記事にもう一度還そう。

葉 昭和十七年十二月本社句会は「大東亜戦一周年記念川柳大会」として御津八幡宮で開催、その翌年の創立二十周年記念南方動物川柳会を天王寺動物園で四月にもち、翌十八年六月に「食べられる雑草の吟行」を南海高野線郊外で催したころには、戦局も香ばしくなくなっていました。

古方 雑誌奉還はいつでしたか。

路郎 私の肚は昭和十九年の十二月号ときまっていたので、募集課題も十二月号でキチツとおさまるよう編集にも苦心しました。紙やインキの欠亡からとはいえ雑誌奉還を発表したときはみんな暗然とした。それまでには柳誌にも合併という統制時代があったが、わが川柳雑誌はその憂き目を見なかった。しかし物資の欠亡には勝てず、ついに奉還することになったのです。

「川柳雑誌」雑誌奉還は昭和十八年十二月号であった。その終刊号のナンバーは二三九で、岩崎柳路のカメラによる蒙古人の少女の微笑がその表誌を飾っていた。路郎にとってはそのあどけなげな微笑をへだてて千万無量の想いが、その全誌にこめられている。文中の庄巻は「苦斗四十年」と題するわずかに四頁に圧縮された川柳生活四十年の回顧である。この一文は、すでにこれまでの各篇に適宜抄録したので重複を避けるが、路郎にとって「川

柳雑誌」の終刊はまさに劇的な体験であったことは言うまでもない。

その終刊号の開巻へき頭にこうある。

戦局は一寸刻みに緊迫して行く。雑誌などにぶら下っている時ではない。文化は第二陣だ。雑誌なんかは潔く投げ出して直ちに戦士配置につくべきである。それこそ我々に課せられた重大使命であると観する。

ここに本誌は自発的に巻を閉じることとした

——終刊の辞

みたみわれ 大君にすべてを捧げまつらん

この号に、これまで絶えることのなかった路郎の作品は全誌を通じて一句も見当らないことが注目される。

この終刊号のなかの「回転椅子」（編集後記）に、路郎生でつぎのように記している。

★「川柳雑誌」のために、私自身が終刊号と云う文字を書くなどとは夢にも考えていなかった。「川柳雑誌」に終刊号と云うものがあるとするれば、おそらくそれは私の死後だと思っていたからである。

★しかし、その時期が予想以上に早く到来した。しかも私自身の手で終刊号を世に送ることになった。真に感慨無量である。

★私のガンバリズムをよく知っていられる

社関係の人々並びに愛読者諸賢が、本号を手にされたならば、事の意外に驚かれるに違いない。たしかに私は頑張ることにかけては人後に落ちない方である。殊に幾度か死に直面し、妻子の衣食を削ってまでも「川柳雑誌」の刊行を続けて来たことを思えば、創刊以来満二十年後の今日しかも社運隆昌、最高峰の柳誌として、何等後顧の憂いのない時において、そうムザムザと廃刊すべきでないことぐらいいは百も承知、二百も承知ではあるが、あらゆる事情を超越して廃刊の挙に出なければならぬ場合が只一回ある。それは国家興廢の時、すべてを国家に殉じて皇恩にむくゆる時の謂である。

★本誌は今、その只一回の廃刊の時期に遭遇したのである。諸賢又欣然として諒恕されることを疑はない。

★本号は例月の倍大号とした。しかも殆んど私一人で筆陣を張った。それは横暴心からではない。後かたづけの意味からである。これまた寛恕を請う次第である。

終刊号のなかの「飛燕往来」は、全国柳人の来信の報告だが、三頁におよぶその通信による廃刊についての会合の議事録が送付されていたようだ。

「不朽洞総会議事概要『川柳雑誌』奉還

(一同無言、暫時静寂) 私もこの文字で唾(つば)をのみました。刊行を続け得られる実情にある事は部数の量で『川柳雑誌』が第一線に立っている事を示されて居ります。だのに奉還を決意されました事に、先生の並々ならぬ御心情をうかがい知ることができました。存続に対する力の限りと沸きたぎってきた熱情は身心が灼ける想いでした。それらはすべて先生が身をもって幾度か耐え、噛みしめて崇高な奉還の決意に到達せられたことを落着いて始めて知りました。お国の為先生良くお決心下さいました。唯々頭が下るのみであります。(川口市・伊古田伊太古氏より)

「柳界の変転心にいたむ時です。小生も今年から魚崎町役場へ勤務するようになりまして。一度御来遊下されば幸甚です。もめんの運命もほとんど絶望で目下推移に委す他なき状態です。こうなると人懐かしい気が起ります」(神戸・相本紋太氏より)

「噂にきけば、この度『川柳雑誌』をおやめになり川柳講演にお尽くしになる由。山口草平先生より洩れ承り、まことにその悲壮なる御決心にうたれ、紋太さんとも相談の上わかれの会合へでも御出席の上、一場の御教話を拝する事ができれば非常に結構な事と存じますが御意向は如何で御座いましょう。小生も正月五日より節酒(断酒に近い)を実行。大いに人間らしき生活をいとなみたく決心いたしました。そんなことよりも何より、一度しみじみと二人でもお話しできるならば、魚崎へでも御来駕下されるようお願い申し上げます。奥さんはじめ皆様にもよろしく。(兵庫県・住田乱耽より)

「大阪時事の社長の好意で新聞の特派員として北支蒙疆の旅をやる。費用の面倒はすべて張家口にいた岩崎柳路君が見てくれた。帰阪後も紙の割当は減少するばかり、生産的なものの出版をすれば紙はやると言ってくれるが私は文化の仕事をしているので、儲りさえすればいいというのではないから、紙がもらいたいためにその方面の刊行へ転じるということとは思ひもよらないことであるといって断固として応じない。そのため配給の紙は蚊の涙ほどこしかくれない。やむなく紙のヤミ買いをして刊行をつづけた。

男の子はみな応召したので、五女の梨里が闇紙をリヤカーで印刷屋へ運んで一カ月の遅刊もなく刊行を続けたが、国内事情がますます緊迫してきたので、遂に発行をやめたかどうかとの勧告さえもつけた。

主婦之友のような大雑誌すらみる影もない薄っぺらな貧弱な雑誌になってしまった。ガシガシ張り通してきた『川柳雑誌』も昭和十八年

十二月号限りで潔く廃刊を決意し、堂々たる「奉還号」を出して影を没した。(川柳雑誌No 362・古稀特集号・麻生路郎)

雑誌奉還号から右の古稀特集号まで、十四年の歳月が経っている。この老齢の感慨の眼が痛苦にみちた川雑の廃刊という生涯の一大試練をふりかえったとき、川雑の停刊は、雑誌発行の上で最大の資材である用紙不足が最大の壁となっていたことを物語っている。いわば川雑はその糧道を断たれたことによって廃刊に踏み切らざるを得なかったのである。

奉還号の「苦斗四十年」の血を吐くような川柳生涯の回顧の中で、路郎は「紙」不足が原因だとは一言も触れてはいない。戦時下だけにそのようなことは活字ではタブーにちがいないが、その回顧録のしめくくりには彼はこう書いている。

「最後に近衛内閣の新体制当時、大阪における柳誌の整備統合に就て徳澤をうけたが、我誌だけは唯一の有保証新聞紙法に拠る刊行であり、職業人として立っているのでアマチヤーの柳誌とは全く別箇に考慮された当局の措置を今もなお感謝していることを付記したい」

廃刊に当たっての彼のプライドと気性の一端がよくにじみ出ている。

第9回川柳塔まつり

同人総会

2003年(平成15年)第38期川柳塔社同人総会は晴天に恵まれ、10月5日午前10時から112名が出席してホテル・アウイーナ大阪で開催された。

総会は前にもつ副理事長の司会で開会、はじめに河内天笑主幹が「楽しい実りのある総会としたい」とあいさつ、同氏を議長に選出して一号議案の議事に入り、坊農柳弘常任理事から別項のとおりに事業活動報告を行った。その中で2002年度の取組みとしては、各川柳会の会員数等の実態を知るため、アンケートを実施したことが報告された。

次いで鶴田遠野常任理事が会計報告を行ったが、本社が利潤追求を目的としない同人による結社であるという性格から、従来「損益計算書」を「収支計算書」、「貸借対照表」を「財産目録書」と改めたことを説明、誌代の改定等から繰越金は増加したものの、誌友数が同人数を下回っており、長期的には厳しい状況にあることを明らかにしたのに続いて

川端一步会計監査が会計監査報告を行った。

続く二号議案では、前たもつ氏が2003年度の活動計画を提案したが、その中で同人・誌友数の現状を謙虚に受け止め、同人・誌友数の拡大に取り組みむこと、四年間実施された二賞選考規定をさらに充実・発展させるために検討すると発言した。また、新年度の事業としては、7月に川柳塔傘寿記念合同句集を発行し、10月10日に川柳塔社80周年記念「第10回川柳塔まつり」を開催することを明らかにし、鶴田遠野氏から新年度予算案を提案した後、質疑討論に移った。

今回の総会では、議案その他をめぐって穴吹尚士・出口セツ子・寺川弘一・田中正坊の各氏が発言したが、その内容は主として同人・誌友の拡大と「川柳塔」誌の普及をめぐる問題で、「書店に置いたり、図書館や雑誌社などに献本したらどうか」等が話し合われた。また、田中正坊氏からは、今年度の各賞の準賞・候補作品の中に、選考規定で対象から除外されている自選集作者が三名も入っていることを指摘したのに対して河内天笑主幹が陳謝し、善処を約した。終わりに板尾岳人

理事長が役員選出について提案、全議案を拍手で承認、新役員代表のあいさつの後、山本希久子常任理事が閉会あいさつを行った。

■事業活動報告

〔事業〕

2002年(平成14年)

10月6日 第8回川柳塔まつり(アウイーナ大阪・252名参加)

同 26日 第17回国民文化祭とつとり川柳大会(本社から43名参加)

11月9日 川柳塔碑合祀要案(25名参列)

2003年(平成15年)

6月6日 特別常任理事会

同 15日 第27回全日本川柳香川大会(マツノイパレス・本社から43名参加、

栗・薫風句碑を巡るバスツアー)

同 29日 川柳塔まつり2000号記念川柳大会(松江テルサ・150名参加)

7月1日 川柳塔ホームページ開設

同 7日 路郎忘本社句会(135名参加)

1月から担当者交代「初歩教室」三宅保州

9月から選考交代「水煙抄」板尾岳人

「茴香の花」藤田泰子

〔主な受賞〕

谷口 義 本社句会月間賞永久保持

黒川 紫香 大阪川柳人クラブから作家賞

田中 正坊 同 功労賞

小池しげお ふあうすと川柳社から紋太賞

太田とし子・坂上高栄・岸野あやめ 寝屋川市文化連盟から功労賞

〔句集刊行〕(15)

新家完司 「平成十五年」

福士慕情白句集「慈母観音」

故小林周信「古里」

森下愛論「葉すれ柳」

橘高薫風「喜寿薫風」(自選三百句)

近藤佳子「曼珠沙華」

富田蘭水「出雲市名所案内」

あかつき川柳会「赤旗川柳百人一句集」

NALCクラブ50回記念合同句集「天の川」

川柳ささ百合会合同句集「川柳ささ百合」

京都塔の会合同句集「千社札其の六吟行編」

富柳会合同句集「川柳とんだばやし」

はたる川柳同好会10周年合同句集「はたる」

そつりゆう会第二合同句集「そつりゆう」

竹原川柳会「川柳たけはら・鑑賞」

〔物故者〕(12名)

小林 一夫 平成14年10月5日没 42歳

野田素身郎 同 12月24日没 73歳

弘津 柳慶 同 12月24日没 87歳

権代 康女 同 12月26日没 67歳

岩原 喬水 平成15年1月1日没 83歳

越智 一水 同 1月7日没 75歳

石原 靖巳 同 1月26日没 73歳

高須賀金太 同 2月10日没 68歳

山門 幸夫 同 2月13日没 86歳

酒井 輝 同 5月26日没 85歳

西沖 彰雄 同 6月29日没 76歳
松本ただし 同 7月7日没 85歳

■新任役員(留任は含まず)

常任理事 石森利昭

会計監査 西村哲夫

参 与 桜井千秀

理 事 福井桂香

■新同人(35名)

國見蘭香(松原市) 軸丸勝巳(尼崎市) 正畑

半寛(広島県) 福島万年(広島県) 沖浜正宏

(島根県) 宮本三喜夫(和歌山市) 松尾和香

(和歌山市) 堂上康友(和歌山県) 安土理恵

(奈良県) 岩崎公誠(大阪府) 原賢(香川県)

伊勢八重子(香川県) 小島笑司(岸和田市)

林昭三(尼崎市) 森川あらた(鳥取県) 前坂

なお美(鳥取県) 平尾菜美(鳥取県) 水野黒

兎(豊中市) 澤裕子(鳥取県) 山本節子(鳥

取県) 永原昌鼓(鳥取県) 永浜加津子(松原

市) 清原悦子(東京都) 蔵本悦子(鳥取県)

奥田保子(鳥取県) 國米さくゑ(岡山県) 山

口光久(神戸市) 小川てるみ(高知市) 松本

知恵子(松江市) 石堂潤子(河内長野市) 多

久和敏子(出雲市) 持田多輝子(島根県) 桑

田ゆきの(大阪府) 野田栄呼(大阪府) 柿花

和夫(堺市)

〔同人総会出席者〕

(順不同112名)

橘高薫風・河内天笑・板尾岳人・長浜美籠・

山本義子・川端一步・寺川弘一・木本朱夏・

穴吹尚士・塩満敏・石堂潤子・大石あすなろ

大内朝子・軸丸勝巳・水野黒兎・宮本三喜夫

野下之男・南原正和・鶴田遠野・出口セツ子

野田栄呼・黒川紫香・福井桂香・桑田ゆきの

松尾和香・西内朋月・宮口笛生・川久保睦子

河井庸佑・山口光久・籠島恵子・山本希久子

吉岡修・北野哲男・小林妻子・波多野五楽庵

福原悦子・山本主恵・貞森南花・岩佐ダン吉

阿萬萬的・村上直樹・黒田能子・西田柳安子

板東倫子・福士慕情・稲葉冬葉・太田扶美代

安土理恵・吉村一風・田中正坊・小林由多香

櫻庭順風・石森利昭・三宅保州・中原みさ子

太田昭・江口度・土橋螢・谷口義・西出楓葉

玉置重人・吉川寿美・牛尾緑良・奥田みつ子

福本英子・米田恭昌・米澤飯子・富山ルイ子

井伊東吉・榎本舞夢・森本弘風・山岡富美子

新家完司・植田一京・小島笑司・春城武庫坊

早川健世・藤井正雄・古川奮水・長谷川春蘭

伊藤玲子・海老池洋・前たもつ・園山多賀子

松原寿子・内海幸生・河内月子・吉岡さきえ

都倉来芽・恒松町紅・桜井千秀・神原まさこ

柿花和夫・中原人・西原艶子・長谷川呂乃

岸桂子・杉澤田・森茂美・神原文・森山盛枝

浅野房子・渡辺富子・岩切康子・政岡日枝子

坪井孝一・坊農柳弘・白根ふみ・松下比ろ志

林瑞枝・林昭三

■おはなし

古川柳のおもしろさ

板尾 岳人

1時から始まった記念句会のトップバッター、お話は板尾岳人理事長。「川柳から見た素敵な俳句」(3句)「川柳」(6句)「古川柳」(8句)計17句をプリントして配り、その中から自分自身の解釈により紹介した。表題の通りユーモア句を重点的にとり上げ、句会前の緊張をやわらげた。

当日のお話のうちから、氏の原稿により古川柳の一部を紹介する。

中条はむこつたらしい蔵をたて



板尾岳人理事長

中条という名前の堕胎専門医とも、中条流という産婦人科医の総称を指す説もある。江戸日本橋で、産婦人科医吉田正琳が豪壮な邸宅に住んでいたのを指して詠まれたらしい。子を墮すむこつたらしい商売で蔵を建てたことを詠んだ句。

やわくとおもひのかかる芥川

『伊勢物語』の第六段。色男の在原業平は、姫君の藤原高子連れ出して芥川まで背負って逃げる。女の重みが肩にかかり、息が耳元をくすぐる。そのなまめいた乳房の重みが、この恋の行方の多難さを暗示している。上品な色気のある句。

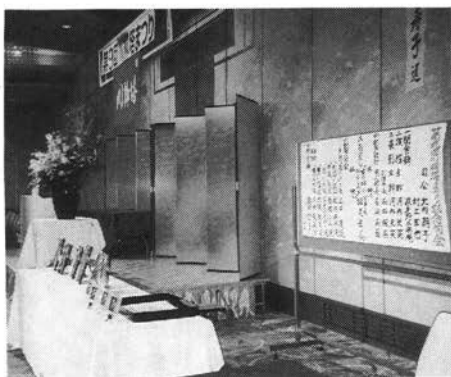
役人の骨つばいのは猪牙に乘坐

猪牙舟(ちよきぶね)とは、細長く屋根がない先のがつた舟。漁業・舟遊び、または隅田川を上下した吉原通いの遊び船に用いられた。

硬骨の役人をその舟に乗せて、吉原へ人目につかないように送り込んで軟化させるといふ、今も昔も変らぬ役人の汚職である。

婿士手でこれまでなりやさらばとて

士手とは吉原の手前にある士手である。婿



開会を待つ会場

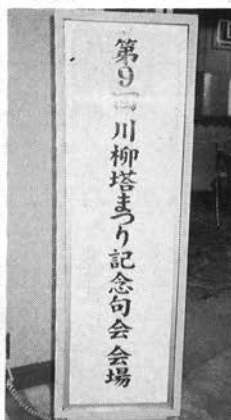
養子だから嫁や養父母に頭が上がらない。せっかくなので友達と吉原のすぐ近くまで来たけれど、士手で友達に「ここで失礼します」と言つてすこすこ帰って行くという句。

文の先禿そろそろ巻いて居る

花魁(おいらん)遊女が巻紙でせっせと馴染客に出す無心の手紙を書いている。禿は上級の遊女に使われる十歳前後の見習いの少女である。禿が書き上げた手紙の端から、もしや破れてはと気を遣いながら巻いている様子を詠んでいる。



←受賞のみなさん



↑ 同人総会

←新同人の紹介（一部）



← 政良氏の音頭で乾杯

→ 懇親宴のひとコマ



各賞表彰・記念句会

金木犀が香る秋晴れの川柳塔まつりに、遠くは北海道、青森県、熊本県、鳥根県、鳥取県等から、また他柳社の方々の参加もあつて二百五十八名の盛会となり、広い会場は一杯となった。

午後一時波多野五楽庵副主幹の開会の辞によつて表彰式・記念句会は始められた。

司会は大内朝子、後半を村上玄也が担当した。

河内天笑主幹の挨拶に続いて、北海道北見川柳社主幹辻晚穂氏の長文の祝電が披露された。要旨は、「かつての『川柳雑誌』以来の一ファンとして大会に期待している。選者の大橋政良氏には北海道柳人代表としての活躍と、川柳塔の益々の発展を祈る」というものであった。

各賞表彰式は、各地柳壇賞・一路賞・茴香の花賞・愛染帖賞に続いて、川柳塔賞と同準賞・路郎賞と同準賞の十名に賞状と楯が授与され、所属句会からは、花束が贈呈された。賞状は、茴香の花賞と、愛染帖賞については、選者の政岡日枝子・波多野五楽庵氏から授与された。

長浜美麓同人部長から新同人35名の紹介があり、出席者に記念品が手渡された。

お話は板尾岳人理事長(要旨を82頁に掲載)が担当し、記念句会は二時半から始まり、奥田みつ子副主幹が閉会の辞を述べて、予定時刻に終了となった。

月間賞は和歌山市の柏原優子さんに輝く。

(記名)朱夏・真理子・月子・朋月

(清記)義

兼題「揺れる」

江口

度選

泣かれたら男(こ)ろがまた揺れる
寄りかかる大樹も老いて揺れている
吊り革と同じ呼吸で揺れている
こぼれ萩あんなにも揺れているんだね
札束にすぐ揺らぎだす正義感
震度六をこえよそこらの揺れじゃない
揺れながら絆結んでゆくいのち
愛されて激しく揺れるイヤリング
戦争のはざままで揺れるテロと核
少子化に揺れる年金気にかかり
札束を積み重ねる気になつてくる
合鍵を返され心揺れている
札束を見ると決心ゆらぐかも
恋人がふたりいるからよく揺れる
余韻まだ大樹の胸で揺れ続け
ボジョレ・ヌーボーあなたと揺れてみたい夜
求め合うハートが揺れる象の鼻
無党派の揺れる心が掴めない
神様が小さくしゃみ大地震

美代子 睦子 喜代子 月子 玄也 倫子 和代 亜美 房子 五月 咲二 遠野 美龍 朝子 寿子 朱夏 柳弘 東吉 男

町角で昔の恋が揺れている
揺れている証腕組みしたまんま
虚と実のはざままで揺れる影法師
妻へ母へ揺れる気弱な影法師
かげろうのむこうで揺れている女
まわりは女性揺れる電車が恐ろしい
少年の揺れる心を見つめたい
告白をしたくて揺れる吾亦紅
あれ以来わたしは地震アレルギー
曼珠沙華揺れるところから亡母の道
決心へまだ揺れ止まぬ風見鶏
甘い言葉へ揺れる心を捻じふせる
一枚のカルテが揺れる聴診器
震度七あれで度胸がつかました
この辺でぐらりと揺れる心電図
コスモスが揺れて休耕田がなごむ
プランコが揺れて優しい恋になる
札束に良心まで揺れ動く
ゆりかごに還つたような車椅子
プランコで老いた二人が揺れている
花の絵にふたりが揺れるおだやかに
会うたびの揺れは別れを近くする
弱虫がのぼると揺れる縄梯子
一度だけぐらつと揺れた人がいる
揺れるだけゆれてプランコ雲にのる
消しゴムに揺れる心を見抜かれる
腹の底から揺れると笑い声になる
ガラス戸が揺れるおばあちゃんのクシヤミ

邦昭 大輪 富美子 希久子 螢 満津子 加津子 理恵 寿美 ふみ 鐘造 一風 雅文 保子 扶美代 まさと アキ 光久 時雄 淳司 孝一 弥生 諷児 義 慕情 美明 信子 登美代

裏庭で揺れるエリートのブランコ
母の一喝揺れる心に留め刺す

公子 千秀

診断に吸うか止めるか揺れている
紅一点迎え仲間の輪がゆれる

朋月 修

コスモスが揺れて迷路に迷い込む

克己

裏切りの風にゆれてる曼珠沙華
リストラの風に揺れてる夫婦仲

隆盛 (生)ますみ

消えまいと必死になっている炎
座標軸揺れて自分を見失う

舞 てるみ

み仏が降りてくるまで樹をゆする

武庫坊

失恋の顔が揺れてる澄まし汁

きらり

山を売る話に揺れる仏間の灯

正雄

思春期の振り子時々振りさける

高瀬霜石

耳底で青春の唄揺れ続け

兼題「癒やす」

松原 寿子選

かさぶたの下で癒しに耐えている

政良

わたくしを癒やす秘密の場所がある

恵子

合掌をすれば波立つ胸も風く
極刑にさえも癒されぬ遺族

艶子 玄也

ストレスを面面相が笑っている
独りのドア開けてアイボに癒される

アヤ子 セツ子

爽やかな癒しで聞かす宗次郎

雅文

今泣いたカラスが笑うママの胸
バラ百本もろても癒えぬ傷がある

寿美 シマ子

僕の名を忘れた母に癒される
あつちこちもんでらつてすつとした

和夫 月子

和顔愛語で癒やしてくれた水鶏庵
黒いオルフェに赤い薔薇から癒やされる

保州 元紀

示談書で心の傷が癒えますか
古里も癒やしにならぬ代替り

あやめ 洋介

香焚いて秋を癒やしている歌人
ハブティー胸の痾がとけてゆく

柳弘 五楽庵

ストレスを癒やしてくれる森の風
お帰りの声が疲れを忘れさす

慕情 美龍

十八年ぶりにトラキチ癒やされる
癒やされた心へ女傘濡れる

天笑 岳人

癒えるならいつも笑顔でいてあげる
癒やし系の男でお茶に誘われる

優子 富子

むらさきの風こちよい秋日傘
土踏むと足の裏から癒やされる

美代子 夢草

奥深き地に棲みながら癒えている
オムライスふんわり上がり癒やされる

諷人 良子

川柳に心癒やしたひとり旅
ゆきひらの粥ふうふうと癒やされる

和香 あすなろ

嘘をつく権利あなたを癒やすなら
残業の帰りキンモクセイの風

求芽 典呼

エッセンス胸に癒やしの森を出る
癒やされぬ私の胸に彼が棲む

碧 茂美

百歳の笑顔にこころ癒やされる
癒やされて粟のはじける音を聞く

一京 きみえ

ロッキングチェア好きなシャンソン聞いている
にんげんにようやく戻るお茶を飲む

典子 霜石

癒やしの月は落ちそうで割れそう
時どきは聞えぬ耳にする癒やし

(早)和子 弥生

ミレーの絵癒やしの詩が聞こえそう
病院で癒やす点滴受けている

義子 笛生

ふるさとの五右衛門風呂に癒やされる
癒やすのは作句の時間と決めてある

たもつ 富弘

鶴千羽折って私が癒やされる
美しい詩を耳にした日の癒やし

久子 緑良

癒えるまで庇ってくれた白い布
たましいは風望郷のわらべ唄

(伊)玲子 民

花一本あれば女は癒やされる
モーツアルト聞くどこまでも澄んだ空

千里 茜

傷だらけの地球を癒す術がない
本心は癒やして欲しい反抗期

みつ子 鐘造

寅さんと御前様にも会いたいな
癒されたらしい骨まで抜かれてる

大輪 淳司

雨には雨に風には風の子守唄
追伸の癒える言葉ありがとう

森子 ダン吉

優しい瞳で見詰めてくれるだけいい
お帰りに着替え待つ手に癒やされる

咲二 奮水

森へ来て恋の狩人癒やされる

朱夏

癒やされる趣味あり鉛筆を削る

希久子

あたたい蒲団癒しの達人だ

完司

天

地上の星とたまにゆつくりしてみよう 森中恵美子

軸

文束がいつも涙のマリ癒やす

兼題「午後」

白根 ふみ選

朝刊を読むのはいつも午後三時

歳子

夕焼けを背負って帰る野良仕事

てるみ

午後は昼寝がよいと医者はいく言う

武庫坊

百の愚痴いまは私も午後の貌

諷人

午後のお茶少し自分を甘やかす

良子

午後からの出かけ予約受診です

潤子

ハーフティー午後は独占しています

理恵

アフタヌーンティーの講釈聞かされる

幸生

午後のお茶しみじみ妻の存在感

シマ子

ケータイで妻午後からのスケジュール

陸朗

午後からのページは余白のまま暮れる

森子

午後二時のビールの味をこ存じか

和夫

転ぶのが速い宇宙は秋の午後

螢

逢いにゆく午後の日差しが眩しすぎ

小雪

ひつじ雲淡いまごろみくれた午後

久子

待たせてはかき午後のお茶が憎らしい

扶美代

午後からはす電にしてカルチャーに

菜月

わたくしは月もばんやりしてる午後

玲子

暮れ早い午後だ急いで辞書を繰る

蛙城

もう一人の自分と遊ぶ雨の午後

昭子

午前も午後もナースに会える白い部屋

春子

秋冷についぞしそびれてる午睡

公子

午後三時手持無沙汰な魔女がいた
ライオンもわたしも眠い昼下がりに
すねの傷教えてくれた午後の雨

朝が午後午後が明日になるゆるみ
稲刈りの予定狂わす午後の雨

立ち入った話になった午後のお茶

午後には晴れ当然傘は置き忘れ

集金は午後に来てねと縁かつぐ

ライオンの欠伸と出合う午後三時

人生の午後は浮輪が手放せぬ

昼下がりの主婦いきいきとボランティア

人生の午後はがんばらなくてよい

天高く一人の午後に吞まれそう

午後からが男になれる縄のれん

西日さす角度で秋が語りかけ

出処進退午後の会議で決まるはず

主流から抜けて午後からマイウェイ

うとうとと菩薩のような母の午後

フリータイムの午後は命を輝かす

二日酔い午後も変らぬ妻の顔

昼ごはんすませてだんなから逃げる

妻の声聞こえず午後の独り酒

午後六時どこへ行くのかひげを剃る

打ち水を枯らさずに待つ昼下り

午後からは当てにはならぬ古時計

午後三時テレビが妻を虜にし

戦士からオヤジに変わる午後七時

木漏れ日の滴が美味い昼下がりに

萬的

章子

冬虹

求芽

悦子

あすなろ

つづや

康子

玄也

楓楽

みつ子

天笑

茜

岳人

千恵子

克己

正子

美明

希久子

邦昭

月子

之男

利昭

隆盛

たもつ

光久

霜石

直樹

死んだふりしている午後の影法師
赴任地の主人にすまぬ昼の酒

三代笑い絶えぬ午後のお茶

三時間家出のつもりいい午後だ

百姓に午前も午後もないくらし

午後からの二三時間は主婦ばなれ

約束は午後二時今は午前二時

午後からの亭主居場所が分らない

はばなくように午後には知恵が湧いてくる

午後ならば空いていますと誘いかけ

モノの運うつろな午後になつてゆく

兼題「絵」

高田美代子選

絵に描いたように真つ赤なバラが咲き

定年の画布は保護色ばかり選る

お絵かきがついても好きな反抗期

山下清の空にはいつも大花火

一枚の絵から話が歩きだす

等身大の肖像画にも秋の彩

山水画かすかに水の音がする

ピカソ画に天地無用と書いてある

神様の絵筆がオーロラと虹と

公園のベンチ絵になる女がいる

正雄

冬葉

昭子

いわゑ

希久子

朱夏

典呼

瑞枝

欣子

妻男

哲男

満津子

愛論

日枝子

本田智彦

螢

正雄

冬葉

昭子

いわゑ

希久子

かりん

昭子

祥昭

笛生

明日の絵のまん中に描く赤いバラ
キャンパスに咲かせる亡母のやま椿
表情が絵になるポスト消えてゆく
青春の夢は下絵のままで古希
指定席の隣にだまし絵があつた
絵に描いたような話に乗ってみる
絵はがきの街にいろいろな青い鳥
金貨が貼つてあるのでうまい絵だ
海の絵の裏もやっぱり海だろう
欲張りな絵馬だ二枚も掛けてある
絵の中の猫になりたい膝の上
少年が描いた此の世の地獄絵図
猫だねと虎のつもりで描いたのに
その場の絵描いて男は生き残る
絵の中の家族がひとりずつ欠ける
平山郁夫のラクダの列にある平和
レブリカの絵正面にあるボクの部屋
ワインはほろほろもピカソも酔っている
絵の中の美人はだあれわたくし
チューブから出たてしかたない絵の具
二割ほど美人に描こう妻の顔
絵の中に時々逃げることにする
生き下手でなかなか面白い絵が描けぬ
赤ちゃんが真ん中にある家族の絵
風の絵はやさしく花を眠らせる
赦せない森が私の自画像に
なすひとつ今日の私を描いている
似顔絵が三代顔を出す暖簾

楓 柴
千枝子
章 久
清 山
度
町 紅
あき子
たもつ
五楽庵
慕 情
一 步
鐘 造
由 一
いつみ
ひさ乃
みつこ
義 子
朱 夏
きみえ
赤ますみ
天 笑
月 子
喜代子
アヤ子
千 里
元 紀
森 子

母の絵がかげぬ哀しい子がひとり
ひとりの絵いなしひつじの雲といふ
ひとりでも遊べる爪に絵を描いて
妻の画く老後の絵から消えた僕
淡彩の老いに紅足す夕茜
未元の絵追うて百歳まで生きる
天井の雲竜吠える堂に座す
絵空事並べて消費税上げる
真実を描けば醜い顔になる
秋の絵に仕舞い忘れた夏帽子
モナリザの前で女の嫉妬心
楊貴妃を描く松園の筆の牙え
戦争も地震も絵空事でない
傘寿もうやつと自分の絵が描ける

メ 女
恵美子
扶美代
正 美
たず子
和 子
隆
ダン吉
艶 子
諷云児
悦 子
雅 文
保 州
柳宏子

佳
ピカソ展帰りの夕日美しい
夕焼けを溶かすわたしの絵の具皿
絵日記にパパが欲しいと描いてある
絵手紙の松茸に鼻寄せてみる
わがままな絵です逆さまに掛ける

みつ子
霜 石
典 呼
淳 司
信 子
孝 一
諷 人
天
辻縷のピツタリと合う絵曼荼羅
絵の裏に炎を浴びた跡がある
夕焼けの絵から聞こえるハーモニカ

政岡日枝子
軸

兼題「豊」

大橋 政良選

見せ掛けは豊かな国の失業者
豊かさに汗の尊さ忘れてる
豊かさの中でローンに追われてる
表現がとて豊かで騙される
画用紙に大きく描いたさつまいも
稲たわわ雀も肥満になつてゐる
豊漁の安いサンマを食べている
豊かさの裏の地球は飢えてゐる
豊かさの裏に奈落の淵がある
母恩ぶいつも豊かなシルエット
豊かさがローン地獄に潰される
にんげんに戻り豊かな貌になり
ルノアールの裸婦に豊かな海を見る
天高く豊かに皿を満たしてゐる
母さんの胸に豊かな知恵がある
百歳の母の豊かな笑い皺
感性の豊かな女すばり言う
飛び込んだ海が豊かな話する
心豊かな位も名誉もいりません
愛は救う人の情けは生きていた
たつぷりの湯舟で歌うドラエモン
眠りたい母の豊かな胸の中
豊かな妻の作つたお弁当
愛燦燦が少し重荷になつてくる
上げ底で豊かな胸になり済ます
豊満な姿で浮かぶ夏の雲

喜代子
東 吉
正 剛
玄 也
舞
みさ子
朋 月
愛 論
妻 子
あずき
光 久
美代子
理 恵
能 子
みつこ
緑 良
和 子
伊 玲
悦 子
アヤ子
かすみ
倫 子
紫 香
葉
かおり
浜 丘

豊かさへ人も詩囊も満れてくる
 老いらくも豊かな胸へ目が移る
 面影は母か豊かな野の仏
 豊穡の海に溺れていませんか
 こんこんと湧き出る山の湯と語る
 豊かさには溺れて我慢など忘れ
 豊かさの中でひたすら戯画を描く
 懐が豊か欲しい物ありません
 豊かさには紙一重なる悪がある
 豊かさの中で失う人間味
 焼きだての秋刀魚ゆたかな顔にする
 米離れ豊かな国に住んでいる
 豊かさはあてない捨て食べ残し
 豊かさはキャットフードがおいしそう
 お金はないが豊かな演技なら出来る
 自画像の乳房はちよつと大きめに
 福沢諭吉だけしか知らぬ財布です
 豊かだは一円玉を拾わない
 ふくよかな胸で五人の子を育て
 豊満な妻です僕のルノアール
 友はみな心豊かで金はない
 ファミリーで街へ笑にくるカラス
 自家用車二台テレビは五台ある
 ジーンズの穴もおしゃれの豊かさだ
 豊作だった盗まれていなくなった
 豊かさの中で猫の子また産まれ

佳

富子 叮紅 黒兎 保州 慕情 みつ子 楓楽 伽羅 義子 賢子 保子 扶美代 典子 いつふみ 寿子 大輪 弘一 優子 克己 千枝子 幸生 ばつは 完司 和夫 典呼 玉恵 たもつ

お月様心豊かになりました
 豊作で困り不作でまた悩み
 豊作だ山の向うも豊作だ
 豊かさって何コンビニの二十四時
 人
 一つ覚えて二つ忘れて豊かなり
 地
 豊乳という神からの贈りもの
 天
 飽食の皿に心が盛つてない
 軸
 天寿全う豊かに熟れる母の海
 兼題「当たる」 河内 天笑選
 十一桁へ当たりくじでも付けてんか
 宝くじ当たる準備は出来てます
 当たら飲む約束が出来ている
 当たら宇宙旅行の切符買う
 どなたにも内緒にしとこ当りくじ
 良い妻に当たると運が寄ってくる
 日替りのヒーロー今日も大当り
 天才もたまには壁にぶち当たる
 男なら当って砕け散るもよし
 結論を急げは壁に突き当たる
 虫消えた田舎にスポットが当たる
 許された散歩日当りまぶしすぎ

アキ 寿海 きみえ 朱夏 螢 咲二 川島諷云児 登美代 弘一 扶美代 桂香 鐘造 尚士 洋介 求芽 螢 柳弘 章子 はじめ

毒消しのつもり毎日陽に当たる
 食あたり出した店には入らない
 生きてれば何と当たる阿弥陀籤
 逃げるより当たっていけば道ひらく
 八つ当たりしたい余生のゼロ金利
 占いがびたり当たるとつまらない
 花にまで当たる女房の低気圧
 デッドボールでつぎが変わった優勝旗
 両隣当たり障りのない話題
 長生きのために粗食は当たりまえ
 山勘が当たってからの怠けぐせ
 雨男良く当たるので誘わない
 八つ当たりした手をドアに挟まれる
 当たることあるから見てる予報です
 検査値に思い当たるは盗み酒
 定年で早速当たる自治会長
 心当りあるから口にチャックする
 妻が子に当たると猫が逃げてゆく
 思い当たることもないのに愛消える
 低金利で老後の生活当て外れ
 突き当たる度に少年脱皮する
 フェロモンに当たったらしい金縛り
 予報士は当たると声に張りが出る
 声だけで吉永小百合なら当てる
 体当たりドーンとされて目が覚める
 当たり前みたいに夫食べる人
 日枝子 玲子 真理子 深雪 沢和子 あすなろ 和夫 けしお 篤子 邦昭 まさこ 清史 あき子 正和 正美 重人 修 舞夢 比呂志 楓楽 則彦 志代 潤子

神様の死角で当たる流れ弾

雑兵へ一番先に当たる弾

当たり前みたいな顔で躊躇る

神様のふところにある当りくじ

子の非行阻止する母の体当り

当たり前が出来なくなつて老い進む

嫌がらせ心当りが一つある

憧れた都会で鬼に突き当たる

人生のヒット優しい子が育ち

陽が当たることを念じて止まぬ母

よく当たる母の予感ほ愛たろう

母の言うことは何でもよく当たる

好い人に当たり幸せ感謝する

陽の当たるところにいると陰見え

佳

触つてはならないものに手が当たる

飼主に当たり外れのあるベツト

自信ない顔しているときと当てられる

本当に当たれば怖い宝くじ

太陽に当たったトマト笑顔よし

人

呆けチェック殆ど思い当たる事

地

体当たりされてハートを盗まれた

天

食あたりしたかのような恋終わる

軸

誰も居ぬ日に当ててみる紙おしめ

懇親宴

懇親宴は定刻の五時、葛城の間で二一六名の参加を得て賑やかに開催された。

司会は、鶴田遠野・籠島恵子が担当する。

開会の挨拶は、小林由多香相談役。力強い声に会場の雰囲気は沸いてくる。

乾杯の音頭は、北海道の大橋政良氏。本日は選者として遠路を来阪、お疲れの様子もなく一同唱和して乾杯。

乾杯後、皆々は堰をきったように再会、初対面を問わず歓談。ご馳走は「幕の内」下戸にも上戸にもよく評判は上々。

トップを切つて丹後屋肇さんの詩吟「逸題」薩摩隼人の心意気を朗々と披露。続いて毎年好評の河内月子さんのフラダンスに一段と会場が盛り上がる。

恒例のカラオケに移り、「湯島の白梅」から始まりお歴々が熱唱を披露。今年はタイガース優勝に因み「六甲おろし」の初登場。最後は鳥取の皆さんのリードで「貝殻節」の大合唱で締めくくる。

閉会の辞は、鳥取の新家完司さん。引き続き万歳三唱。身体が健康で、心が豊か、且つふところも少し豊かにして作句し、句会に出席するように心掛けましようとしあわせてお開きとする。

皆々さまのますますのご健勝を祈る。



ロビーのコーヒーコーナー

〔御芳志御礼〕（敬称略・順不同）

仁部四郎・西出楓葉・松原寿子・前たもつ・坊農柳弘・山本義子・長浜美龍・山本希久子

木本朱夏・鶴田遠野・福士慕情・高田美代子

土橋螢・大橋政良・小川てるみ・奥田みつ子

池内かおり・中原諷人・みさ子・本間満津子

森中恵美子・福井桂香・桜井千秀・都倉求芽

本田夢彦・森井青居・小糸昭子・安藤寿美子

天根夢草・白根ふみ・高瀬霜石・西尾美与子

山本蛙城・村上ミツ子・波多野五葉庵

寺井弘子・吉岡さみえ・森山盛桜

川柳塔まつえ吟社・堺川柳会・京都塔の会・

川柳塔鹿野みか月・川柳塔さやらはく

川柳塔おとり・美研アート

〔祝電御礼〕

辻晚徳北見川柳社主幹

第九回

川柳塔まつりに

参加して

(順不同)

ポイント寸感

天 根 夢 草

(川柳展望社代表)

①案内係

大会では駅頭、街角で旗を持って案内される人が多い。老齢の方が立っておられると気の毒になることがある。川柳塔さんでは、それが一切なかった。すっきりしていて、これもまたいいなあ、と思った。

②表彰式

川柳塔賞、路郎賞ほかたくさんの方が受賞された。それぞれの方に花束も贈られて華やかになった。式するとき、名前を呼ばれて大きな声で返事をしたのは高瀬霜石さんだった。ほかの方も返事をされたかも知れないが最後列に坐っていた私には聞こえなかった。銀行でも郵便局でも名前を呼ばれたらキチンと返事をしたほうがよいと私は思っている。

③お話

板尾岳人さんのお話は「古川柳のおもしろさ」。レジュメの俳句と現代川柳には作者名の記載がほしい、と隣の席の山本蛙城さんも言っておられた。現代川柳の中に送りがないあきらかな送りすぎがあったのだが訂正はなかった。紹介された古川柳の中で「中条はむごたらしい蔵を建て」があったが、この句の六音は正しいのだろうかという疑問をもった。できればご教示願いたいところである。話の結びは「ユーモア川柳のすすめ」ということであつたが私には「滑稽川柳のすすめ」というように聞こえた。

④呼名係

本本朱夏さんと河内月子さんの復唱の声を凛としていて、さわやかなものであつた。

⑤懇親宴

五千円で二時間半、充分たのしませていただいた。盆踊りが趣味の私は大内朝子さんのリードされる「河内音頭」について踊った。

初参加の川柳塔まつり

安 土 理 恵

新同人として初めて川柳塔まつりに参加させていただきました。

天笑主幹の軽妙なお話を随所にはさんで、

キビキビと進められた同人総会で印象に残ったのは、主幹の誌友と同人に関する事でした。誌友として勧誘しても半年間の柳誌購読のみに終わってしまう例が大半であることから、投句を勧める等フォローが大切と説かれました。流動的な誌友に少しでも長く留って貰えるように同人としての努力を惜しまず川柳塔の発展につなげたいと結ばれました。

午後からは記念句会、お話は板尾岳人氏の「古川柳のおもしろさ」、本当に面白かった。「エーちよつと日なんで、なんですが」を何度かおっしゃりながらプリント一枚十八句を解説なさいました。途中引用された中から耳に残った句です。

紅一点美人であろうとなかろうと
女房を大切にする見苦しさ

命までかけた女でこれかいな

披露が始まってからは体がコチコチ。ドキドキ、ワクワク、ガツクリをくり返し六題の披露が終った時の虚脱感。これも捨て難いもので次の佳句へのステップになると思っています。懇親宴にも勇気を出して参加、憧れの方々とグラスを合わせました。これからますます、ありがとうございました。これから楽しく十回目のまつりに参加できるように作句を怠らず、投句を忘れず、句会に欠席しない同人を目指してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

塔まつりの渦の中で

大橋 政良

塔まつりの選者にと板尾理事長から突然の手紙におどろきました。承諾の返事はしましたが、この頃少し速度が鈍って来ましたが、ちよつと不安になりました。しかし、持ち前の負けん気で、当って碎けるかと自分に言い聞かせ、大会の日を迎えました。

私と塔を結びつけて下さったのは、当時水煙抄選者の紫香先生でした。全日本松山大会で、薫風先生ほか塔の主な方々にお逢い出来ました。この時葉先生に言葉をかけて戴いたことが、うれしい思い出の一つになっています。伊丹空港に向かう飛行機の中で、こんなことをとりとめもなく考えていました。

大阪に着いてから、楓葉さんの案内で大阪城を散策しました。いい思い出をつくつて戴きました。

所変れば品かわると言いますが、入選全部を二唱する披露は初めてでしたので、うまく聞かされず少しつまりました。この日選をしました句は約五〇句、六〇句の入選はきびしいものでした。全力投球で選に披露に当りましたので、終つてからの満足感は言葉に

表せない喜びでした。(会場の反響はどうだったでしょうか?)

懇親会もまた楽しい集いでした。天笑主幹と月子さんの天衣無縫な明るさが、得意のハワイアンダンスに表われて、喝采の連続でした。(評判には聞いていましたが初めてでした)

大阪の方、全国から参加されたいろいろな方達と話が出来ました。阪神タイガースのリーグ優勝が巻き込んだ熱気と河内音頭の踊りの輪が、いやが上にも盛り上げてくれました。「来年も塔まつりで逢いましょう」の合言葉が、万歳の声と共に脳裏に渦巻く。いい太会に出逢い有難とうございました。

川柳塔まつり雑感

森 茂 美

川柳塔まつり盛會裡に幕を引くことが出来まして、まずもって御同慶の至りです。

皆様方のご努力が報われましたことを、心からお祝い申し上げます。

同人総会では前途の多難さを痛感させられました。地方に居ります私共の周囲でも、小さな句会が今年になって二カ所も潰れております。原因は会員の高齢化による会員不足と

資金力の不足です。小は小なりに、大は大なりに差はありましても悩みは共通していると思います。先ず会員を増やすことが先決でしょう。

路郎賞をはじめ各賞に表彰された皆様、ほんとおめでとうございます。ほどよいユーモア入って和やかな雰囲気、惜しみない拍手を送らせて戴きました。

ありがとうございました。

一喜一憂した披露も時間が終つてみれば、空しが残った人、今日はあの人がよく抜けた、あ的人是あまり呼名がなかったなどと、休憩時間もあれこれ話題にこと欠かなかったようです。

いよいよ午後五時。待つていました懇親宴。毎年のことながらこの時間が一番楽しい。ビールを持つて回る人、一年ぶりに会った人との限りないおしゃべり、そして玄人はだしのようないろいろな歌。あの人と意外に思ふ踊りの名手など、ほんとに楽しい時を過ぎて戴きました。

来年の第十回は八十周年の節目だそうです。今年よりもっと大きな花を咲かせたいものです。いつまでも川柳の灯を消さないように頑張つていこうと心に誓つたことでした。どうもありがとうございました。

川柳塔社バンザイ!

川柳大会参加者

総数 二七七名
順不同・敬称略

【北海道】 大橋政良

【青森】 櫻庭順風

波多野五楽庵

【東京】 岸野あやめ

【神奈川】 小野句多留

【滋賀】 久保和友

【京都】 稲葉冬葉

都倉求芽

【大阪】 浅野房子

天根夢草

井上一筒

石森利昭

岩屋美明

井丸昌紀

板尾岳人

江口 度

岡本久峰

大橋鐘造

奥 時雄

川端 一步

河内月子

川原章久

北村賢子

楠 昭子

葛輪富弘

高瀬霜石

富士慕情

丹後屋肇

高島啓子

安達はじめ

安藤寿美子

赤松ますみ

安芸田泰子

伊藤アヤ子

岩佐ダン吉

指宿千枝子

生嶋ますみ

榎本日の出

太田扶美代

太田とし子

大東ゆたか

川久保睦子

鴨谷瑠美子

吉村正剛

木村久子

熊代菜月

小島笑司

神原まさこ

小西小雪

坂上高栄

谷口 義

田頭良子

田中節子

鶴田遠野

寺井東雲

中崎深雪

中井アキ

西川更紗

板東倫子

原 苑子

樋口冬虹

福田悦子

本田智彦

町田達子

南原正和

宮西弥生

村上直樹

森下愛論

山本三郎

矢野 梓

米澤淑子

宮本かりん

森中恵美子

山岡富美子

和田つづや

【兵庫】 石原歳子

亀岡哲子

坂上淳司

久保田元紀

志田千代

杉澤 汀

高杉千歩

田中正坊

立蔵信子

玉置重人

田岡九好

津守柳伸

辻 葉

寺川弘一

中澤伽羅

寺井弘子

中島寿海

永井玲子

中平亜美

西出楓楽

柴本ばつは

野田栄呼

山下更紗

伴 洋子

針生和代

早崎和子

早川棲世

津守なぎさ

出口セツ子

富山ルイ子

藤井正雄

藤村メ女

德山みつこ

黒田能子

軸丸勝巳

田辺麗太

坪井孝一

西内朋月

萩原典呼

古川奮水

山口光久

山田耕治

春城武庫坊

牧瀬富喜子

松下比ろ志

山本義子

【奈良】 安土理恵

乾 春雄

大内朝子

鍛原千里

杉野睦朗

渡辺富子

宮口笛生

米田恭昌

【和歌山】 生尾緑良

榎原公子

柏原優子

川上大輪

楠見章子

桜井千秀

武本 碧

野村太茂津

古久保和子

宮本三喜夫

奥田みつ子

門谷たず子

嵯峨根保子

山口いわゑ

居谷真理子

黒川正之進

飛永ふりこ

上地登美代

田村あき子

木本夏

福井桂香

松原寿子

宮本三喜夫

小林由多香

中原みさ子

政岡日枝子

小白金房子

園山多賀子

岸 桂子

恒松素子

吉岡さみえ

森 茂美

井上富子

小林妻子

貞森南花

大石あすなろ

池内まおり

小川てるみ

【佐賀】 宗 水笑

仁部四郎

岩切恵子

愛染帖

波多野五楽庵選

虫の音が聞こえる僕も元気です
線香花火 少し昭和を引きずって
背広からぼろりこぼれるどっこいしょ
何歳のあなたに戻りたいですか
テープカット寄ってたかつて切り捨てる
空振りの続くバットを捨て切れず
ブライドが邪魔で風下には立てぬ
見透かせぬように輝くラムネ瓶
雨足が白く激しく哀を打つ
時が解決するはずが無い愛と憎
ちよつと一服 回りに誰も居なくなる
覚悟してバラは剪るべし奪うべし
死は不意にバラ一輪に宿るなり

弘前市 高瀬 霜石
海南市 三宅 保州
弘前市 高橋 岳水
東京都 やまぐち珠美
和歌山市 桜井 千秀
和歌山市 木本 朱夏

真ん中で右往左往をしています
裸一貫わが身の軽さわかまえる
残暑御見舞い 金魚三匹のフリル
ひと夏の恋は語らずかき氷
あすは逢う約束のあり浅眠り
結び目のところどころに花ざんげ
大詰にきて花道が消えている
遠さがる尾灯も正気だったのか
毒舌を売り物にしてまだ死なず
矢が尽きた事は秘密にして置こう
脱け殻が疲れて揺れる終電車
五時から毎日行方不明です
私を重ねておこう曇み皺
弟の言い訳を聞く 淋しい
鳴き砂に夏のしおりを置いたまま
この指に集まれ路地に子がいない
葡萄ほど家族がいたらなあ 孤独
日の丸の白地は余白なのです

大阪市 前 たもつ
富田林市 池 森子
和歌山市 福井 桂香
和歌山市 西山 幸
東かがわ市 木村あきら
箕面市 出口セツ子
寝屋川市 籠島 恵子
茨木市 白根 ふみ
島取市 藤井 正雄
大坪 天涯
横原市 安土 理恵

葉はさんだところから涙止まらない
卵より先に生まれてきた男
花の芯哀しい涙見せませぬ
究極の鎖骨を誇るモデル像
生きている範囲で死んだ振りをする
過労死の仔細は闇へ閉じ込める
サルビアの燃える想いをまた織れぬ
花萎む前に情けの花鉢
雑字をしつかり食べて生きている
心乱し季節外れの花となる
夾竹桃黙って責めを受けている
猛残暑さつき見たものまた探す
似通った悩み他人と思えない
気が付けば遠くで活字読んでいた
順ぐりにやって来そうな幸不幸

大阪市 神夏磯典子
鳥取県 土橋 螢
弘前市 斉藤 劔
黒石市 相馬 一花
砂川市 大橋 政良
弘前市 福士 慕情
弘前市 岡本 花匠
高槻市 乙倉 武史
大阪市 三浦千津子
池田市 栗田 久子
交野市 田岡 九好
尼崎市 春城武庫坊
大阪府 澤田 和重
東京都 清原 悦子
鳥取県 西原 艶子

勝算があつてゆつくり水を呑む
吹田市 山本希久子

息整え三楽章も半ばなり
尼崎市 長浜 美籠

人間が見えなくなつた眼鏡拭く
倉吉市 牧野 芳光

風ざわわ森の卵を抱きしめる
鳥取市 徳田ひろこ

レクイエム王様だつた頃がある
藤井寺市 太田扶美代

不稔田を見まわる老いに影が無い
青森県 西谷 大吾

納得がゆかぬ下絵で出すねぶた
弘前市 櫻庭 順風

冷夏来て山もこ機嫌斜めなり
弘前市 中山 雅城

勝ち負けを溶かしてしまふ港の灯
富田林市 片岡智恵子

法師蟬 君もやっぱり不安症
和歌山県 辻内 次根

未知数の余生に小さい夢を抱く
鳥取市 福田 登美

窮極の車と思う霊柩車
吹田市 岩屋 美明

頼り切る杖を愚妻というて
唐津市 井上 勝規

私に負けたらあかん鬼の面
倉吉市 山中 康子

現し世の情け貰つて生きている
和歌山市 吉村さち子

究極の選択でしたギブアップ
東京都 播本 充子

病人だけに聞こえる点滴の音
京都市 都倉 求芽

建前で飾る人生泣き笑い
弘前市 一戸 ツネ

返し歌 途絶え仏間のひとり言
泉佐野市 稲葉 洋

蜜蜂のきこえな甘い村芝居
米子市 林 瑞枝

茶柱を味方に付けて戸を叩く
弘前市 宮崎ヒサ子

階段から別居の風が吹いてくる
八尾市 宮崎シマ子

粉飾の過去がちくちくする余生
四条畷市 吉岡 修

祝杯の泡に溢れる思がある
出雲市 園山多賀子

骨のある男妥協の尾は振らず
今治市 塩路よしみ

懐の寒さを風が吹き抜ける
倉吉市 松本よしえ

行間の愛の言葉も褪せてきた
愛媛県 中居 善信

失敗の破片も積んで喜寿となる
熊本県 高野 宵草

悪人はだあれもない心太
羽曳野市 吉川 寿美

村人はみんないい人藪坊主
松原市 小池しげお

貧乏に鍛え抜かれたあばら骨
羽曳野市 森下 一知

怖いから一日延ばすことがある
愛媛県 花岡 順子

とっておきの台詞こぼしへ握りしめ
和歌山市 松原 寿子

体温が近づて困る小鳥の死
和歌山市 楠見 章子

柩の中で葬送曲を聞いている
倉吉市 米田 幸子

泣き笑いひとり芝居の幕が開く
松江市 三島 淞丘

スキップをして敬老を待っている
和歌山市 上地登美代

もう少し地球ゆつくり回そうか
三田市 堀 正和

七癖の一つに泣かされる
高知市 小川てるみ

票田を吹く秋風が騒がしい
和歌山県 中後 清史

真つすぐな人しか知らぬ赤い羽根
西宮市 片山 忠

定年をしようぬばれ捨てました
美弥市 安平次弘道

左でも右でも打てて貧乏し
宇部市 平田 実男

紙一枚そして明日からもう他人
大阪市 小泉ひさ乃

盟友の酒と別れる日の怖さ
高知県 桑名 孝雄

東大阪市 北村 賢子

鍵かけぬ路地の暮らしがあたたかい

和歌山市 青枝 鉄治

ふる里の記憶つるべの音がする

倉敷市 小野 克枝

故郷が欲しい都会の赤トンボ

和歌山市 榎原 公子

どつぷりとリアルタイムの二十四時

八尾市 高杉 千歩

油断召さるな年寄りを的にする

羽曳野市 徳山みつこ

行け行けと安全地帯からタクト

松原市 玉置 重人

名も知らぬ国のカボチャを食べている

和歌山市 古久保和子

鳴き声が人間臭い街の鳥

堺市 奥 時雄

強がりとはものはずみで言ったまで

鳥取県 岩崎みさ江

み仏のおこころならば受けましよう

八尾市 村上ミツ子

王道を歩き転んではかりいる

奈良市 乾 春雄

マニュアル通り行かぬ人生老いて行く

唐津市 宗 水笑

宝くじこっそり買っている大志

寝屋川市 坂上 高栄

くちなしの白さ背信疑わぬ

西宮市 坪井 孝一

胃袋のイエローカード固唾のむ

藤井寺市 中島 志洋

不況の根刈りとする鎌が錆びている

鳥取市 岸本 宏章

ふるさとに翼畳める森がある

香芝市 大内 朝子

こめかみのあたりちくちくする邪心

岡山市 井上柳五郎

八月は慟哭つづく思い出よ

大阪市 井丸 昌紀

建前を離れようやく議事進行

八尾市 西川 義明

乗客のほとんど降りた花の駅

大和高田市 鍛原 千里

わが恋は線香花火の玉しずく

寝屋川市 江口 度

似たような風景あつて姉妹都市

武蔵野市 亀井 円女

のんびりしとれ 遊びあいたら来いと亡夫

松江市 川本 畔

夕映えよ言葉少なにグッドバイ

横浜市 芦田 鈴美

難解な個性だ国を振り回す

河内長野市 水谷 正子

通販のカタログ噛んでいるポスト

西宮市 門谷たす子

幾彩の風をさばいて生きのびる

倉吉市 淡路ゆり子

気に入った石を拾って語り合う

堺市 和田つづや

向日葵も首をかしげて残暑なり

和歌山市 喜田 准一

うかつには本音洩らせぬ椅子もあり

鳥取県 田村きみ子

娘や孫の港で長居致しかね

倉敷市 井上 富子

溶けそうな夕日を撮つて来たカメラ

岡山県 山本 王恵

受胎告知 新調のペンすらすらと

愛媛県 黒田 茂代

しょうもない名を貰つたね破れ傘

横浜市 金森 徳三

四季が無くめつたやたらに痛む腰

和歌山市 武本 碧

道草の中で心の糧を摘む

富田林市 大橋 鐘造

ゆうゆうと罵倒暴言聞く背中

鳥取県 上田 俊路

いろいろな話を積んだ口車

鳥取県 佐伯 やえ

船頭役をつとめころばぬようにする

奈良県 渡辺 富子

ときめかない男とうどんする旅

米子市 青戸 田鶴

ナツメロが心に沁みる秋の夜

大阪市 川原 章久

数珠回す地藏盆会の蟬時雨

藤井寺市 高田美代子

六法に花盗人の罪がない

出雲市 伊藤 玲子

いとしくて抱きしめた鈴笑わない

誹風柳多留二四篇研究 60

伊吹和男・大野秀二

橋本秀信・小栗清吾

粕谷長生・山田昭夫

清 博美・佐藤 要人

461 大あばたこんどもくなし三十四

伊吹 女性の厄年の句。女の厄年は十九歳と三十三歳。普通の女性であれば、結婚、妊娠、出産、育児という人生の節目を迎えて、喜びもあれば苦勞もあるという年代である。ところが何しろ大痘瘡の女だから、そういった転換期に何もなく、結婚もなければ出産もないといった具合。何の苦もなく十九歳と三十三歳の厄年を終えて、三十四歳になったというのである。

清・佐藤 賛。

462 御夜つめか長いとすけんぐをいゝ

伊吹 吉原張見世の句。夜詰は夜番、夜勤または夜業といった意味。張見世の売れ残りの遊女に、「夜番が長くて御苦勞様で……」と、素見物が悪たれ口をたたいているところ。いやあまだ御さなされるとすけん云ひ

油へらしがまだ居ると素見いゝ、
拾七 四七 29

清・佐藤 賛

463 くらがへを追詰て行小間物屋

伊吹 鞍替は遊女などが他の店へ勤めを替えること。遊女が小間物屋へ支払うべき代金を未払いのまま、他の店へ勤め替えをしたので、踏み倒されてなるものかと、探し出して貸しを取り立てるのである。

小間物や来て床花をむしつてく
三三 27
清・佐藤 賛。

464 藪医者のかけて念仏講を取り

伊吹 念仏講は、初めは念仏を主体にした信者の会合であったが、後に掛金を積立てて、講中の死者に弔慰金を支払う頼母子講と変わった。

長生きできた者が、藪医者の見立て違いのお蔭で、早死にしまい、念仏講から弔慰金を取ることが出来たが、死んだものは帰ってこない。

若死のつくハねん仏かうばかり
天五 義 2
生きて居念仏講を取りたがり
二四 5

橋本 賛。だが、この「お蔭」はお蔭というより藪医者の誤診の結果（勝者の蔭に敗者あり）といった意味ととる。

清 「かげ」はやはりお蔭の意と思う。礎稿にいう「藪医者の見立違い」によって……。
佐藤 同。

465 むすこの耳ハ馬つらハかわつなり

伊吹 「馬の耳に念仏」（人の意見を聞き流す）と「蛙の面に水」（何をされても平気な

さま)の二つの成句を引用した句。

遊女に入れ揚げているドラ息子であろう。
親の意見は馬耳東風と聞き流し、親からどんな制裁を受けようとも嫌に釘、暖簾に腕押し。親の存在を無視して、頭の中は遊女のことで一杯なのである。

清・佐藤 賛。
かんどうハかわつに水のかけ納メ 三三三

466 ひたるいにまづい物なし破れ傘

伊吹 「ひたるい時に(の)まずい物なし」(腹の空いた時には、どんな食べ物でもおいしい)という成句を引用した句。

外出中不意に、篠を突くような激しい雨に会った時には、水臭い知人が貸してくれた(或いはそこに落ちていた)ボロボロに破れた傘であっても、有難いものだということである。

ひたるいにますいものなし持参金 五七二
清・佐藤 賛。

467 素人にや横さけのするうなぎ也

伊吹 鰻を蒲焼きにするには、京坂では背割り、江戸では腹割りであったそうであるが、いずれにしても、縦裂きである。落語「素人

鰻」を持ち出すまでもないが、ヌルヌルクネクネの鰻は全く扱いにくいもの。素人が鰻の蒲焼を作ろうとして、縦裂きに出来ず、横裂きにしてしまうのである。

横さけのするハ素人の鰻也 三九二
よこさけのするハしんまひうなぎ売

清・佐藤 賛。

明七仁四

468 とち蓋を見付て下女ハ隙をとり

伊吹 「破鍋に綴蓋」(どんな人にもその人に相応した配偶者が居るといふ例え)という成句を引用した句。下女は下女なりに、それ相応の結婚相手を見付けて、奉公先から暇をもらつて実家へ帰つた。因みに、下女が破鍋で相手の男が綴蓋としたのは、下女の通名が「なべ」や「おなべ」であるからなのだろう。

割鍋と閉ふた同じ日に下り 六二二
清・佐藤 賛。

469 御しんぞの過ぎらい実ハ是がなし

伊吹 「御新造」は武家や富貴な町家の妻女をいう語であるが、この句の場合は手元不如意の武家の妻である。「是」は金銭の意をあ

らわす、指で輪を作っているか、または着物を指差しているのであろう。あそこ御新造様が外に出るのを嫌うのは、本当に外出するのが嫌なのではなくて、実のところお金や着物がないから、というのである。

出きらいの妻ニしてある御不勝手 四九三
出嫌ひといふやつ急度はがなし 五八七

大野 賛。どちらかと言えば着物の方と思う。橋本 賛。指で輪を作る金のほうと思う。

「レコ」とも言つ。

清・佐藤 賛。

470 座禪くわんほうの地にもみちひいかに

伊吹 「坐禪観法」は「坐禪を組んで、心中に悟道を黙想すること」。(『日本国語大辞典』で正灯寺(臨済宗)や海晏寺(曹洞宗)を詠んだ句。このような座禪道場の地に、吉原や品川へのかこつけの紅葉が有つていいものか、と禪宗の僧がする問答の口調で言ったもの。

ぜんてらはい、方角の紅葉也 一七二
橋本 というより、両寺への紅葉見物の誘い(もちろん裏を含めて)の言葉を禅問答ふう

に言つたまでと思つ。

清・佐藤 同右。

尚香のむ

藤田 泰子 選

過ぎし日にいろいろあつたかき永
この冷夏楽しかったか蟬の殻
封筒に入れれば軽い軽いふみ
逢いたくて逢いたくなくて秋暮れる
階段の高さが昨日とは違う
褐色の梨の脇に抱かれたし
ジャンケンにグーで主張を溜めている
迂闊とは紙で手を切ることにらしい
発言力よりも勝っている無言
本場の事を知つて喋れない
私は私だけの顔でゆく
自分史を綴る紙綴りを繕っている
もう少し踊つていたい風の中
昇進祝いそして押し出されるんだね
自己主張しつかり持っている背筋
固すぎて胸につかえるゆで卵
甘いとは限らぬ祖母の卵焼
バンドラの箱は私も持っている
野の花のこんなに似合う野の仏

米子市	白根	ふみ
倉吉市	淡路ゆり子	
福原市	居谷真理子	
吹田市	山本希久子	
寝屋川市	籠島 恵子	
和歌山市	福井 桂香	
富田林市	池 森子	
堺市	志田 千代	
尼崎市	長浜 美龍	
東京都	播本 充子	
吹田市	大谷 篤子	
大阪市	小泉ひさ乃	
鳥取県	西原 艶子	
藤井寺市	高田美代子	
香芝市	大内 朝子	
鳥取県	西川 和子	
西宮市	緒方美津子	
和歌山市	西山 幸	
富田林市	片岡智恵子	

ピンクにも紫にも咲く立ちばなし
口以上手話の訴え原爆忌
心地よい空腹感あり生きてます
半券もカラフル夏の旅おわる
十の仏と言葉交わして寂とい
思い出の中で道草してしまふ
旅先で絵手紙 自分宛にだす
ジグザグに歩き時間と遊んでる
歳月を引っぱり出している日記
後戻りしたくないから本を読む
深追いはずるなど影に突つかれる
落丁が埋まらぬままに黄昏れる
だるそうな姿で咲いた曼珠沙華
愛犬が弾丸となり駆けてくる
ゆつくりと座れる席が空いていた
キラキラと光つてののに気付かれぬ
一善の出来た私に二重丸
エプロンの好きな女で翔べぬまま
坊っちゃんに似て根っからの正義漢
受話器のまえ離れられない胸の波
ぬるま湯の中にふやけた脳がある
世辞の河渡つてふやけきる理性
自分捜しの旅で自分に出会えない
みぞおちに咲かせたバラに水をやる
ふれ合つて私の殻がとけてくる

和歌山市	吉村さち子
寝屋川市	坂上 高栄
堺市	矢倉 五月
鳥取県	吉田孔美子
岡山県	山本 玉恵
藤井寺市	太田扶美代
岸和田市	雪本 珠子
鳥取県	土橋 睦子
藤井寺市	鴨谷瑞美子
鳥取県	岩崎みさ江
富田林市	中井 アキ
羽曳野市	吉川 寿美
和歌山市	福本 英子
三田市	久保田千代
堺市	山本 半銭
芦屋市	黒田 能子
寝屋川市	平松かすみ
西宮市	西口いわゑ
寝屋川市	堀江 光子
和歌山市	松原 寿子
倉吉市	野口 節子
東京都	やまぐち珠美
和歌山市	桜井 千秀
東大阪市	北村 賢子
大阪市	神夏磯典子

振り返るたび増えていく正誤表

セーターを洗うロマンスを洗う

喜怒哀楽 一気に吸って発車ベル

犬も猫も飼わず自分を飼うばかり

願い事呑み込み消えた流れ星

風吹いただけで乱れていくドミノ

いいことがあると書く事ない日記

瘡蓋を剥けば懐かしい痛み

借りものの衣裳が妙に板につき

あいまいな笑顔に厭と書いてあり

惜別へこぞと唯し立てる虫

子育てを語れば母の顔になる

背中押す風に逆らう歳でなし

足どりに人の心がよく読める

しがらみを断てば空しさ満ちてくる

拘わつてみるとやっぱり金がいる

熊本の曾孫 氣遣う熱帯夜

コスモスも二人の孫娘もしおらしい

住んでみたいないざこざなんてない場所

心配より興味本位で来る見舞

損しても恥じないように生きる日々

お話は半分だけの匙加減

条件反射だろう張り子の虎が揺れ

大猿の扉にも一つ覗き穴

羽曳野市 徳山みつこ

大阪市 星野きらり

大阪市 鈴木トヨ子

豊中市 安藤寿美子

今治市 野村 清美

愛媛県 花岡 順子

神戸市 山田婦美子

橿原市 安土 理恵

倉吉市 米田 幸子

堺市 西村りつえ

松江市 安食 友子

東京都 清原 悦子

柏原市 永浜加津子

鳥取市 永原 昌鼓

池田市 栗田 久子

高知市 小川てるみ

尼崎市 春城 年代

倉吉市 山中 康子

大阪市 町田 達子

大阪府 米澤 俣子

箕面市 出口セツ子

尼崎市 内田美也子

和歌山市 武本 碧

出雲市 園山多賀子

疑いの目では見えない人間味

入場料払って昼寝講演会

戦中を生きて老春謳歌する

研してやしろの太鼓森を越え

包丁のリズムに母の詩がある

渇く日は癒されるまで写経する

憎らしい男に似てる子の笑顔

すみっこの椅子で何にも知りつくし

柔らかに御飯を炊いて老い二人

紫の雫 桔梗は亡母の花

ほどほどの夢でふくらむ鱗雲

許すことばかりで人生終わるそう

動線が同じ夫婦の小競り合い

幸せの度合いを知ってるパンの耳

ふんわりと遊ぶ天国発泡酒

これからは辛さがづく秋の蝶

鳥取県 石谷美恵子

倉敷市 撰 喜子

八尾市 高杉 千歩

米子市 林 瑞枝

今治市 塩路よしみ

米子市 野坂 なみ

倉敷市 小野 克枝

米子市 澤田 千春

三田市 石原 歳子

西宮市 門合たず子

奈良県 渡辺 富子

藤井寺市 楠 昭子

和歌山市 古久保和子

大和高田市 鍛原 千里

弘前市 一戸 ツネ

米子市 中井 ゆき

ふみさんの句―莓・レモン・メロン華やかだつた過去だが溶けてしま

つたらただの水、平易な言葉で人生を表現されました。ゆり子さんの句

―やつとこの世に顔を出したのに今年の冷夏、蟬は欲求不満だった事で

しょう。自分は思い切り鳴けた人生だっただろうか、考えさせられまし

た。真理子さんの句―胸の内を文字にすると、思っている事の十分の一

も書く事ができないもどかしさを「軽い軽いふみ」とうまく表現されま

した。希久子さんの句―本当は逢いたいんだけど、その戸惑いが伝わ

つてきて、ロマンチックな秋の夕暮れを思わせます。

主婦

川久保陸子選



スーパーを回る節約主婦の知恵
玄関で主婦の仮面を探して
セールスに負けない主婦の口達者
職業欄主婦が無職かまた迷う
レトルトに主婦の手抜きを助けられ
母で妻嫁で主婦ですうちのやつ
不意の客もてなす料理主婦の技
主婦の座を譲った姑が若くなる
犬の目に家族序列の一角が主婦
主婦業にうちでの小槌欲しいもの
スーパーのポイントカード好きな主婦
無職とは絶対書かぬ主婦の意地
負けてない主婦も汗するスニーカー
主婦と書き鏡でうしろ確かめる
主婦脱皮女を踊る赤い靴
主婦の座を早期退職してひとり
スーパーが井戸端になる午後三時
昭和史に銃後の槍を持った主婦
一級的主婦ですキャリアは五十年
結局は主婦に戻っている朝餉
主婦の座へ鏡のくもる日も多い
ぬるま湯におさまる主婦の目もくもる

セツ子
善信
ツネ
理恵
典子
あやめ
東吉
勝視
あずま
一粋
水笑
宏章
一風
孝一
朝子
修
兵八郎
雅城
シマ子
保州
雄々
彩子

ロボットが主婦の仕事に口を出す
塩砂糖貼って奥様バスツアー
雑用に追われて主婦の二十五時
主婦の座を平均点で守ってる
キッチン椅子に落ちて主婦の愚痴
主婦層の話題取り込むワイドショー
家中が浮かぬ顔する主婦の風邪
そして主婦鍋を磨いて仕舞い風呂
アンケート主婦感覚で見る政治
当選の決め手となった主婦の離
良い主婦になれと育てた娘が離婚
次から次主婦甘やかす機械増え
主婦の勘拒否説明の要る真意
コンビニが主婦役をする夕餉どき
仏壇に花を欠かさぬ主婦である
佳
百均に主婦のアイデアたんとある
主婦の座を全うしたく竹を踏む
目覚ましをしゃかりかけて主婦ひるね
お隣も主婦でもてるなと思う
主婦の目に隣のゴミが気にかかり
人
玄関を見ればこの家の主婦が見え
地
丁寧に二合の米を洗う主婦
天
主婦いつも三原色を友とする
軸
試着室その時主婦を忘れてる

公誠
扶美代
寿美
英旺
たず子
遠野
哲男
正雄
岳水
充子
倫子
章子
四郎
美也子
志千代
千里
みつこ
ミツ子
半覚
鉄治
俣子
高瀬霜石
(高)美代子

本人

上田 俊路選



本人は知らぬと秘書に罪をせる
本人より別嬪さんになる鏡
本人の知らぬ寝言を詮議され
本人の努力次第で道開く
本人もその気夢みるパラダイス
飲酒運転本人だけが知っている
本人の代理がミスをかばうする
親に似た仕草本人気がつかず
本人しか知らぬ真相数の中
本人に聞けぬ話でもめている
本人も連れずに親が来る謝罪
歓迎会本人いない三次会
本人を撮ったことないカメラマン
住民票コード本人記憶せず
本人の油断がころ錆びつかせ
ビエロにも本人だけの知るなやみ
火を付けた本人が輪の外にいる
太りすぎ本人ですかとバスポート
本人がどちらでしようかお姉妹
本人を無視して影が翔んでいる
影武者が本人よりも似て困る
本人が死んで高値のつく名画

(奥)五月
はるお
喜子
フジ
雄々
春雄
幸生
武史
不二
あずき
正雄
正和
登美
一粋
彩子
さち子
セツ子
美也子
ちかし
慕情
尚士

その人に合った幸せについて来る
見合して本人だけが気に入らず
本人を忘れた祖母は子に還る
本人より子等が気にする退職金
気にして本人以外無関心
主役にはなれぬと本人知っている
本人捜しの決め手となったDNA
タテ社会すねた本人ヨコを向き
ほんものの愛だな素顔見せてくれ
本人よりその二親を見込まれる
結局は本人次第と言う妥協
本人のために医者頼む嘘
本人にだけは告げないあと三月
ご本人以外断る火葬の炉
五時からの似ても似つかぬご本人

佳

人

地

天

軸

登美代

照子

智加恵

美明

章司

たす子

(井)富子

公誠

鉄治

扶美代

千里

四郎

いさお

哲男

恭昌

宏章

昌鼓

正剣

俊子

淑子

徳三

岳水

志田千代

いろいろ

海老池 洋選



ねぶたいろいろ夜叉も菩薩も酔いしれる
一票いろいろな義理が攻めてくる
いろいろと難癖つける外野席
気が利いて何処へいっても世話係
いろいろと溜めて金目の物が無い
いろいろな出会いがあって暮れてゆく
いろいろなローンで行ける永遠の旅
いろいろとあって会わずにいても友
どれどれやらわからぬほどに飲む薬
いろいろな答に迷い四捨五入
いろいろな愚痴年輪にかなわない
Lサイズいろいろあつてはつとする
いろいろな出会い人生面白い
いろいろとあって家裁の堅い椅子
流れにそって仮面いろいろ替えてみる
世渡りにいろいろ眼鏡使い分け
いろいろな神様おわし救われる
いろいろな節目で迷い現在地
要するにいろいろあつて今ひとり
美人にもいろいろあつてまだひとり
走馬灯まわりまわって今がある
いろいろと職替え息子脱皮する
いろいろと職替え息子脱皮する

順風

鉄治

玄也

(南)正和

淑子

美明

四郎

松煙

保州

典子

美津子

(指)千枝子

ちかし

寿美

彩子

幸生

よしこ

りつえ

修

一風

愁女

十人十色いろいろな風を楽しまん
十人十色花屋のはながみな笑う
いろいろな悩みを覗く水晶玉
百花繚乱蝶も自分を見失う
無二の友いろいろ言うがにくめない
言いたくは無いがいろいろ言うてくれ
聞きもせぬ事をいろいろ言うてくれ
いろいろの保険を掛けて達者です
明日のためいろいろ種子を蒔いている
振り向けばいろいろな事のあった道
いろいろな色の重なる追想記
もう八十路涙の味もいろいろに
切口にいろいろ見える人間味
いろいろな顔つきの子よじゃがいもよ
人生いろいろみんないろいろあるんです

佳

人

地

天

軸

能子

たす子

正剣

登美代

栄子

哲男

美代子

充子

深雪

朝子

英旺

あやめ

あすき

黒兔

妻子

棲世

正雄

度

俊子

(渡)富子

セツ子

霜石

何宗かわからないけど手を合わす

いろいろあつて今では妻の家来です

前たもつ

反省の山を残して陽は西に

初歩教室

題一 顔

三宅 保州

発想、見つけの良さで佳句の基本ができ、そこに表現リズムで脚色して仕上げられます。さらに推こうすることにより手直しされて佳句が生まれます。難しいことですがこの努力を続けることが、作句の上達へのいちばん基本であり、効果的な方法でもあります。

「顔」を詠んだ名句はと問われたら、私は次の句が思い浮かびます。

子猫ぞろぞろみな宿命の顔かたち 中島生々庵
横顔の子規も八雲も荒仏 橘高 薫風
頬かむりの中に日本一の顔 岸本 水府
冷凍魚アツと叫んだままの顔 岩田 三和
美しい顔で楊貴妃ぶたを食ひ 古川柳
何が名句と言われる所以か考えて下さい。

【同想句】

「親に似た顔」を詠んだ同想句
あつちこち母とおんなじ顔になり 道子
古希になり亡母によく似た顔になる 洋子
あの頃の親父の顔に似てきたぞ 時雄

母似だと言われ嬉しい顔の線
老いを知る仕草顔まで母に似る
この笑顔亡母に貰った宝物
お多福の私の顔は親ゆずり
「親に似た顔」を詠んだ佳句三句との違いを比べてみて下さい。

【同窓会】を詠んだ同想句

クラス会面影残す顔ばかり
顔馴染み揃い賑やかクラス会
古希の顔ちゃんづけて呼ぶクラス会
同窓会あの子だらうか今日の顔
同窓会昔の顔で師を囲む

【定年後】を詠んだ同想句

顔つきが柔和になった定年後
定年後顔もだんだん丸くなる
満ち足りて素顔に戻る定年日

【甲子園】を詠んだ同想句

どの顔も輝いている甲子園
甲子園全力つくしきった顔

【添削句】

原 ブスと言うがエクボ出るのがチャーミング

綾乃

原 この顔はブスでも親のプレゼント

フジ

「ブス」という言葉は差別的な語になります。身体的な欠陥等を差別的に表現する用語は使わないように。句品も損ないます。

原 コラーゲン頼り飲んでる顔の艶 ゆきの
原 二度三度バックを重ねたオカメ顔 ゆきの
原 古希の母数取り術を知った顔 ゆきの
三句出す場合は、それぞれ発想等の違う句を出す（作る）ことを心掛けましょう。

この三句では「美顔術」の題のようですね。

添 女である限りは挑む美顔術

原 くしゃくしゃの赤ちゃんの顔よいお顔 信子

「顔」が重複。描写で終わってます。

添 赤ちゃんの笑顔に負けたなと思っ

原 顔揃えお見舞いに行き疑われ 勝久

原 顔中をくしゃくしゃにして泣き笑い 雅明

原 上席に顔を揃えて初会合 政子

三句とも何故そうなのかの句意がわかりにくい。省略しすぎていいけません。

原 男の子可愛すぎます甘い顔 郁代

表現が重複的。「すぎます」を言い換えて

添 少年の甘いマスクが気にかかる

原 顔の無い男で暮らして無位無冠 善蔵

無位無冠を否定した句にとれます。中八

添 不器用な顔を貫き無位無冠

原 湯上がりの素顔の好きな夫でした 喜子

添 湯上がりの素顔を好いてくれたひと

原 長湯して搦き立て餅の顔で出る つよし

添 搦き立ての餅の顔し出る長湯

原 朝の顔あいさつ交わす知らぬ人 タカ子

添 見知らぬ顔ともあいさつ交わす散歩道

原 顔いろいろ似た人探す羅漢さま 志津子

添 亡きひとに似た人探す羅漢さま

原 妃殿下の笑顔真似たら阿呆にみえ 芳江

添 妃殿下の笑顔真似てもおよばない

原 朝ラッシュ無表情な顔顔顔 弘之

破調すぎます。推こうを怠らないように。

添 ラッシュアワー顔顔顔の無表情

原 顔なじみ名前浮かばず目を伏せる 稔

原 荷を解けば土の匂いと母の顔 アヤ子

両句とも、残念ながら詠み古された句意です。多読で同想句を防ぎましょう。

原 玄関の顔にそよ風置いてある 栄呼

斬新な発想と表現はすばらしいのですが、初歩教室の句としては、理屈と文法が難。

原 母や妻七つの顔を持つ女です 宏子

説明過剰気味。中九。発想はすばらしい。

添 内に外に七つの顔の女です

【少し工夫すれば佳くなる句】

原 八方美人自分の顔に自信ない 裕花

添 八方美人自分の顔が見つからぬ

原 人間も怒れば鬼の顔になる 秋雲

添 怒ったら誰でも鬼の顔になる

原 帰りたい母の笑顔のふる里へ イセ

添 古里に笑顔の母が待っている

原 顔相は出世しますで古希迎え 章司

添 出世する顔と言われて古希になり

原 泣き顔を見せて女の武器とする 准一

佳句ですが、既句があるのでもう一工夫

原 満月に目鼻つけたい冴えた夜 節子

目鼻つけたいの良さが、冴えた夜で帳消し

原 吹く風に喜怒哀楽を曝け出す 永子

原 喜んでくれる顔ならどこへでも 信翁

両句とも具体的に詠むと良くなります。

原 十五夜にうさぎの顔がみてみたい みね代

添 十五夜のうさぎの顔を見てみたい

原 赤ちゃんを見る誰でも笑顔する 道子

中六が致命的。助詞一字で中七になります。

原 二十年悲しい顔のままである 真一

二十年が何かわかればすばらしい句です。

原 田植え籠昔懐かし人の顔 とき

原 双方の顔が立つよう骨を折る

原 整形をするなら顔も心根も 英旺

原 顔色で子の行状が読める親 千華

原 似顔絵が特徴つかみ逮捕劇 智加恵

原 ギャンブルの顔ひたすら駄馬走る 和友

原 接客へ鏡に向かい笑顔する 孝明

以上七句の共通点は、川柳の基本はでき

ているが佳句としてはあと一工夫ほしい。

原 何食わぬ顔して腐っている西瓜 九好

添 中八でなければ秀句。何食わぬ顔で……。

【佳句】

母親の顔で整形美女と知る 初恵

原 顔色に出ている収支決算書 弘子

神棚を拝んで朝の顔になり 像山

日傘と会釈をかわす顔見知り 好

老眼鏡かけて私の顔で来る 栄子

還暦の見慣れた顔を撫でてみる 満子

辛くなる花形スターの老いの貌 時雄

犯人と納得のいく面構え 侑子

賞味期限過ぎても味のある笑顔 はじむ

丸顔が輪の真ん中にいる和み 美弥子

すんまへん大きな顔は亡父譲り 良一

兄弟にいいとこみんなあげた顔 清

いつからか私の顔に母が住む 実千代

風雪に耐え野仏の顔になる 利子

顔隠し踊つていてもわかる妻 淳司

能面の下にも同じ顔がある 武

謡い終え半分鬼女の顔になる 正和

欲のない顔が柩の中にある 実千代

【今月の推せん句】

不器用だからたった一つの顔で生き 亀井田女

一つの顔で生きられぬ浮き世への風刺も 永原昌鼓

似た顔が並んで概観き込む

【覗き込む】のリアリティーの迫力

【私の句】

牛の顔全部見分ける牧場主

秀句鑑賞

同人吟 河内 月子

— 10月号から

この夏は東北では山背が吹いて米は十年振りの不作。「タイガースが十八年ぶりにリーグ優勝を遂げて」関西は大にぎやかに。

さあ、今月もたくさんの佳句を私といっしょにたのしみましょう。

コーヒーよしワイン尚よし夜長かな 月子
どの球もこの頃妻は打ち返す

石谷 美恵子
ご主人さまのひとり言。仲のよいご夫婦はこうでなくちゃあね。同等の時代とはいえず、たまには旦那さまに花を持たすことも忘れないでね。

奥さんは留守かと保険屋が帰る

宮川 珠笑

勧誘なのか、集金なのか、はつきり分らんまま保険屋が帰った。それはさておき、億のつく金額やったらサスペンスドラマになりそうだ。

学が気があればナメクジさえ教師

新家 完司

自然からでも何からでも学ぶことの多さを

痛感しています。私達と同じ時代に住んでいる地球上の動物も植物も、いろんなことを身をもって教えてくれます。うちの庭のかまきりも、蜂も、だんご虫もみんな先生です。

手の爪を切ってから切る足のつめ

福士 慕情

もの事にはちゃんと順序があるんですね。それとも由緒正しき「津軽藩士」のご子孫らしく何事もきちんと順序立ててらっしゃるのでしょうか。御点前もみごとでしょうね。

恋をする蛭に邪魔な人の群

成重 放任

文明が進むのと逆比例してどこも水が汚れてきました。子供の頃よく見かけた蛭も今ももう皆無です。雄は子孫を残すため必死で信号を送ります。あの美しい光は雌だけのものである事をお忘れなく。それでも蛭を見る時には余り近寄らないで見てください。

水を買う事に慣れるという怖さ

小糸 昭子

どこの店でも今は当然のように水を売って

います。銘柄もお値段もいろいろ。昔は水道の水も美味しかったのと思いつつ、私も水を買っとうります。

アスファルト剥けば地球も涼しがる

山門 タミ

子供の頃、夏は今ほど暑く感じなかったのは地道ばかりだったからでしょう。今は山頂までドライブウェイのためにアスファルト。人間さまのためとはいえ、虫や鳥や狐や狸みんな可哀相です。今年の残暑は長かった。

開墾の苦勞は見せぬ千枚田

菊地 政勝

祖父曾祖父の魂が宿っていそうなおの美しい千枚田。その美しさを守ってゆくのも並々ならぬご苦勞がある事でしょう。伝来の美しさを残していってほしいものです。

道連れは蟬に蜻蛉に昼の月

指宿 千枝子

童謡の歌詞に出てくる風景の中を歩いてこられてどこへ行かれたのでしょうか。心地よい風も伴走してくれて、ひとりでも退屈しない。

若返る努力続ける妻の頬

神原 まさこ

四十数年前、夜九時になるとラジオから「おとめの祈り」が流れて、私もマッサージをしたことを思い出します。女性の美への憧

れ、執着はいのちがけ。美しい奥さまにうん
とおほめのことばを。

心配がないのに白髪増えている

川口 信子

白髪が増えると他人様の目が気になるのは確か。でも「年相応でえやないか」と言われてみると、顔の皺に相応してふえるのは仕方ないことやと私自身は「毛セラセラ」です。

後もどりできぬ人生今が華

榎本 日の出

今が華、今が華と、呪文のように毎日自分に言い聞かせてるあなたはカシコイ。過去から抜けきれない人は多いけどあなたは違う、大切な今は今だと知っているのだから。

笑うたら損しますのか女店員

板東 倫子

愛想ええ娘が多い店員さんの中でもたまにこんな人をみかけます。フラダンスの先生に「スマイルが命」と教えこまれてからくる日もくる日もスマイルの稽古。スマイル、スマイルでお客様をキャッチしましょうね。

外面は気楽とんぼに見えるらし

中澤 伽羅

回りを楽しくしてくれる人、いつもにこにこして何の苦勞も、心配こともないかのようなお顔、どっつい大変な苦勞人なのですよ。

比べたらあかん一生丸い鼻

生嶋 ますみ

神様はそのお人に合ったお鼻をくださるのだと偉いお坊さんに聞いた事があります。神様から頂いたものは何でも宝物です。家庭円満のお鼻をどうぞお大切に。

長いこと姓で呼ばれた事がない

高田 美代子

そう言えば私も「河内さん」と姓で呼ばれることはフラダンスの教室くらい。雅号で呼ばれるこのあたたかさから、もう逃げられない月子です。

スマートにマネキン着てたスーツ買う

林 昭三

シヨウウィンドウに盛られた夢をそのまま我がものにせんと、威勢よく財布をはたきます。ひとときアランドロンになった気持で街に出れば、高い買い物物はアリマセン。

全身を鏡に映し靴を買う

谷口 義

この秋の流行の色にしよう。でもどの服にも合う色がいいな、やつぱり黒にしよう。靴一足買うにも、女はいろいろたのしんで計算するのです。

Tシャツとジーパンで来るお寺さん

銭山 昌枝

小回りのきく単車でやってくる若い和尚さん。お経で鍛えられたノドは天下一品です。帰りはそのままカラオケに行けそう。

青年を持続しているおじいさん

岸 桂子

若大将こと「加山雄三」さんもばちばちおじいちゃん。人前に出る職業なので、スポーツや頭の体操を持続する努力も、大変なことでしょう。私達は川柳でリフレッシュさせていだけましう。

かじられて喜んでる老いの脛

阿部 進

まといつかれてもしんどい孫たちですが、寄りつかれないのも淋しいもの。それに親たちはロインでフーフー言う年頃だから、ここはじじいばの出席。ムリしてでも臍をかじらせる心。分かりますよ。

びつたりと合わなくなった鍋の蓋

木村 春枝

わたしの家でも、お互いからだのムリが利かんような歳になった昨今、逆に「我」が強くなつてきて、一触即発の気配になる事が往々です。でも辛抱してストレス溜めるよりはましだともお互い思っています。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 10月号から

井上桂作

対象により川柳の内訳を拝見しますと、女性作家が多いせいも人情句が一番多く見られました。次いで多いのが自然句である。新聞などを通して多くの人が触れる時事句、歴史上の事実を詠する詠史句など、それぞれに変化に富んだ句を作ることも楽しいでしょう。

トラの威を借りて経済活性化

寺井弘子

トラのマークの威力はすばらしい。不況にあえぐ関西経済界では恵みの雨となつてゐる。幾夜テレビに釘付けになったことか。その経済的效果は、六千億をはるかに越える試算されている。

欲捨てた分だけ器でかくなり

稲川恵勇

欲望とは、不足を感じてこれを満たそうと望む心である。自分の利のみを欲する我欲を捨てると包容力が増し、器が大きくなる。

副作用なくす薬をたんとのみ

村中悦男

たしかに最近の薬はよく効きます。しかし多用すれば必ず副作用がおきてくる。実際に副作用をおさえる薬はありませんか。

古希迎え老いの哲学幕を開け

酒井美美子

古希を迎え仕事からも解放され、残りの人生をいかにして生きていくか。新老人としての哲学を是非とも持ちたいものである。

最強の味方やっぱり妻だろう

福西茶子

夫婦とは、適法に婚姻した男女の身分をいうようですが、利害が一致する夫婦間ではやはり最後まで、最強の味方同士になる。

胡座かき肩怒らせているかぼちゃ

野村清美

最近は大らかなカボチャが良く話題になる。丸い形は肩怒らせて座つてゐるように見えるカボチャはいつも頼もしいですね。

玉砕は知らずレジャーで誘う島

源田啓生

第二次世界大戦中、太平洋の島々で多くの兵隊さんが尊い命を失いました。サイパン島などは、新婚旅行で良く知られている。戦争を知らぬ世代では無理からぬことでしょう。

エリートに育てて田畑荒れている

森下一知

有名大学を出て官僚・大会社へ。故郷に帰って、農家の後を継ぐ若人は少なくなりました。父祖伝来の田畑も荒れはてたままです。

打ち水の涼を貰って将棋指す

安野かか志

中国では家の前の道路は自分の庭と考えているようである。打ち水された路上で将棋を指す光景は、見た目にも楽しく感じます。

気前良い保険つぶれはせんどころか

高野不二

不況で保険会社の統廃合が続いている。保険業法の改正と相まって、新しい保険会社の攻勢は急である。誰しも考えることは同じ。

暇な日は笑う練習してみるか

秋野宏

「笑う門には福きたる」と申しますが、健康はもとより笑いの効用は大である。難しい顔はやめて、笑つて暮らしましょう。

荒れる子へ祈る他なし蟬時雨

伴洋子

健康食謎を解いたらただの草
手を挙げたグリコが強い虎に化け
神の名も知らず祭りが活気づく
走馬灯愛の絆が断ちきれず
雨戸閉め台風一過の時間待ち

西森善蔵
乾春雄
矢谷富士野
濱口フジ

■句集鑑賞

近藤佳子川柳集

『曼珠沙華』を読んで

新家 完 司

美しい本が生まれた。純白の表紙に鮮やかな曼珠沙華が誇らしげに咲いている。鳥取市の同人、近藤佳子さんの川柳集。手にして、これほど美しい莖丁を見たことはない、しばし見とれてしまった。表紙絵は石谷映雲、川柳界では石谷忠良と号し、番傘の同人。序文は、川柳塔社同人の原みさをが筆を執っている。いわば、結社を超えた仲間の協力によって完成した句集といえるだろう。

鑑賞をさせて頂くことになったが、実のところ、近藤佳子さんとは、二、三度会話を交わした程度で、詳しいことは存じ上げない。個人句集を鑑賞する場合、その人と親しく付き合っていて、私生活や性格を熟知しているほうが深く読み取れる、ということもあろうが、全く未知である場合は、先入観抜きで、作品そのものに対することが出来るのではな

いか、とも思う、そのような心構えて鑑賞させて頂いた。

大臣にも仔犬にも吹く春の風

先ず目についた句。にんげん仲間と動物や植物を平等に観ることが出来るのは、川柳作家の資質の一つであるが、にんげんの中でも「大臣」を持つてきたのが手柄で、どのように立派な肩書であつても大自然には通用しない、という作者の反骨精神が明確で心地よい。

聞き上手そして忘れる母いとし

旅立ちの母に最後の紅をさす

母の雛母のまなざしそのままに

寒い月母を看取つた夜に似て

作者の母に対する想いは、「あとがき」で詳しく述べられているが、その「想い」は、作品を通じてしみじみ伝わってくる。老いた母を「いとしい」と思う心。母が大切にしていた雛人形のまなざしに、母の面影を偲ぶ心。そのやさしい心は、惜しみなく愛情を注いで母が育てた心である。幼児期に受けた深い愛情が、近藤佳子さんの人格形成に大きな影響を与えたことがよく判る。

サヨナラは言わず最後の拳手の礼

飛び立って還らぬ人よ吾も老ゆ

彼岸花燃えて兵士の墓静か

野佛に赤い絨毯曼珠沙華

表題の「曼珠沙華」は、近藤佳子さんの一番好きな花だとか。曼珠沙華が一番好きだとは珍しい、と思つたが、やはり、深い思い出がありなのだ。兵士の墓の側に咲く曼珠沙華は、また、野仏の前に絨毯のように広がり、遠い青春と懐かしい人を偲はせる。

再入院神のお許し貰うまで

自然死をお願いします家族殿

腸閉じた糸抜け一つ落ち着いた

退院はしたががまつすぐ歩けない

昨年から体調を崩され、気持ちも落ち込まれているご様子。「自然死をお願いします」は、深く死にたいという表明ではあるが、それは、こころが弱くなっている証拠。

アンコールワットに憧れ続け半世紀

楽しいね充分生きてまだ余生

リハビリで闘う心よみがえる

うつむいたままで終つてなるものか

不死鳥のようにこれから生きてゆく

快方に向かい、体調も良くなつてくると心持ちも明るくなり、持ち前の芯の強さが作品にも如実に出て来る。元氣であれば、アンコールワットにも行ける。今後ともその意氣で、益々のご活躍、御健吟をお願いしたい。

■句文集紹介

『熱い汗』

岩佐 ダン吉 著

田中正坊

本社句会や各地の句会で「反核」をテーマにした句が披露されると、「ああ、ダン吉さんの作品だな」と気が付く人が多いと思う。とにかく「反核」にかかる著者のこだわりは、中途半端なものではない。

命ある限り核廃絶を叫ぶ

美しい星に核など似合わない

反核の鎖で地球つなぎたい

などの佳句が並ぶテーマ別川柳作品の「核はゼロ」がまず目をひく。

一匹の蟻の命もあったかい

など、生き物への慈しみを詠んだ「蟻んこ」に続く「前かけ」では、父が戦死し、母の手一つで育てられた著者の母への深い思いが、かずかずの句にこめられている。

余りもの食べて合掌してる母

ひたすらに耐える母とは何だろう

背をさするひととき母と濃い時間

この思いは、「うっかりが多く丈夫な妻がいる」という句のように妻へも投影しているが、作者が毎月発行する手書きの個人新聞『元氣なもぐら』に連載したエッセーを収録した「ユリ子（母）10章」は本書の圧巻で、エプロンでなく、前かけをした今は亡き母の姿、作者とのかわり合いが涙をそそる。

このほか、地球と環境への問題を提起した「青い星」、懐かしい古里の思い出を綴った「江の川」、そして椎間板ヘルニアでの辛い入院生活と、そのリハビリのために始めたマラソンに関する作品とエッセーから成る「ランパン」には、次のような句がある。

再スタート僕にうれしいスニーカー

走友の背には平和と書いてある

さらに「リュック」「同じ皺」に続く「意見あり」には、折りにふれて新聞・雑誌の投書欄に投稿した文章とそれにちなむ作品で埋められ、政治問題から社会問題、特に作者が執念を燃やす禁煙運動にも触れている。

歌わない人あぶり出す国歌法

ワイドショー正義の顔をして叩く

テーマ別 句・文（第一章）のラストを飾る

「鶴彬」は、八句・二編と少ないが、

鶴彬に思うことありペンを取る

九条を殺す彬を二度までも

に示されるように、新作を含む珠玉の作品が並んでいる。著者は有志とともに、彬の命日である九月十四日、その出生地である石川県高松町の句碑前で開かれた碑前祭に参列し、十月十九日の岸和田市民川柳大会の席上、「鶴彬 大阪城から金沢へ」と題してお話をしたが、彬の作品を貫く反戦・社会風刺の精神は、著者が目ざすところでもあろう。

第二章は自由吟、第三章は著者が所属する岸和田川柳会の「仲間の句」で埋められ、第四章は彼の川柳観を示す川柳塔誌に掲載された「秀句鑑賞」二編、そして第五章は「おめでとう」と題してマラソンの走友、ペン友、学友と古里で村会議員をつとめる弟、姉と妻の寿恵さんがそれぞれ著者の知られざる一面を描き、本書監修の任にあたったあかつき川柳会の堤満敏氏が跋文を書いている。

序文は川柳塔社名誉主幹の橋高薫風氏をはじめとして恩師の阿川静明氏、岸和田川柳会会長の芳地狸村氏、もくせい川柳会会長の田中正坊が執筆しているが、A5判二四四ページには、川柳五〇句とエッセー四〇編が盛り込まれている。ペーソスとユーモアに溢れ、鋭く時代を風刺して世に問いかける個性的な作品の集大成に心から拍手を送りたい。

阪神タイガース優勝記念川柳大会

とき 12月13日(土) 午後2時〜5時
ところ 道頓堀くいだおれ(5F)
セレモニー 浄福寺住職 西村哲夫師
兼題・選者(題名五十音順)
2時10分〜3時30分

「今」 ふあうすと川柳社 泉 比呂史
「大 阪」 川柳天守閣 久保田半蔵門
「川」 番傘川柳本社 磯野いさむ
「狂」 番傘川柳本社 森中恵美子
「チャリン」 川柳塔社 橋高 薫風
「ビール」 川柳展望社 天根 夢草
「ファン」 時の川柳社 小松原爽介
「ほしの」 堺川柳会 河内 天笑
(折り句) は……………の……………

全題事前投句(当日は発表のみ)各題2句
便箋4枚を縦半分に切り計8枚・無記名
投句料 1000円(出席せず投句のみの方)
宴会出席 7000円(投句料プラス6000円)
先着80名、受付票として領収書書送付
呈 賞 秀句2句に選者色紙ほか

投句・宴会受付締切 11月20日

この会を「川柳界」12月例会とします
投句先〒593-8305堺市堀上緑町2丁16-13

主催 堺川柳会 後援 川柳塔社

京都塔の会 秋の吟行句会

日時 11月27日(木) 午前10時45分集合
集合場所 地下鉄烏丸線「五条」下車
地下通路を南へ⑤出口
市バス「烏丸六条」停留所

見学場所 渉成園(東本願寺飛地境内)
昼食・句会 京料理 枳殻荘

行程 11時出発して渉成園見学
12時枳殻荘にて昼食

句会 1時〜3時半(泊り客あり延長不可)
朱・割る・本場・当日雑感
各題3句 選者未定

会費 4500円(当日いただきます)
締切 11月15日
申込 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通
松原下る弁財天町

都倉求芽まで 075(351) 4109

◎渉成園 もと周囲にからたちが植えられていたので枳殻(きこく)邸とよばれる。源 融が奥州塩釜の景を移し難波から海水を運ばせた六条河原院の遺蹟。その後境内が広まり、石川丈山の作庭になる。

第15回兵庫のまつりーふれあいの祭典

川柳祭開催要項

趣旨 全国から広く川柳を募集し、優秀作品の発表、表彰講評などにより、川柳の普及とレベル向上、文芸参加の意欲向上を図る。

日時 11月30日(日) 午前10時半〜午後4時半
会場 宝塚ソリオホール TEL 0797-81-8200
ふれあいの祭典実行委員会・兵庫県・宝塚市教育委員会・県川柳協会他

後援 宝塚川柳会・ふあうすと川柳社
時の川柳社・朝日新聞社他
開 正午 ①アトラクション ②事前
式 ③入賞作品の講評 ④講演
式 ⑤当日
宝塚市大使やすみりえ

賞 文部科学大臣奨励賞・兵庫県知事賞
宝塚市教育委員会賞・ふあうすと川柳社賞・時の川柳社賞他
当日投句の部「投句料」1000円

題と選者 「マンション」 古川 奮水
「星」 石井 冬魚
「みどり」 佐藤 純一

各題2句(出席者に限る・未発表作品)
出句締切 正午

各題から優秀作品3句を表彰します

みよのたま

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

岸和田川柳会

長谷川呂万報

一枚目の舌がかわいいことを言う
履歴書を一枚靴に入れてある
やさしさが私のハート塗り替える
ひたむきな恋はピンクに塗り変わる
教科書に墨塗って読む敗戦後
他人の世話熱心過ぎて拗ねる妻
お百度の素足に神の目が光る
母ちゃんのツバは魔法の塗り薬
塗りこめた思いが疼くヒロシマ忌
責任を他人に塗って知らぬ顔
煽てられ音痴がマイク放さない
寝たきりが恐くベッドの二歩三歩
嫁く日へ熱心にする家事炊事
熱心な友の誘いで小旅行
熱心な家庭教師は姉に的
一分で乗り気にはせるコマーシャル
乗り気ゆえ内緒で試すあの葉
誰よりも偉い先生励ます会
リハビリに励む友から励まされ

眞理子 蛙城 房枝 みよ子 呂万 東吉 仁緑 みつ江 ダン吉 狸村 守 力子 ゆり子 盛之 笑司 穰一 香代 英雄 珠子

励ました人に今度は励まされ
励ましに選手の尻をポンとやる
やせたいと励む孫には飢餓教え
励む子に貧しさ続く途上国
ペンキ塗り立て小指でそつとなぜてみる
精勤賞もろたばかりに休まれず
好きだから励ます言葉さがして

ロース川柳会

山崎

君子報

過ぎ去ればいろいろな事皆たのし
私の我を取りみんな丸くなろ
人いろいろ恋もいろいろ許し合う
呱呱の声先ずはタオルで包まれる
よろこびも愚痴もいろいろクラス会
悩み事いろいろあつて今青春
部屋に残るタオルケットは娘の香
働ける欲び今日もいろはには
いたずらは風がいろいろ告げにくる
笑つてごらんきつと涼しい風が吹く
物忘れ日に日に増えてみだれ萩
誕生から死までタオルと縁ふかく
タオル地のねまきに貰う母の夢

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

寿海 照女 路基 東雲 洋 さい子 哲子 藍 美龍 孝一 いわゑ 武庫坊 年代 義子 君子 武史 泰雄 秀夫 宏章 萬的

冷めた目で書く鋭敏なペンの先
湯豆腐の崩れた端が鋭いな
冗談の中ほどにある鋭い刃
鋭さが消えて野心が宙に浮く
出来心未婚の母になりました
脱税が出来心とは言わさない
セクハラになるとは知らず出来心
自殺募集出来心では済まされぬ
出来心に負けた良心泣いてる
出来心ながらボタン押してない
背な子が肝心なこと皆喋り
釘なしでびびったり合す宮大工
思惑がびびったり当たる風が吹く
びびったりのガラスの靴を探してる
びびったりと心閉ざした反抗期
坂道を押す甘い風きつい風
坂道で絵になる人や困るひと
燃えつきた乳房が坂で四股を踏む
一呼吸置けば目先が見えてくる
なにくそと思えど僕に過ぎた妻
地下鉄を出て踏みしめる娑婆の道
終章を綴るころを研いでいる
物置で解散待っている達磨
表札に用心棒がひとりいる
頑固だが人より深い涙壺

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

美龍 紫香 活恵 スミ子 あやめ 照子 治三郎 稲栄 高芽 求女 五月 庸佑 初恵 故無 典子 孝一 晴美 東雲 宵草 茂 比ろ志 尚士 重人 諷云児 鈴枝 正光

暑さ増し化粧くずれが気にかかる
立秋へ暑さ忘れの風に会う
甲子園暑さの中の青春譜
炎天が欲しいと嘆く稲の花
激論に負け犬となり脳冷やす
クーラーで冷やしすぎた腰痛む
湯上りの冷えたビールに生かされる
青い鳥ころ冷やして待っている

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

飛ぶ鳥よ人間何に見えますか
悔しさは後でじわじわ湧いてくる
精霊の友ははたちで吾八十路
幾山河越えて米寿へ生き延びる
ふる里の水が恋しい米を研ぐ
亡妻の声聞こえて来そう月の牙え
生涯を共にする氣の一目惚れ
美辞麗句に酔って目標見失う
暗記した見舞のお世辞出て来ない
雑草も人も焼けつくこの猛暑
蓮池に朝の元氣を貰って来
北朝鮮互いの机波高し
川柳をつつかい棒にして生きる

東大阪市川柳同好会

森下

ビードロの風鈴熱帯夜を洗う
胃を洗い落ちない汚れ診るカメラ
星空を洗うしずくが流れ星
好きだから君の条件全部飲む

智恵子 和代 公美枝 豊枝 久子 静江 弘子 雄々 初恵 ひかり 治延 あきら いさむ 吟笑 勝太郎 坊太郎 賢 放任 八重子 輝夫 かおり 愛論報 柳弘 シマリ 度 賢子

少しなら飲んでも良いか医者に聞く
澄んだ水ばかり飲んでるやせ蛙
男の無念くくんと飲んだのど仏
慣れた手付きで薬飲む母悲しくて
議員から売名兼ねている祝辞
なん役も兼ねいきいきと妻の夏
田舎芝居の座長は脇役も兼ねる
監督と選手を兼ねる草野球
木戸番が捕方もやるドサ回り
挨拶を兼ねて盃持つて来る
我武者羅に生きた裸の物語
裸電球夜店の顔になっている
美しい裸になる金と銀
ビーナスの裸像に神を信じよう

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

虹がたち鳥が絵になり詩になり
買つて出たふたりのためのかけ橋を
海渡る橋にもあろう孤独感
確信をもつて耐えてる村の橋
虹の橋渡れば亡夫に会えそう
天の川渡り初めてす恋の橋
橋渡る丁か半かは先のこと
古里のおもい出の橋土の橋
虹の橋夢にえがいた日本海
触りたいところへ政見触れさせず
大往生の蟬が空から降ってきた

竹原川柳会

時広 一路報

朝子 美弥子 緑 猪太郎 萬的 三重子 育弘 秀夫 信治 愛論 ばっは 太郎 東雲 湖風 民子 ちよえ はるみ かつ子 聖子 惠美子 好栄 博利 清泉 白汀 蘭幸

亡父が居た蟬もいた古里遠し
若き日の茶席で聞いた蟬きぐれ
生き甲斐は何かと蟬に問うてみる
鉤を杖に父の瞳いつも海へ向く
こんがりとお肌思い出焼きつける
おだやかな海亡母さんを想わしむ
傘寿来て海にあこがれ海の夢
海の国海がきびしくなりました
草を抜く夕暮れどきの海の風
大花火海の祭りの恋拾う
ふる里の海の深さよ亡母恋し
水平線見ている心風いである
蟹の目に瀬戸内海は宇宙かも
紙ヒコキ折る小さなパイロット
石段を登れば蟬の風が吹く

佳句地十選

(10月号から)

中原

みさ子

告白を聞く公園は蟬しぐれ
長い方がいいな二人で歩く道
制服を脱いだ素顔も正義感
この癖は自分似たなと苦笑い
停止線ここで理性をとりもどす
隅っこがなくて地球に陽があたる
喜んでたら汗がとまらな
経験をしたから君の身になれる
起死回生まだ信じてる座りだこ
百歳へひよいと魔法の杖で飛ぶ

幸子 慶子 青居 榮枝 房枝 孝枝 夏喜 正宏 淑子 厚子 静風 節夫 史子 輝恵

重人 是み 求芽 美籠 菁居 半覚

禪寺の無縁仏の目と話す

禪を組む心に阿修羅棲まわせて

何にもいらん禪と蟬しぐれ

腕白も教師も静か座禅堂

肩書を外し警察うけている

切株で座禅したかも山頭火

禪譲という語が政治家にありき

座禅組む児がほんとうに眠りだす

いのち知る蟬だ鳴きたいだけお鳴き

川柳塔打吹

大森 孝恵報

川柳に溺れて見たが種切れだ

時々酒に溺れて憂さ晴らす

溺れるなら水より酒の池がいい

東京砂漠人の波間で溺れてる

酒おんな溺れた跡が脛にある

溺れそう人魚の泳ぐ川がある

歳忘れマンボにロック溺れた日

八十の手習い趣味に溺れとる

句作りに溺れてしまい眠られぬ

糠床が馴染んだ頃はキュウリ無し

ぬか漬がが馴染んでやとと母の味

夢の中幼馴染みは歳とらぬ

古果の町ここはやっぱり良き都

そこは駄目馴染みの客の指定席

すりへつて足に馴染んだ白い靴

馴染まない靴にがまされてあいたた

俺の足俺のぼろ靴知つている

びしびしと鍛え青春貫いた

汎美 敬子 笑子 万年 貞子 不朽 半覚 一路 貴恵 善江 公恵 三津子 博文 幸子 和子 玲子 しろう 京子 芙美子 紀美恵 克枝 勝見 たけ代 友楽 石花菜 順子

時にびしびし時にはまるく糞する

目をむいてびしびし叱る父が好き

根性を鍛えてほしいびしびしと

泡を食う離婚届にあるかしこ

婆ちゃんが泡を食うほどよく喋る

居酒屋で泡をたはして本音吐く

酔っぱらい泡だて安くしろと言う

折角の実肥も水の泡となり

左遷地の祭りに馴染む渡り鳥

顔馴染み増えて道幅広くなり

一度でも溺れてみたい愛の海

ライバルに一泡吹かす策を練る

尼崎尾浜川柳会

田辺

ゆうぜんと時間を知らず大時計

長ながの祝詞に欠伸噛みころす

ダイエツトみのりの秋を我慢する

長尻の客に思案のご飯とき

虫しぐれ亡き人想ふ山の宿

悩んでる俺を置きざりに風よ

坪菜園旨いと虫のお墨付き

ひぐらしの夜明けを告げる能勢の郷

太い足ロングスカート役に立つ

長い夜独り寝いやす演歌節

友がいてなくもむひと時鈴虫鳴く

胃の調子長く生きよと腹八分

ゴキブリが出たと夜中の逮捕劇

旅行か時計迷わず決めたベア時計

ただいまと丸虫を手握りしめ

龍枝 季芳 久芽代 芳光 楨元 泰山 玲坊 よしえ 節子 清 孝恵 鹿太報 鹿太 美代子 その 江美 まさ 全彦 勝巳 玉枝 カズ子 信子 よし子 秋子 耕治 亀与子 イサミ

ふるさとへ長いトンネル疾走す

散歩道手折りたいたい花色妖し

したたかな蟻の無言に教えられ

佳い事は長く続かぬ万華鏡

百日紅残暑の恵みとり返す

ご馳走を前に挨拶長すぎる

長い橋川には水が流れてず

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

日の丸をシャンとさせる風の位置

今がチャンス上手に風に乗ってみる

風鈴の下で短冊目を回し

介護するわたしを風がはめてゆく

希み持つ明日の風のその中で

他人行儀に斜めから見る影法師

夜更けても人影動くビルの窓

神様のおかげをもろたことがない

老いてゆく影から逃げる息の切れ

しつとりと二つの影に星が降る

影の人仮面いくつも持っている

ほたる川柳同好会

水野

人生を嵐のようとう丸い顔

粗削り円空仏に引き込まれ

かつお節割れば海が匂いだす

身を削り骨を粉にして国壊す

シャキシャキの音が削ったカキ氷

嵐呼ぶ西武警察事故で消ゆ

ひと声の吐く息凍る鶴の舞

義芳 孝一 正治 美龍 求芽 諷云児 紫香 欣史子 能子 喜美子 扶美代 弘直 アキ 香住 シマ子 あずき 慶子 加津子 黒兎報 契子 柳童 黒兎 緑骨 ヤギエ 長一 よしろう

リストラで削ったなかに在る地金
ラストダンスもう待つ人のないフロア
身を削るおもいは食べて埋めている
阪神の気炎を少し近鉄に
台風一過夫婦に元の日々戻る
砂嵐近代兵器凌駕する
中東に吹きまく嵐いつ終る
一曲を子のリードでは息切れし
こたわりを持たぬ気性は荒削り
プロボーズワルツに乗って囁かれ
芽も出ぬに爺めダンスに目が無うて

西宮北口川柳会

黒田 能子報

初めてのデートコスモス揺れていた
コスモスに挫けちゃだめと気を貰う
コスモスよ揺れて残暑を追い出して
愛こめてこころ一番は突き放す
懐の寒い夫を放し飼ひ
旅好きの論吉放すな帰らない
定年で味わう朝の解放感
本質をだんだんはなれてゆく噂
放されて山野走ってみたい犬
放たれた矢はそれっきり戻らない
素に戻る時の化粧はせぬように
老いて子の意見素直に聞くつもり
コーヒーがうまい素直になれた朝
旬の味素材を生かす京料理
素っピンで歩けるには一寸むり
ごめんなさいが素直に言えた朝のお茶

敵子 桂子 保子 信男 蛭柳 祥風 禮子 雪子 久子 正三郎 勝
奮水 光久 貴代子 求芽 石舟 五月 比ろ志 いわゑ 哲子 能子 富喜子 絹 美代子 良恵 利子 たず子

故郷の小川素足へ快い
ビー玉で床の傾きテストする
お父さん賞味期限のテスト役
長生きのテストを受ける聴診器
雑魚なりに磨きをかけているテスト
テスト無し一発勝負で逝くつもり
赤信号警笛ならす反抗期
過去形のほめ言葉なら通夜がよい
吹き上る噴水競う高い空
スパイスをあこれ揃え夏深し
誰とでも函車の合うカスミ草
全ボツに夫はファンでいてくれる
母逝くも世はこともなし白い雲
故里の土に素足がよくなじむ

京都塔の会

都倉

送り火を一人はつちに焚きにけり
風鈴を吊るとやさしい風が吹く
鶴を折る思いにさせた曾孫誕生
お祭にゆくのからちよこ地下車内
わたしなりの老いの美学を握りしめ
このビルのトイレあたりが本籍地
三食を二人でたべるから夫婦
平凡な倅せ朝の目玉焼
純粹に笑えるコメディー品がある
アンテナに野暮な喜劇がひっかかる
コメディーの生まれぬ土壌に住んでいる
終焉のドラマコメディーで終りたい
甚大な被害残して梅雨が明け

庸佑 歳子 孝一 鹿太 萬的 てる 光子 哲男 いたる 春蘭 メ女 章子 嘉彦 正坊
求芽報 春蘭 武庫坊 年代 達子 美穂 あやめ 正坊 諷云児 満子 郁郎 幸代 百合子 ルイ子

大役を無事に務めてうまい酒
大キライの注射で腰を癒やされる
大吉のみくじ財布にしのはせる
大吉をひいて当分自重する
ほろ苦さ知って一つの山を越え
苦み走ったこれがババよと古写真
擬餌鉤に釣られたようねと苦笑い
一言が多くて残る苦い味
苦い酒も生き甲斐とするのだ仏
苦い方の答をわかつてくれたかな
のみこんだ苦い思いがうずき出す
苦い水飲んでくれてた父と母
割り勘で負けずに食べてもたれ気味
惚れ気味の君には何もかも甘い
診察後皆が優しい気味悪さ
幸せが続いて少し肥り気味
疲れ気味のババに太り気味のママ
川柳塔みちのく 小寺 花峯報
鮎釣りの腕はプロだが職がない
危険予知やたら鮎が騒ぎだす
一卓に到来物の鮎飾る
鮎見ると釣り好きだった父のこと
あきるほど焼肉食べたネプタの日
せつかな鮎に敵しい針の私語
縄張りを持たない鮎が瘦せてゆく
母の手の飽きを知らないにぎりめし
相合傘愛しく飽きず金婚詣
張り梁にかかった鮎の身重なり

庸佑 修水 英旺 求芽 輝美 克治 萬的 弘之 メ女 葉子 宏子 益之 欣子 福子 典子 啓子
あすろ きよし ヒサ子 てる 隼人 順風 慕情 銀波 花匠 愁女

デバートを三度まわって試着室
はみ跡に育ち具合を確かめる
無縁塚せかせか誰か石を積む
落ち鮎のところが判るホームレス
その後は修羅場を越えて来た鮎だ
鮎好きの孫に小骨を取ってやり

三幸川柳教室

古久保和子報

何気ない会話知恵の輪投げ合って
世渡りは下手でも温い親子の輪
点から線面へ広げる平和の輪
幸せに的をしぼっている輪投げ
偏差値に奪い去られたカゴメの輪
ローランサン楽しい色で部屋かざる
脱皮するだんだん色が薄くなる
マニキュアを捨てて真夏の田草取り
色白に産んで自慢の姫だるま
何色を添えても白は拒まない
カラフルに生きる七色唐辛子
紫陽花の白に恋して騙される
自分史にまだまだ足りぬ色がある
老いらくの恋はオレンジ色がよい
金の要る話ゆつくり後でする
ひとしきり話したあとで眠くなり
勝手次第に生きるわたしの後日談
知らぬ間に二番目の子は成長し
十戒の七つ八つは身に覚え
ゼロからの出発にして明日へ漕ぐ
二人居て背中合わせに見る夕陽

井蛙 一人 千加子 一花 五楽庵 一步 幸 利治 靖子 清史 信子 次根 イセ みね さち子 三千子 登美代 保州 昇 義男 当代 千秀 マリ子 鉄治 准一 朱夏

一呼吸おけば拳もはぐれ出す
語り部も老いる八月十五日
オイ百足安い靴屋を知らないか
一握の砂の浜辺もゴミの山
アドバイス五臓六腑が聞き分ける
糸のない針で一生縫いつづけ
両親を恨んでもみた一人っ子
十二歳青いりんごが狂い出す
一杯のビールで夏が生き返る

川柳塔わかやま吟社

牛尾

やり遂げてやつと男の顔になる
ふたりの気持やつとわかってきた老後
陽の和みやつと掴んだフルムーン
拉致疑惑やつと世界に知れわたり
未熟児がとび跳ねているランドセル
借り着してやつと返した義理一つ
湯加減もやつと分った若女将
立ちあがるきつかけくれた一通話
信条へ黙って席を立つてくる
等身大の鏡の前に立つて見る
立つて歩いた夢を見ている車椅子
樹の下に立つと答がふってくる
必要とされているなら僕も立つ
両方に立てる笑顔がむつかしい
極上のデザート友と語り合う
飢餓の子に申しわけないデザートよ
悪酔いへまあまあまあと林檎剥く
部下思う上司にきつい愛の鞭

嘉平 町子 和子 義雄 正一 武 桂香 公子 和重 翠子 鉄治 富美子 利治 豊太 稚代 あき子 三男 裕美 輝子 克子 さち子 優子 保州 かほろ 和香

目端利く部下に足元すくわれる
喧嘩する部下と一番仲が良い
家庭には上司も部下も居ないはず
四面楚歌仏様にはなれぬ部下
部下のなかにファイアの虫がいる強み
部下からの時節の見舞温かく
飲み食いひまつた部下の下心
腹心の部下が持つてくる手榴弾
有能な部下で手となり足となる
八起き目でやつと上手に立てました
良い部下に恵まれましたありがとうございます
デザートの頃にはイエス用意する

かわはら川柳会

上田 俊路報

かなしみの中肩をソフトにたたく友
にこにこソフトな嫁は福の神
赤ちゃんのソフトなマイル明日の夢
粗大ごみソフトにつつま家族の和
折り鶴にソフトに語る原爆碑
一振りのタクトで狂う世の怖さ
毎日が夫のタクトでまず平和
鼓笛隊タクトにあわせ花になる
しなやかに老後を生きるタクト振る

川柳塔なら

坊農 柳弘報

順子 正博 よしこ 美子 寿子 和 佐一 英子 和子 輪 三喜夫 緑良 登生 かず恵 聰 寿子 雅子 泰良 悦子 余吏子 俊路 博一 彰治 積子 ふりこ

八月の海に裸足がまだ疼く
 拝んでる野心も少しはらの中
 赤い爪サンダル履いて祖母が来る
 少しニヒル少し頑固な草繁る
 地蔵さん拝んで通る小学生
 北のツアーあれが最後のフルムーン
 ルーブルを駆け抜けてったツアー客
 蜜には甘く美味しい草の露
 感涙にむせぶオロラ見るツアー
 バスツアー頻で数える頭数
 砂を噛む裸足少年夢五輪
 丸出しで男女混浴する足湯
 裸足のボレロ狂え狂えとドラムソロ
 ヒロシマを拝む世代が替わろうと
 ご都合で拝む神さまこめんなさい
 熱唱の舞台裸足のはるみ節
 炎天の雑草あしたの夢を見る
 軽石が裸足の風化見てしまふ
 草いさきれ遺産の土地がまだ採める
 旅行社の旗は今でも覚えてる
 グルメツアー女の太い太い喉
 語り種裸足の英雄と言うアベベ
 草の芽が小さくおいでしてる早春
 野仏を誰も見てないから拝む
 八月忌はだしのゲンを読み返す
 散骨のツアーに波が高すぎる

南大阪川柳会

吉川

寿美報

柳伸

句碑巡り歴史は遠くなるばかり
 寄せ書きの旗が歴史の裏にある
 働いた歴史を鉄は知っている
 ひっそりと歴史の裏で棲む民話
 子を生んで育てた歴史もって近く
 利害だけ言っておれない義理がある
 認めあう夫婦に利害などはない
 嫌な奴と利害一致で手を結ぶ
 政治家が利害にころぶ天下り
 あの世には利害はないと蟬しぐれ
 酔い方にてわかに女房吼くなる
 よい方に解釈してお爺ちゃん
 よいわるい判断できず直ぐ切れる
 只一つ母子の愛に利害なし
 快方へ向かつていますと千羽鶴
 よい父の仮面を外すネオン街
 油つ気抜けて理性を語りだす
 その裏を見破られた油汗
 衣料切符でふとん作って嫁に行き
 ダブルベッド枕一つに夢二つ
 寝袋に入つて虫の子守歌
 今の夜具縫い替えないで粗大ゴミ
 病む母をやさしく包む羽根布団
 川の字が増えては減つて夜具二つ
 子の夜具を仕立てて母のわらべ唄
 羽根ぶとんだんだん愛がさめてくる
 花柄の夜具へ孤独を眠らせる
 手うちうどん母利害など考えず
 お日柄へ大役果したモーニング

東雲 度
 シマ子
 雅文
 直子
 庸佑
 洞庵
 初太郎
 なぎさ
 たもつ
 明正
 頂留子
 清成
 叡子
 千里
 遠野
 珠美
 萬的
 千梢
 柳弘
 弘泰
 タカ子
 志華子
 章久
 ひさ乃
 重人
 朝子
 民代
 寿美

川柳塔きやらぼく
 福代 天雀報
 無理すればしつぺ返しがやってくる
 梅雨晴れ間小鳥のうれしそうな声
 何処へ逃げても射手座の矢には討たれよう
 おおらかな医師と付き合ひ喜寿を生き
 リストラが進み掴まるとこがない
 コーヒー党の亡夫に供える飲み加減
 矢面に立つて痛みに耐えている
 待つ人の隣へやがて並ぶ日も
 暮らす日々モノ捨てる術考える
 童話さらさら小川の水と流れ出す
 頭きりかえ進む世にしがみつくと
 湖底から兄が奏でるマンドリン
 この子等が幸せであれとこまでも
 そそくさと逝かれた隣あとしまつ
 軍配はうなぎに上る暑気メニユー
 広口のビンに語っている想い
 くちなしを私の紅で染めてやる
 茶髪からやさしい言葉かけられる
 ビーボーが停まると街に人が湧き
 梅雨期も傘が心を明るくす
 朝昼晩一所懸命食べてます
 大空を風をはらんだ鯉のぼり

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

辛子
 寛之
 和子

弘子
 千代
 日枝子
 瑞枝
 ふみ
 紫泉
 恵子
 なみ
 初枝
 やえ
 玲春
 千春
 富美子
 田鶴
 すみえ
 てい子
 杏
 春枝
 蘭
 八重子
 天雀
 清人

やつと見た金木犀の赤い色
 打上げの花火もよそに観る火星
 物忘れ激し朝から足のむくみ
 節日を大切に朝お赤飯
 終章は笑うつもりで鳴いた蟬
 夏が近く多くの傷痕を残し
 我が歴史毎日めくってゆく生命
 張り切っている曲がつてしまう釘
 ひとりならひとりのようにたたむ傘

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

老眼でみんな美人に見えてくる
 老眼でなければ見えぬ世事雑事
 老眼鏡かけて見直す外れくじ
 裸婦の像やおろ老眼鏡を出す
 老眼鏡入れた御洒落な旅靴
 癖のない人で務まるマスオサン
 あだな名人癖を上手にさがし出し
 癖のない人が唱えた重い異議
 癖のない彼が何だか物足りぬ
 暑中見舞い癖字に友の顔浮かぶ
 社長にも一癖鼻をはじる癖
 語尾上がる癖は甘えてみたい時
 自分では思わぬ癖を人が言う
 見くらべる癖がさもしい虚栄心
 擦れ違っただけでどきどき淡い恋
 もう一度検査しますと茶封筒
 子と対話ときりとさせる言葉じり
 天の句の上五が自分の句と同じ

正子 東園 年代 恵子 勝巳 光穂 武庫坊 紀乃 芳子 吐来 一壺 志洋 かつみ さとみ 久仁子 昇 久仁雄 たけし 章司 専平 ヨシ枝 フジ 泰子 和夫 桂子 忠宏 いさお

唐突に彼氏を連れて来ると言う
 正座した妻にどきりとさせられる
 ノーマーク無欲で見事勝ち進む
 ノーマークだった代打のホームラン
 有望視されてマークがきつくなる
 人混みでマークは青い野球帽
 虎マーク使うと何でも売れまっせ
 正論はき部長のマークきつくなる
 カレンダー妻のマークがよく弾む
 マークかと聞かれ家紋の自閉症

むらくも川柳会 毛利

この冷夏冷しスイカにそっぽむく
 果物の豊富な秋は肌が良い
 果物の中にも不作の声がする
 柿一ツ真つ赤に染めて陽が沈む
 直送のぶどう一粒母の味
 果物は季節知らせるカレンダー
 古里にそろう笑顔のなつかしさ
 留守番に犬も協力たのもしい
 太陽を食べた野菜で生き延びる
 病院の待合室の同窓会
 想い出にやがて涙の色がつき
 冷夏の日つけし冷房出番なく
 締切がとつくに過ぎた句をひねる
 子供達少し見ぬ間に背丈のび

サークル檸檬

西出

残暑歓迎 新米が旨くなる

重人 扶美代 庸佑 六点 一知 昭平 敏 耕策 みつこ 美代子 幸報 彰 定子 明朗 清吉 信夫 幸 ます美 八重子 恵美子 茂光 ふさえ 寿 昭子 美喜子 充子 楓案報

表紙にはほんとと花火をあげておく
 SOS 管制塔は君の胸
 真ん中へんで右往左往をしています
 隠し味にウソもすこし入れておく
 しあわせの吹き矢にあたりのうたえる
 死亡率100パーだから遺書を書く
 泣かされて私の根っこ太くなり
 蒲鉾はここと決めてる港町
 人生の渴きを癒す港の灯
 しがらみを捨てるつもりで出た港
 元氣かと聞かれいいやな日うれしい日
 とれとれの秋刀魚で活気づく港
 母の絵に港と題をつけておく

川柳塔鹿野みか月 土橋

わびしさを誘う河原の枯れすすき
 源流は深いふかあい溪の河
 両手広げ死の聖者抱くガンジス
 銀河系遠く冷たく心澄む
 大河から史跡文化の声がする
 苦も染も集めて母の大河なり
 ライバルの視線を防ぐ傘の中
 辛抱が金だと母に教えられ
 情報が速く辛抱流される
 年金を頼りひよろひよろ足運ぶ
 辛抱の木に甘い実を摘ませる
 悔しいが辛抱せねば花咲かぬ
 辛抱の長所があつて認められ
 こつそりと通い続ける猫の恋

希久子 みつ子 たもつ 義子 いわゑ 正坊 千代 保子 光久 あずき 房子 美龍 楓楽 螢報 みどり 汲香 彩子 武子 かおる 茶子 幸枝 八重子 実満 保子 永子 きみ子 かつ乃 みさ子

よく通う道にお金は落ちてない
病院へ通う目的別にある

心の通う百日 男が褪せる

幾山河ときに足跡ふり返る

雄大な絵画眺めるローレイ

源流の一雫からなる大河

煩惱の火の河があり病んでいる

人間のエゴが真つ赤な河にする

河川敷甘薯を作った戦時中

急流の名残りのこしている大河

父方と母方どちらへも通う

ありがたい今日も元気で医者に行く

同じ傷もつから心通い合う

ほのぼのと母を案する一通話

につこりと笑う地蔵を見に通う

風みどりいともとおなじ道通う

城北川柳会

川久保睦子報

法善寺夫婦善哉しか知らず

平和な世いたましい事件くり返し

貧乏臭いうちわが一つ父の部屋

一人息子嫁に占められ用がない

姉老いておんなじ愚痴をくり返す

すんだ声お酒もすすむ秋の虫

一人暮らしは波風立たず和気もなし

フアンではないが阪神勝たせたい

フセインのたつた一声寝つかれず

仏にもポリウムあげてタイガース

白檀の香り涼しいあまり風

久枝 公子

孔美子

和子

睦子

節子

富久江

盛桜

菊野

喜与志

諷人

弘子

房子

くに子

小鹿

螢

政子

あい子

春蘭

トヨ子

あやめ

東雲

久留美

達子

正子

千歩

順三

ご機嫌な日は弾んでるスニーカー
一言が多くて掘った深い溝

粗衣粗食貧乏性でない達者

盆供養この世で食べた物ばかり

好タイムグリコ一粒舐めてきた

映画はどうまく言えないラブシーン

優勝の国旗へ若者涙する

西は虎東は地震で大さわぎ

石段の数に信心ためされる

天の川流れに乗った星一つ

里帰り生まれ育った息を吸う

あすがあるないかも知れぬ布団敷く

いくつもの涙をのんだ夕茜

真つ白い明日があるから生きられる

短か世を生きた証の蟬しぐれ

ハンカチが二枚要ります泣かせます

行跡はどうあれ今日を生きている

それとなくうちは貧乏だと子は気づく

それぞれの過去には触れぬ再生紙

富柳会

池

森子報

地に生えて凸凹生きた木綿糸

掃帚する里のない子もいるクラス

写経百巻心の旅路またつづく

逆転の構図を鬼が来て崩す

少年のポケット夢が飢えている

正論を吐こう失う物はない

まん丸になったあなたに影がない

ふる里と言う灯台に子等が来る

志華子

はじめ

柳弘

さとし

史風

茂子

倫子

柳一

重人

昭子

修

とし子

千里

典子

公一

綏子

高栄

求芽

ひさ乃

奈保美

巳代一

紅紫朗

浩吉

ダン吉

アキ

キミエ

白い話はもう避けているパンの耳
負け犬のその後屈折した視線

タコ糸でがんじがらめのロースハム

時計草早く帰れと花閉じる

夕ぐれ柿の木見れば思い出す

下りたてば里が広がっている両掌

咲き切ったバラはあしたを考える

ふる里の海辺に置いて来た素顔

雑木林の中で哀しみを脱皮

頂点を目指す男の八合目

半袖の腕時計巻く朝の風

夏帽子海の音符がまだ聞けぬ

納豆の糸さよならをしたけれど

雨の音一人で聞けば楽しそう

快晴のケチケチしない潔さ

いまの今必要なのはその強気

鳥唄の芯の強さへ海の貌

善行を積んでおこうか蜘蛛の糸

三回忌良人だった風の詩

思い出の備品がひとり歩きする

八起目のチャンスくれた雨あがり

高知川柳社

川竹 松風報

割り勘で長続きする飲み仲間

割算と引き算家計火の車

できるだけ安い茶碗をぶつつける

はねられて二割悪いという保険

クス玉を割つて不況の荒波へ

夕子

初太郎

亮幹

一夫

高鷲

欣之

花梢

たかし

扶美代

誠

春蘭

鬼焼

ひろこ

宏至

東雲

奏子

萩乃

哲史

深雪

信博

文子

森子

圭二

功

快風

幸

孝雄

饅頭を割つて地蔵にお裾分け
早起きの心の弾む花扶養

出張のカバンへ傘入れて出る
合理化へ出張所員引き上げる

出張に地味なネクタイ締めさせる
出張の帰り屋台の美味しい酒

出張先の天気へ傘が思案する
出張に食いついているオンブズマン

口笛を吹けば幼い佐のいこつそつ
笛だけで踊らぬ土佐のいこつそつ

重い明日担う園児の鼓笛隊
点滴がポトリ遠くに祭り笛

川柳さんだ

北野

哲男報

開子

泰子

房江

朋月

章子

歳子

忠

哲男

正和

千代

親の息足して飛ばした紙風船

絵手紙の記念切手が素晴らしい

試食して最後に欲しい白い飯

一円を拾う勇氣はありますか

網棚へ置いた土産はあきらめる

ありがとうここにしみる言葉です

待たされた優勝決めたサヨナラ打

年輪に愛と泪の詩がある

敬老会席を満たした恵比寿顔

鼻歌が飛び出して来る子の帰省

川柳さんだ

やすき

竹萌

哲史

暖

悦子

良雄

てるみ

典雄

和江

美々

京子

圭風

開子

泰子

房江

朋月

章子

歳子

忠

哲男

正和

千代

原

みさを報

川柳塔おとり

由多香

以和方津

風花

処世術めつきり減らす言葉数

病む夫の歩幅めつきり定まらぬ

ニユータウンめつきり街の彩が出る

めつきりと老いて白髪ときほぐす

失恋の果てはめつきり軽くなり

俄雨出合いうれしい傘の中

先生が好きだと弾むランドセル

川柳のソムリエ達が出合う部屋

旅かばんお国なまりの風に会う

詩と出合い錆びたハートを輝かす

柳友の出合い宝の一ページ

同窓の出合い白髪がふえたなあ

いい出合い共に白髪が増えるまで

急いでも急がなくても死ぬだろう

急ぐ気のない子も混じる徒競走

急流の外でのんびり暮らしてる

八起き目だそんなに急ぐ事はない

急な客ソーマンでもと引きとめる

カタカナ語で急いで落とす脳の錆

落ちつこう急いでしゃべることはない

修業中急な梯子を這い上がり

急流を流れて石も丸くなる

エンマから寝耳に水のお呼び出し

川柳塔まつえ吟社

津川

紫見報

悪友に罪を負わせて朝帰る

悪友がひよつと見えた弱音聞く

悪友と呼び合っている君と僕

風を見て悪友種を蒔きに来る

艶子

登美

和子

清子

邦昭

彩子

孝子

雅通

紀子

黙光

富貴子

小生

仁子

螢

幸次郎

義弘

せつ子

道子

雄々

真一

舍人

宏章

みさを

紫見報

長吉

注湖

桂子

会いたくて殺したいほど憎い人

悪友といわれる人と仲がいい

団体が僕に時間を合わせない

団体のルールはずれる臍曲がり

酒吞まぬ人と並んだ不幸せ

団体さんお着き新婚さんこちら

団体の中で旗ふるボスが居る

団体の言う足枷につながる

百均の茶碗もあつて救われる

腹を切る覚悟で茶碗割られた

夫婦茶碗五十五年の愛をもる

共に生きた茶碗の欠片拾っている

子が巣立ち茶碗は二つだけ残る

仲のいい茶碗の音で朝が来る

要注意殺虫剤がきました

俺よりもよく鳴く虫がいる句会

腹の虫おさへ夫に従いてゆく

庭に来る虫と暮らして四季の詩

腹の虫納めどころが難しい

虫の音に残暑を癒す露天風呂

ゆっくりと走る終りのないゴール

ボールペンうれしくなつて走り出す

通り雨背中に走る音を聞く

若い日の走った記録取つてある

でこばこの人生走つて来た轍

自問自答しながら走る父の貨車

翠洋会

六吹

尚士報

蛙

すみこ

秀子

芳山

政子

義良

茂美

昭二

多賀子

きみ子

小鹿

房子

玲子

ちかし

叮紅

小生

螢

治代

知恵子

静恵

淞丘

澄子

雪代

たけし

操子

きみえ

紫見

横並びいつか遅れて宙に浮く

好きになるきつかけあれば横の席
横顔の少し淋しい女が好き

横糸は自分の意志で織りあげる

横に在るだけで安堵という夫婦

あの頃のいい思い出がくつきりと

青い空くつきり富士山見て飽かず

グアム旅行くつきり付けた水着跡

わんぱくが今は社長でおとなしい

甘やかして育てた子にはなやまされ

何もかも構つと子供育たない

兄弟喧嘩負けてそれぞれ自我育つ

虚と実の間で育つ不快感

口づけをするとき感性よく育つ

十二歳孫というには眩しすぎ

政界に育つ守銭奴モンスター

温室育ち保護色ばかり選っている

玄関の扉ローンの音で開く

蟬の抜け殻はわたくしかも知れず

コオロギの我が世が来たと月の夜

マジックも知らぬファンもバーゲンに

ロボットが万能恋が出来ぬだけ

仲秋に月と火星のランデブー

子を叱る妻の火種が飛火する

天ぶらがからりと揚がるよき日なり

忍の字で来た自負がある向う脛

川柳大阪

高木

信幹報

横綱が髭を掴んでマナーなし

ひろゑ

日の出

孝一

尚士

真理子

さと美

舞夢

絹子

桃花

東雲

春

正坊

みつ子

楓楽

昭

千歩

理恵

正雄

石舟

千梢

照子

会美

叡子

良一

恭昌

義

美籠

その内に長生き税を取られます

負けるなよいつも見ている母の星

一番星やつぱり僕に会いにくる

記念樹よ高く伸びよと枝払い

ささやかな幸せビール待つ家路

まだましや昔は食えぬ日もあった

七十歳互助のところで老いの道

ハミングのエプロンが待つ娘よ孫よ

途中下車してみたくなる山の駅

ブライドが邪魔ですんなり出ぬ答

野良仕事終える家路の茜雲

暑ければ脱いだらどうカーディガン

抽斗の二千円札で払たるか

幼子もハチ巻きしめて虎ファン

通知表家路の足の重いこと

不自由な身体の友に得る元氣

夢描く大空飽くまで澄んだ色

銀行を救う金の氣前よさ

武器持たぬ民が燃やした星条旗

年齢をどこまで下げる世の乱れ

死んだ星一つ増やした父の骨

駅裏にぬくい穴場がある家路

流れ星しつかり握った魔女の腕

孫のため戦争やめろとデモに出る

定年というお払い箱で得た自由

土壇場で仏が外す縄梯子

弥陀の手の埃を払う初夏の風

五億ほど税金払ってみたいなあ

煩惱を払って明日にまた一歩

隆司

一風

ダン吉

宏

利昭

いつふみ

喜楽

朝子

本蔭樺

民子

鉄心

かよこ

笑風

照月

柳昌

美花

洛醉

比呂志

功

川童

重人

青道

敏

一歩

柳弘

章久

まつお

信醉

川柳藤井寺（前月分） 高田美代子報

笑わせる台詞通訳苦勞する

二人居てとんちんかんんでよく笑う

ライバルの天罰笑いかみ殺す

ハイチーズ作り笑いは二度出来ぬ

ワテンボおくれで笑う夢芝居

五重丸隠して笑顔駆けてくる

吉本で笑った後の上まむし

手のうちを見せぬ微笑が怖くなる

横顔は笑っていない三枚目

笑わない美人で輪から外される

社会面笑うロボット欲しくなる

余生への序曲笑い袋を縫っている

肩書きがあるので加減して笑う

早々と海で焦がしたような顔

砂浜に好きの一字が波に消え

大海に我の悩みのみすばらし

散骨は海はイヤです泳げない

母の海素直にすがりたい挫折

海開きしてもお呼びのない水着

釣りに出た父は帰らぬ茜雲

広い海鰻も鮫も泳いでる

飛び込めば迎えてくれた母の海

当たり籤さつそく孫によき電話

真つ亦なミニールでさつそく転げました

渡りに舟さつそく承知する布団

日に干せばさつそく息をする布団

マジックへ道頓堀の大掃除

井竿

桂子

惠勇

武義

敦子

かつみ

耕策

昭子

志洋

鐘造

みつこ

扶美代

重人

登志子

美智子

一知

ヨシ枝

史郎

昌子

喜代子

絹歌

悦子

みよ子

一筒

庸佑

アヤ子

六点

一切れの鮭でさつそく父の酒
行間へすぐに割り込む無神経
ライバルの薔薇がさつそく先手打つ

倉吉川柳会

竹信

照彦報

病み疲れ小鳥の声に救われる
里がえり楽しい話提げて行く
言い寄られその気になった鶴の舞い
手乗りです鳥の世界を知りません
松茸の匂いがしたと山へ行く
大空へ大志を抱く燕の子
老い二人大事に飼おう青い鳥
シルバーのベタンク大会濡れねずみ
子育てのカラスに帽子蹴飛ばされ
シルバード金だダイヤだ白骨だ
無花果を睨むカラスと喧嘩する
喜怒哀楽楽だけ残しぼちぼちと
シルバライフ流れるままにのんびりと
美しい鳥愛されて籠の中
シルバーの損得抜きに惚れなおす
夜目遠目接近したらお婆さん
爺さんの楽しみ今日は町医者へ
なりましたシルバースhirtに座る身に
郷土芸サイトサシの頬かむり
馴染でも接近させぬ恋敵
つい掛けたシルバースhirt腰が浮く
シルバーというより僕はネズミ色
忍び足接近をして蝶写す
大山が笑ったように見える朝

栄一 美代子 瑠美子 和子 日出子 季芳 萩江 螢 玲坊 賀寿恵 ゆり子 石花菜 重忠 勝譽 龍枝 よしえ 康子 玲子 秋草 瑞子 和枝 睦子 京子 完司 博丈 次男

楽しくはないのに笑顔強いられる
迷路から抜けだし喜劇楽しもう
リハビリに耐えて万歩計楽しもう
風見鶏いつも風上うかがって
シルバーも銅もみがいて金にする
もし翼付けりや疲れるだろうなあ

ふくべむら川柳

村上

信子報

無口だが世渡りじょうず掌が温い
無口ですあまりしつこく聞かないで
ふく料理みんな無口で食べている
人生は悶え明け暮れ未知の旅
ママのさいふはカードだけおかねない
貯えがあつてカードも生きている
帰省の子カードで買えぬ味に会う
カードでは絶対買えぬ母の愛
一悶着あつて合併論消える

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

日日好日花は七彩虹の天
夏終りさあバワフルな明日の風
晴雨兼用そんな妥協で騙されぬ
躓いて座る八卦のうす灯
大切な余生ゆつくり女する
失恋も恋も見ていた月の暈
残したきつといくさになる美田
責任を逃れた時の負けいくさ
空白のメモが答を見失う
沈黙の空白愛は冷えている

忠良 雄々 十三男 泰輔 悠子 照彦 信子 静子 操子 和甫 昭恵 春恵 寛子 森子 加津子 千里 民 さらり ひさ乃 弘直 弥生 とみを 宏至

空白を埋める言葉を選っている
空白の時間が容疑深くなる
空白を埋めたありがとうの五文字
空白は書けない訳があつたから
わしの子や心配ないと言う期待
ふた親が両掌広げている故郷
ありがたい姑が元気でいてくれる
三度目の嘘親馬鹿を自認する
子沢山母は倅でたつたらろか
二三人生んで世間の仲間入り
瓢箪の駒から生れた披露宴
仕舞風呂のんびり明日を生んで居る
一芸が生んだ人生素晴らしい
かけていく少年朝をひとつ生む

岩美川柳会

石谷美恵子報

背伸びびしてとつた熟柿はおれが食う
背伸びびしたまでお辞儀をせぬ稲穂
背伸びする度に突つばる服脛
切符はないが熱々の恋三度した
こおるきが秋の切符を持って来る
幸せな夢見る切符なら買おう
貴方と乗ったことない電車の切符
極楽の切符和尚の引導だ
非売品とあるから欲しくなる切符
フルムーン切符は子等のプレゼント
すつかりと妻の忠犬八となる
ありがたいことにすつかり平和ボケ
爺さまの元気すつかり肝を抜く

已代一 庸佑 丹吉 菜月 頂留子 欣之 ミツ子 春蘭 シマ子 柳伸 幸生 東雲 一風 蟹郎 石花菜 アキ 季芳 よしえ 孝男 はるお かすみ 公乃 裕子 重忠 完司 螢

歲月がすっかり人を丸くする
頑固さもすっかり孫に溶けてくる
すっかりと夕日落ちて野良にいる
四十年やと夫婦の味が出る
リハビリにやと歩けた玉の汗
せつからも大声も老いやと慣れ
やと穂をたれた田んぼに猪め
転ぶたびわしたは面を深く彫る
影武者がうごめいている水面下
生真面目が一人いるから肩が凝る
面汚しした若き日を亡父に詫び
札束に菩薩となった鬼女の面
正面がまともに見えぬかくしごと
人生は謎解くためにあるんだね
汗かいた熱い切符と待ちぼうけ

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

何処も触らんで下さい結婚しています
何処どこ億万年の星を追う
許すこと何処まで続く母の海
句読点どこで打とうか倦怠期
金よりも温いころを子に残す
コーヒの残りいささづ知っている
蟬殻に残す一会の風の跡
残された日々晩学と言う葉
身は此処に残した拉致の子は如何に
晩節に残した仕事やり通す
逃げ道を残して叱る父の愛
想い出に残るあの夜の遠花火

節子 美恵子 一京 忠良 雅枝 和枝 公子 照子 静生 主一郎 菖子 たぬ子

疑問符が消えぬ厚いマニフェスト
疑問符に老いの細胞活気づく
少年の目の疑問符にある未来
信頼の心が疑問符に揺れる
割り勘に電卓借りてくる幹事
きつちりと時間に来たが待ちぼうけ
きつちりと計算は合う呱呱の声
波がしら言いたいことがたんとある
彼の名の砂文字波が消していく
とびはねる波を知らない深海魚
波風に揉まれてまいる苦勞人
自由化の波に浮く人沈む人
波頭無限の力見せつける
灯台の子守唄聞く波枕
美しい蝶は過去など語らない
傾いた絆で回る夫婦独楽
遺言をそろそろ書くか曲り角
無駄骨の花が忘れた頃に咲く

川柳藤井寺

高田美代子報

阪神が勝ったと言うてもう一本
重い足屋台が軽くしてくれる
引越して先ずは酒屋を探すなり
煙草やめた酒は死ぬまで飲むつもり
家まで居酒屋という閑所あり
酒断ちの誓いは三日とは持たず
けとはしてみたいあなたのビール腹
駅裏の酒駅裏の顔で飲む
飲兵衛の横に座っただけで酔う

重人 スミ子 八斗録 庸佑 尚士 泰雄 典子 照子 東雲 武史 秀夫 求芽 一央 五月 砂輝守 萬的 諷云児 耕策 喜代子 武義 志洋 栄一 史郎 井竿 重人 桂子

禁酒禁煙それで短命だった亡父
一口の酒で天女になるわたし
天国の反動らしい二日酔い
北斗星とお前と語る缶ビール
熱燗とおでんが売れる寒い夏
釣書きに書ける免許をいろいろと
時の流れにまどろんでいる免許
無免許の妻色々口を出す
お茶お華免許だけは取ったけど
人間の免許を貰う呱呱の声
主婦業の飯色添えて嫁がせる
ポトワインに負けビポーの世話になる
天高く河内葡萄の出荷時
聞き役にまわり一房食べつくす
ぶどうの木曲けて丸めてオブジェです
マスカットむく指先のもの想い
干し葡萄噛めば浮世の味がする
首洗うようにマスカットを洗う
マスカット女の鼻が高過ぎる
失敗へ自分ひとりを責め過ぎる
終戦の日私は母の膝にいた

川柳ふうもん吟社

杉本

要介護だろう天使も羽根が折れ
炎天下アリは未来に夢託す
絵に描いた餅を総裁選に貼る
忘れんぞ逃した鯛は太かった
悪い子の数だけ悪い親もいる
ゲリラ戦地球の鳴咽きこえぬか

絹歌 六つこ 一筒 半蔵門 昌子 瑠美子 アヤ子 正子 鐘造 かつみ 惠勇 雅枝 婦美枝 ヨシ枝 扶美代 淑子 美代子 昭子 庸佑 悦子 洋々 美雪 忠良 蟹郎 節子 美恵子

知恵較べ敵はゲリラの猪カラス
八月に母と泣いた夜忘れんぞ
蟬時雨命の炎燃やして
優勝へ美酒の旨さは忘れんぞ
忘れんぞ戦に負けた時のこと

目には目とゲリラはきつと眠れない
燃えつきた炎よ明日は語れない
炎天下虫は美声で子等誘う
夢を追う決意となつてくる
離婚というゲリラが家を掻き乱す
惜敗の胸の炎は明日に活き
炎天が忍しい冷夏海の家
老婆心すんなり嫁とかみあわぬ
忘れんぞ終戦の日は暑かった
テロゲリラ地球を脅かし眠らせぬ
迎え火のゆらぐ炎に母をみる
本心にまんぢやら混ぜて言つてみる
神さまの死角を突いてくるゲリラ
ストーリー勝手に変えたのは神が
遺骨拾う炎の余熱弟よ
お経読むリズムに合わせ炎揺れ
背で示す親の生き方忘れんぞ
ゲリラ戦勝つてお日さま拝めない
世直しのゲリラへ若い鞭の音

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

残り布想い出つまり逆戻り
カンツォーネ聴いてうっとりハーモニ
闇の中うっとりとする薪能

知香子
和子
慶子

裕花
夢路
朋恵
圭三郎
螢

無限
はつ江
のり代
春名
茂登子
和代
毅

益子
一京
昌鼓
京子
孝明
一粹
一瑠

志緒
金祥
宗明
善夫
孝男

志緒
金祥
宗明
善夫
孝男

志緒
金祥
宗明
善夫
孝男

志緒
金祥
宗明
善夫
孝男

志緒
金祥
宗明
善夫
孝男

うっとり岬の風の声を聞く
松園の絵に囲まれて世を忘れ
虫の音にうっとり夜長ワイン飲む
うっとりとする微笑みに出逢えた日
雨あがり月がきれいに磨かれる
ピカピカのキッチン料理してるのか
太陽と語りあしたの鎌磨く
歯を磨く心の髪も磨けたら
さりげなく親のルールで子は育ち
色褪せたルール大事に守つてる
ルール違反自分を許せない律義
お互いに先に死にたい夫婦です
まだ夢は捨てない古希のあばら骨
鎧兜着た武士のよう蟬が死に
私を責める飾らぬ妻の指
どの趣味も細く長くをモットーに
充電と言つて旅する島めぐり
夏が近くやっぱり独りの飯を炊く
有難うとなかなか言えぬ人がいる
昭和史を背負つた足が痛みだす
二番目を泳ぐ河童の処世術
人嫌いの家の巣箱を出たがらぬ

川柳やがわ

平松かすみ報

釣り人の無言へ声もかけられず
釣り人が並ぶ平和のありがたさ
釣られぞうおいしいエサが付いている
我が魚拓子もおいそれと超えるまい
悠久の時を流して釣る無心

博泉
一炊
恵子
修成
亜成

萬的
緑骨
巴子
見清
求芽
博子
諷云児
啓生
タミ
寿美子
庸佑
千津子
石舟
都代子
重人
玲子
春
郁子
則彦
満寿巳
正坊
蛙

雨続き夏を忘れた温度計
甲子園あの熱鬧は計れない
ではんが忘れぬ亡母の体温計
心地よい温度介護の風呂加減
陶工は夢たぎらせて温度よむ
子の病自家中毒とあわてさせ
満員車ここにケイタイ中毒者
ニコチン中毒で高額納税者
中毒をしないさせない母の愛
ブラックを飲みみりだす朝のペン
催促へ回す資金を借りに行く
餌催促暴力狼のひつたくり
子に投資無利子無担保無催促
やミ金の催促目玉売りなはれ
催促がまだいっぺんもない怖さ
妻の口癖何時幸せにしてくれる
仏壇へ迎えにきてと老いの愚痴
見て見ぬが出来ず騒ぎに巻き込まれ
嫌いだが骨のためならヨーグルト
敗戦の日も飛んでいた赤とんぼ
口ポットになつて回転寿司食べる
今日三回食べた脳に言いきかす
惜敗も球児に悔いはないだろう
年金支給ももうすぐ死語になりそうだ
村の道踏み抜きそうな阿波踊り

熱がさめよくよく見ればただの人
砂時計いつも倒して歯を磨く

史
もこ

とし子
高栄
洋
朝子
一笑
かすみ
祥昭
三郎
光子
庸佑
三峰
勇太郎
柳弘
忠央
弘一
良三
ルイ子
さち子
利昭
西
たもつ
仁清
度
幸雄報

湯の宿の浴衣に老婆が華やいで
 続いてます騙し騙され夫婦仲
 少しだけ騙されていい美人なら
 半世紀騙されていい調子者
 おむすびに冷めても温い思いやり
 砂時計横目でにらみ長電話
 参道の砂利が煩悩捨てさせる
 土砂降りに軒下借りる女傘
 鳴き砂の涙知らない大都会
 浴衣縫う亡母の手際が日交に
 遠い日の砂浜を恋う足の裏
 砂浜に帽子が一つ夏終る
 口かたい貝です砂は吐きません
 病名を騙し笑顔で看取る日々
 古い砂嚙んで男の顔となる
 冷めた茶を挟んで続く無言劇
 泣き砂を踏むと私の影も泣く
 病名は騙されておくちろ虫
 騙されて乗った積りの宝船
 拉致を見た浜辺の砂の口惜しさ
 酔い醒めの気だるさ甘さ夢うつ

川柳クラブわたの花 吉村 一風報

盆栽の梅もふくらみ春を呼ぶ
 荒波にこぶし固めて新生児
 震度六揺れおさまって生きかえる
 ひまわりの園東の間乙女バスツアー
 追憶が宙に弾ける遠花火
 禁煙した日から家族の目が温い

淳司 敬二 良男 輝子 三和子 武男 和代 英美 芳野 マサ 一慧 靖子 正美 けい子 和子 富美子 潤子 正子 幸雄 直樹

汗かいて鼻たらしる夏の風邪
 頑固さも足の裏まで親に似る
 夏が好きビールと奴もつと好き
 重き餌を引っぱり行くも蟻の意地
 トラキチの飛び込みを待つ戎橋
 ふるさとの海は麦わら待つ似合う
 やんわりと親の意見も言っておく
 運が罪か拾った馬券大当り
 賽銭が頭上飛び交う恵比須さん
 親孝行せぬ子が葬儀取り仕切る
 大物ぞろい小粒ぞろいの牙に負け
 きびしくも不況の波から生む英知
 いい知恵が生んだ結果だ胸をはる
 実印を押して白紙に戻れない
 出張といつもそうそつくゴルフ好き
 一粒の梅干し添える母の知恵
 一匹の蚊が妨げるいい眠り
 ひらがなをはぐすと花の詩が生れ
 いい目覚め今日もカゴメの輪の中へ
 おいしいの一言添えて出るのれん
 ウツの日は笑顔うまれる街に出る
 わが家の歩と金になれと塾生中
 新品の靴下揃えプラン練る
 床の間も格好だけのマイホーム

まさこ いつふみ 義明 春江 順生 知佐子 美代子 民 明 八寿子 はじむ 道子 宏至 キク子 君江 宏 一風 さらり 欣子 幸枝 晴美 俊子 恭一

山頂に立てば味方も敵もない
 霧晴れて目の前全部上高地
 星が降る音聴いている八ヶ岳
 里芋の煮つころがいてへ帰省する
 煮くすれはみんなわたしが食べてます
 もてなすは夜景涼風二十階
 うちのタマアはし所知つて
 クーラーを付けてアイロン掛けてます
 涼風とパノラマを売る峠茶屋
 火をつけた女涼しい顔でいる
 ざりざりの線まで見せて涼しそ
 恋の歌うたう陽気な米寿です
 肉ジャガを作れば私に分る
 お月さんこいも上手にたけました
 薄味の煮物に醤油かけないで
 料亭の味を盗んできたところ火
 山びこがふわーと母を呼び返す
 山の道古代ロマンが行き来する
 されど煮物バリエーションは豊富です
 涼しげな目に作り話話せない
 窓こしのせせらぎを聞く旅がらす
 煮くすれてことさら旨い母の味
 故郷のやさしさ見せて讃岐富士
 こおろぎの美しい声ベッドまで
 もめごとへ涼しい顔を押しておす
 涼しさに泣かされている米農家
 涼しいが夜の吊り橋恐ろしい
 嫁さんが煮物上手で得してる

惠勇 時雄 半銭 天笑 冬虹 五月 忠敬 さくら 像山 日の出 かりん 扶美代 りつえ 千代 なぎさ 潤子 舞夢 伽羅 つづや 文 梓 好 八千代 みつこ 玄也 公誠 深雪

柳界展望

第79回 大阪川柳の会

日時—12月4日(木) 17時開場
会場—サンケイビル本館3F322号室
会場—サンケイビル本館3F322号室
題と選者—△減る・中田たつお △前・泉
比呂史 △約束・河内天笑 △今年の回顧・
磯野いさむ
各題2句 席題なし 会費千円 18時締切

☆第55回西日本川柳大会は
9月7日386名の参加を得
て、久米南町文化センター
で開催された。当日の本社
関係者の秀句並びに受賞者
は次のとおり。

〈山陽放送局長賞〉

岸本 宏章

〈久米南町観光協会会長賞〉

岸本 孝子

〈久米南町スポーツ・

文化振興基金会長賞〉

新家 完司

〈秀句〉

民宿の地酒無口を喋らせ
る 安平次弘道
妻楊子一本あればよい屋
台 板尾 岳人
風上にて情報を聞きも
らす 長浜 美龍

☆第9回薬大会で、参加者
406名中和歌山市の古久保和
子さんが天位を獲得した。

犬かきでも僕は戸籍筆頭人

☆第11回和歌山県川柳大会
は9月14日、田辺市紀南文
化会館で194名の参加を得て
開催された。本社関係の受
賞者は次のとおり。

〈県議会議長賞〉

一匹の金魚と起きて寝て
笑う 牛尾 緑良

☆第8回鶴彬川柳大会の選
考結果が9月14日発表。大
賞は西宮の舟辺隆男氏。

毎日が日曜という刑もある
〈入選〉 三宅 保州

☆第17回堺市民芸術祭川柳
大会は、9月14日160名の
参加を得て梅文化会館で開

催された。当日の本社関係
者秀句は次のとおり。

顔の皺ほどよく増えて姑
の座に 河内 月子

幸いにうちは障子の棧が
ない 志田 千代

ラビアンローズと一緒に
届くEメール 藤田 泰子

満月がずばりわたしを切
つてくる 西口いわゑ

☆木曾川川柳大会は、9月
21日犬山市国際観光センタ
ーで開催された。当日の天
位は次のとおり。

いつ来ても花が咲いている
坂の家 小池しげお

☆第75回奈良県川柳大会は
9月28日148名の参加を得て、
吉野山国際観光旅館「さこ
や」で開催された。当日の

新同人紹介

多^{たく}久^く和^わ 敬^{けい}子^こ
—れいじ・きみえ推薦

持^{もち}田^だ 多^た輝^き子^こ
—れいじ・きみえ推薦

野^の田^だ 栄^{えい}呼^こ
—天笑・シマ子・セツ子推薦

桑^{くわ}田^だ ゆ^ゆき^きの
—天笑・シマ子・セツ子推薦

柿^{かき}花^{はな} 和^{かず}夫^お
—薫風・利昭・まさよ・汀推薦

本社関係者秀句

バージンロード今日一日
のシンデレラ 池 森子
神々の恵み忘れている祭
り 米田 恭昌

☆和歌山県川柳協会(牛尾
緑良会長)は読売新聞社後
援により、小中学生を対象
にジュニア誌上川柳大会を
開催。331名の応募があり
9月24日読売新聞和歌山版
で発表された。

▼出版▲

○近藤佳子さん(鳥取市)

は、句集『曼珠沙華』を出
版。B6判98頁。序文は原
みさを氏(P107に紹介)
○岩佐ダン吉氏(岸和田市)
は、句文集『熱い汗』を出
版。A5判。250頁価二千円
序文橋高薫風名誉主幹 新
葉館出版発行(P108に紹介)
▽人事動向△

○薫風名誉主幹は9月7日
の西日本川柳大会に、選者
として岡山県久米南町行。
岳人理事長同行。
○天笑主幹は9月21日、木

原稿募集

2月号掲載の同人の原稿を募ります。

テーマは「心に残る一冊」。これまでに読んだ本
の中で感激をした本、人に薦めたい本など、広
く本にまつわるエッセーのご応募をお待ちして
います。

締切りは12月15日 400字詰原稿用紙

一枚半〜二枚(600字〜800字) 本社事務所宛

ただし、原稿の採否、添削は編集部に一任して
下さい。

編集部

曾川川柳大会選者として大
山市行。

○NHK学園発行の『川柳
春秋』第71号の「この人に
聞く」に本社参与の八木千
代さんが登場、大木俊秀氏
のインタビュ記事が掲載
されている。また、同号に

は高瀬霜石・木本朱夏両氏
の「一人10句」も掲載して
いる。

○藤間志緑こと大塚節子さ
ん(同人・大阪市)は「喜
寿の心祝の会」を、9月15

日国立文楽劇場で主催。3
歳からの精進の集大成とし
て「隅田川」を踊った。

○高杉千歩さん(同人。八
尾市)は、10月17日・22日
エル・おおさかで開催され
た大阪女流日本画展に、21
号の花菖蒲を出品した。

○本誌の表紙を飾って下さ
っている直原玉青画伯は、

8月1日・10月5日上寿100
歳記念展を淡路島滝川美術

削除

10月号発表の愛染帖賞、茴香の花賞、各地柳壇賞
の次の準賞作品並びに候補作品は、自選集作家の
ため、お詫びして削除します。

愛染帖賞準賞 齊藤 昴(84頁)
一路賞候補 土橋 螢(86頁)
各地柳壇賞候補 岡川 洋々(87頁)

館玉青館で、9月25日・10
月1日新作俳画展を守口市
京阪百貨店で開催され、百
歳の意気軒昂振りを見せ、
好評を博した。

▽改名△

○長浜澄子さん(同人名簿
P16)は、9月から美籠
(みこ)と改名。

▼計報▲

■岡本久美子さん(同人・
大阪市・岡本久峰氏夫人)
は、9月12日病気のため逝
去。81歳。

▽訂正とお詫△

9月号P89上段6行目、
富美子↓富喜子
10月号P101下段8行目、
富美子↓富喜子
にアウイーナ大阪207号

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	13日(木)午後1時から 冷える(共選)・和服 え・ひ・め(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
岸和田 川柳会	15日(土)午後1時半から 抜打・狙う・呑気・菌切れ	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川柳 藤井寺	16日(日)午後1時から 少し・せっかち	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公園1-105 高田美代子
岬川柳会	16日(日)午後1時半から 余白・時間・カラオケ・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	17日(月)午後1時から ピストル・久しい・勇氣 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	20日(木)正午から 許す・楽天家・ゆっくり 線・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
城北 川柳会	22日(土)午後1時から 詰める・リスト・尾・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
東大阪市 川柳 同好会	22日(土)午後6時から 視線・のどか・散る・欲	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市民 川柳会	23日(日)午後1時から 細工・縫う・メッセージ 「せめて」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷺駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	23日(日)午後1時から 虫・セーフ・いじらしい	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
川柳塔 みぞくち	24日(月)午後7時半から 強がり・少年・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南大阪 川柳会	26日(水)午後6時から 無理・芽・もし・再発	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪府天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
京都 塔の会	27日(木) 吟 行 朱・割る・本場・当日雑感	11月号 (P.109参照) 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳クラブ わたの花	28日(金)午前10時から 敬・弾む・余白・雑詠	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6629-6914) へご連絡ください。

11月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
富柳会	1日(土)午後12時半から 第53回 富田林市民文化祭 川柳大会	10月号 (P.130参照) 富田林市立中央公民館2Fホール
倉吉 川柳会	1日(土)午後1時から 果物・天気・保つ	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳 ねやがわ	3日(祝)正午から 第27回寝屋川市民川柳大会	10月号 (P.130参照) 寝屋川市立総合センター4F 自習室
川柳 な 塔 ら	5日(水)午後1時から 這う・スタイル・運動	奈良市立中央公民館4F (近鉄奈良④出口歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼崎 いくしま	7日(金)午後1時から まだまだ・予感・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川柳 打 吹 塔	8日(土)午後1時から 真実・かさかさ・なだめる	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博丈
川柳 まつえ 塔	8日(土)午後1時半から 手品・年頃・証	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崙丘
川柳 みちのく 塔	8日(土)午後4時から 甘い・根気・ぐずぐず	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
八尾市民 川柳会	9日(日)午後1時から 故・飾る・追加・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳 わかやま 塔	9日(日)午後1時から 昨日・ミステリー・ところで 「ない・ず(助動詞、いずれでも可)」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	10日(月)午後1時から 近所・脱ぐ・ばたばた・自由吟	(会場変更) 西宮北口南自治会館 阪急西宮北口南西出口・西200m緑地公園内 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ
川柳 唐 津 塔	10日(月)午後1時半から 時・鉛筆・知恵	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
ほたる 川柳 同好会	11日(火)午後1時から 花・くすぐる・しみじみ	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
尼崎 尾 浜 川柳会	11日(火)午後1時半から パン・泣く・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑧番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太

編集後記

☆第9回川柳塔まつりは、同人・誌友27名の皆さんで盛り上げていただき、厚くお礼申し上げます。

☆表紙の裏に掲載している通り、11～3月は本社句会が、午後1時からとなりますので注意して下さい。

☆私ごとで申し訳ないが、相変らず不眠に悩まされている。記憶を辿れば物心ついて以来、ずっとこの悩みを抱えてきたように思う。そうは言っても、別に病気になるわけでもなく、頭が変にもならず（人から見れば変なのかも）暮らしている。だから、そんなに気にするほどのことでないのかも知れないけれど……。

☆まず、寝つかれない。布団に入って本を読んでいると眠くなる。そこで、電気

を消して体勢を整えようと、さあ眠れない。一時、二時、三時と、ついスイッチを入れてしまった深夜放送が教えてくれる。

☆で、朝は遅くまで眠れるかといえさにあらず。早朝に目が覚めてしまう。☆毎日がこうとは限らないが、とういて睡眠時間が足りないから、昼間じつとしていると、ふつと短時間眠ってしまう。どうもこれで帳尻を合わせているらしい。

それが、映画の途中とか講演を聴いている時で、悔しく恥ずかしい思いをししばしばしている。

☆睡眠障害は加齢と共に進んでいく。けれど、良寛さんを真似て「眠れぬ時には眠らないのがよく候」と聞き直るとしよう。深夜放送は中々楽しいし、ときおり一句ものすることもあ

るのだから……。

(ふ)

ひとこと

川柳との出会い

下手なゴルフの他これと言った趣味もなく、退職の直後で暇を持て余していた私に、友人から田辺聖子著「道頓堀の雨に別れて以来なり」を読めと薦められた。川柳について全く知識はなかったが、あの分厚い上下巻を読み終わって、川柳は面白そうだし呆け防止にもなるかもしれないと、軽い気持ちで川柳教室に通い始めたのが

川柳との出会いである。

川柳塔誌を購読して投句を始めると共に、句会へも誘われて出席しだした。そして何よりも朝日な

にわ柳壇での入選に勇気づけられ、急速に川柳との付き合いが深まってしまった。

その後会社のOB会で川柳同好会を始めたり、今では川柳がりタイア後の私の生活の大きな部分を占めだしている。

(村上 玄也)

○「秋」たけなわである。芸術の秋、読書の秋、食欲の秋、すこしいただけないが台風

の秋、すこしいただけないが台風の秋でもある。句材には秋西、秋の虹、秋の夜長などなどことかかぬ。

○四季があるから日本は美しく芸術文化等が伝承され、いまに受け継がれていることが誇りであった。それが近頃少し狂ってきたのではと思う。杞憂であればよいのだがとつくづく思う。

○しかし、気候がずれたり、花をバイオで必要な時期に出荷をしたり、四季を問わず店頭には並ぶ野菜が増えたり、へんな日本語が増えたりと思

い迷うことが多すぎえられる人生なり。

(よ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（1月号）」

地名

姓・雅号

きりとらせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

1月号発表(11月15日締切)

川柳塔(8句)	河内天笑 選
水煙抄(8句)	板尾岳人 選
愛染帖(3句)	波多野五楽庵 選
茴香の花(3句)	藤田泰子 選
吟題(3句)	「輝く」
米田恭昌 選	
「てのひら」	
佐野木みえ 選	
「氷柱」	
緒方美津子 選	

初歩教室「今年」(3句) 三宅保州担当

2月号
課題吟「つじつま」「巻く」
「具合」
初歩教室「雪」

本社11月句会

とき 11月6日(木)午後1時・2時半締切
―開催時間にご注意下さい。―

ところ アウィーナ大阪 4階 金剛東
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441

兼題 「拾う」 黒田能子 選
「拭う」 山本義子 選
「干す」 塩満敏 選
「ゆさゆさ」 海老池洋 選
「送る」 河内天笑 選

席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

本社12月句会 8日(月)午後1時から

兼題 「荒れる」「温い」「ほのぼの」
「クリスマス」「隠す」

第22年度 夜市川柳募集

第6回「食べる」 恒松町紅選
ハガキに3句 11月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2)愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限り、ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
 - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いいたします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

二〇三三年平成十五年十一月一日発行

編集兼 発行人 河内権治

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

振替 〇〇九八〇一五 一三三六八番
電話(〇六)六六一六九一四番

紀州梅干



おいしさ、田舎づくり
Sankō 三幸農園

〒640-8412 和歌山市狐島508

TEL 073-455-8899 FAX 073-455-8773

地方発送承ります。

商品パンフレット差し上げます。

ご注文は ☎0120-04-8899

●インターネットでも、ご覧頂けます。

<http://www.naxnet.or.jp/~sanko>

医療法人社団

湯川胃腸病院

健康保険取扱

消化器科（内科・外科）

放射線科

ホスピス

診療時間 月～金 9:00～17:00

土 9:00～13:00

電話 大阪 6771-4861(代)

<http://www.yukawa.or.jp>

〒543-0033

大阪市天王寺区堂ヶ芝2丁目10-2

JR 大阪環状線桃谷駅徒歩3分